県営ほ場整備事業（元永地区） 関係埋蔵文化財発掘調査報告３

辻 垣 下 出 口 遺 跡

行橋市文化財調査報告書　第 66 集

２０２０

行 橋 市 教 育 委 員 会

県営ほ場整備事業（元永地区）　関係埋蔵文化財発掘調査報告３

辻　垣　下　出　口　遺　跡

行橋市文化財調査報告書　第 66 集

２０２０

行橋市教育委員会

辻垣下出口遺跡遠景（南から）

序

本書は、平成13年度に県営ほ場整備事業（元永地区）の工事に先立ち実施しました、辻垣下出口遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する仲津校区は出土品が国の重要文化財に指定されている稲童古墳群や京都平野の最後の前方後円墳とされる隼人塚古墳など多くの遺跡が知られています。今回の調査では主に弥生時代から鎌倉時代に至る多様な遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県行橋農林事務所、元永土地改良区、福岡県教育委員会、地元区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

令和２年３月

行橋市教育委員会
教育長　長尾 明美

例　言

1．　本書は、福岡県行橋市大字辻垣 527・528・529・536 に所在する辻垣下出口遺跡の発掘調査報告書である。
県営ほ場整備事業（元永地区）の工事に伴い、国、県の補助を受け、平成 13 年度に発掘調査を実施した。

2．　調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。
調査組織は第 1 章第 2 節に記す。

3．　遺構の実測は伊藤昌広、工藤祥子、佐藤愛子、谷口貞子、中島裕子、平川倫広、古木初子、本田久代が行った。

4．　遺構写真は伊藤が撮影した。空中写真撮影は有限会社スカイサーベイに委託した。

5．　遺構図の整理は奥野康代、鎌田尚子、松尾留衣、山口裕平が行った。

6．　遺物の接合・復元は、河田まき子、所村裕香、中川美登里が行った。

7．　遺物の実測は奥野、河田、所村、中川、山口が行った。

8．　遺物写真は山口が撮影した。

9．　遺構・遺物等図面の浄書は奥野、鎌田、松尾が行った。

１０．本書に使用した遺構の略号は SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SE（井戸）、SD（溝）、SA（柵列）、SX（不明遺構）、SP（柱穴）である。

１１．出土した陶磁器の分類は太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』（太宰府市の文化財第 49 集）による。

１２．本書に使用した方位は、世界測地系に基づく座標北である。

１３．報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。

１４．本書の執筆および編集は、山口が行った。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　経緯と経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　辻垣下出口遺跡 …… 7
第４章　結語 …… 45

図 版 目 次

巻頭図版１　辻垣下出口遺跡（南から）
図　版　１　辻垣下出口遺跡の位置
図　版　２　辻垣下出口遺跡全景（上が南東）
図　版　３　１．SK011 遺物出土状況（南東から）
　２．SK011（南東から）
　３．SE041（南東から）
図　版　４　１．SD051（南西から）
　２．SD051 白磁小壺出土状況
　３．SD052（北東から）
図　版　５　出土遺物１
図　版　６　出土遺物２
図　版　７　出土遺物３
図　版　８　出土遺物４

挿 図 目 次

第　１　図　辻垣下出口遺跡調査区域図（1/10,000）
第　２　図　辻垣下出口遺跡の位置（1/2,000,000）
第　３　図　行橋市周辺の地形分類図（1/100,000）
第　４　図　行橋市周辺の地質図（1/100,000）
第　５　図　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）
第　６　図　SB 001 実測図（1/60）
第　７　図　辻垣下出口遺跡遺構配置図（1/400）

第　8　図　　SK011 実測図（1/60）
第　9　図　　SK011 出土遺物実測図（1/3）
第　10　図　　SK012・013 実測図（1/60）
第　11　図　　SK012 出土遺物実測図（1/3）
第　12　図　　SK014・015 実測図（1/60）
第　13　図　　SK014 出土遺物実測図（1/3）
第　14　図　　SK016 実測図（1/60）
第　15　図　　SK016 出土遺物実測図（1/3）
第　16　図　　SK017 実測図（1/60）
第　17　図　　SK017 出土遺物実測図（1/3）
第　18　図　　SK018 実測図（1/60）
第　19　図　　SK018 出土遺物実測図（1/3）
第　20　図　　SK019 実測図（1/60）
第　21　図　　SK019 出土遺物実測図（1/3）
第　22　図　　SK020 実測図（1/60）
第　23　図　　SK020 出土遺物実測図（1/3）
第　24　図　　SK021・022 実測図（1/60）
第　25　図　　SK023・024 実測図（1/60）
第　26　図　　SK023 出土遺物実測図（1/3）
第　27　図　　SK025 実測図（1/60）
第　28　図　　SK025 出土遺物実測図（1/3）
第　29　図　　SK026 実測図（1/60）
第　30　図　　SK026 出土遺物実測図（1/3）
第　31　図　　SK027 実測図（1/60）
第　32　図　　SK027 出土遺物実測図（1/3）
第　33　図　　SK028 実測図（1/60）
第　34　図　　SK028 出土遺物実測図（1/3）
第　35　図　　SK029・030 実測図（1/60）
第　36　図　　SK031 実測図（1/60）
第　37　図　　SK031 出土遺物実測図（1/3）
第　38　図　　SK032 ～ 034 実測図（1/60）
第　39　図　　SE041 実測図（1/60）
第　40　図　　SD051 実測図（1/200）
第　41　図　　SD051 出土遺物実測図１（1/3）
第　42　図　　SD051 出土遺物実測図２（1/3）
第　43　図　　SD051 出土遺物実測図３（1/2・1/3）
第　44　図　　SD052 実測図（1/200）
第　45　図　　SD052 出土遺物実測図（1/2・1/3）
第　46　図　　SD053 実測図（1/200）

第　47　図　　SD053 出土遺物実測図（1/3）
第　48　図　　SD054 実測図（1/300）
第　49　図　　SD054 出土遺物実測図（1/3）
第　50　図　　SD055 実測図（1/200）
第　51　図　　SD055 出土遺物実測図（1/2・1/3）
第　52　図　　SD056 実測図（1/100）
第　53　図　　SD056 出土遺物実測図（1/3）
第　54　図　　SD057 実測図（1/200）
第　55　図　　SD057 出土遺物実測図（1/3）
第　56　図　　SD058 実測図（1/200）
第　57　図　　SD058 出土遺物実測図（1/3）
第　58　図　　SD059 実測図（1/100）
第　59　図　　SD059 出土遺物実測図（1/3）
第　60　図　　SD060 ～ 062 実測図（1/100）
第　61　図　　SD063 実測図（1/200）
第　62　図　　SD063 出土遺物実測図（1/3）
第　63　図　　SD064 実測図（1/200）
第　64　図　　SD064・SX084 出土遺物実測図（1/3）
第　65　図　　SD065 実測図（1/100）
第　66　図　　SD065 出土遺物実測図（1/3）
第　67　図　　SA071・072 実測図（1/60）
第　68　図　　SA071 出土遺物実測図（1/3）
第　69　図　　SX081 ～ 084 実測図（1/100）
第　70　図　　SX081 出土遺物実測図（1/3）
第　71　図　　SP 出土遺物実測図（1/3）
第　72　図　　表土出土遺物実測図 1（1/3）
第　73　図　　表土出土遺物実測図 2（1/2・1/3）
第　74　図　　包含層トレンチ出土遺物実測図（1/3）

表 目 次

表　　1　　出土遺物観察表 1
表　　2　　出土遺物観察表 2
表　　3　　出土遺物観察表 3
表　　4　　出土遺物観察表 4
表　　5　　出土遺物観察表 5
表　　6　　出土遺物観察表 6
表　　7　　出土遺物観察表 7

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

本書で報告する辻垣下出口遺跡は、県営ほ場整備事業元永地区の工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査で発見された遺跡である。平成 12 年度に試掘調査を行い、辻垣下出口遺跡、代遺跡の２遺跡を確認した。このことより行橋市教育委員会は事業主体である福岡県行橋農林事務所および元永土地改良区と協議を行い、平成 13 年度に辻垣下出口遺跡の 4,900㎡を対象に記録保存を目的とした発掘調査を実施する運びとなった。

発掘調査には平成 13 年４月 13 日に着手した。当初は調査の妨げになるビニールハウスの骨組み等の撤去を行い、５月 14 日より重機による表土剥ぎを開始した。５月 21 日から発掘作業員による遺構検出および掘り下げを開始した。それと併行し、６月４日より調査区内に 10ｍグリッドを設定し、縮尺 100 分の１で平板測量図（遺構配置図）の作成を開始した。６月 12 日からは、縮尺 20 分の１で遺構の実測も行っていった。遺構の写真撮影は 35㎜白黒フィルム、35㎜カラーリバーサルフィルムを使用し、調査の進展に沿って順次行った。また調査終盤の８月 10 日には、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。８月 28 日に調査機材等を撤収し、９月３日に発掘調査を終了した。

遺物の復元や実測、遺構図の製図などの整理作業は、調査担当者の伊藤昌広の下で平成 13 年度より断続的に行われてきた。しかし平成 24 年度に調査を担当した伊藤が急逝したため、これらの作業を山口裕平が引き継ぐこととなった。そして平成 31 年度に国庫補助事業として整理作業を本格的に行い、本書を刊行する運びとなった。調査体制は次節に示す通りである。

辻垣下出口遺跡を調査中の伊藤昌広氏

第２節　調査体制

現地調査（平成 13 年度）

総　括	行橋市教育委員会	教育長	徳永 文晤
		教育部長	武内　清
調　査		教育部 生涯学習課長	森 敬太郎
		教育部 生涯学習課長補佐兼文化係長	奥　広俊
		教育部 生涯学習課 文化係	細川 義之
		教育部 生涯学習課 文化係	小川 秀樹
		教育部 生涯学習課 文化係	伊藤 昌広（調査担当）
		教育部 生涯学習課 文化係	中原　博
庶　務		教育部 生涯学習課 文化係	上原 圭三

発掘調査作業員

赤波江 静代　秋永 芳子　朝比奈 日波　有松 直子　池田 保　池部 ミエコ　猪之鼻 範夫
今村 美香　上田 奈緒美　浦田 秋子　小野田 トミヱ　加来 博　角田 義彦　北本 悦子
工藤 祥子　笹原 トミエ　佐藤 愛子　清水 勝子　志水 ゆき子　新保 初枝　谷口 貞子
千葉 保保　中島 裕子　納富 真砂子　浜本 義子　原田 アサ子　平川 倫広　廣津 宏一
福田 トシ子　古木 初子　本田 久代　宮崎 信美　村上 眞弓　村田 イツ子　山田 一友
吉松 勇

報告書作成（平成 31 年度〔令和元年度〕）

総　括	行橋市教育委員会	教育長	笹山 忠則（～ 4 月 30 日）
		教育長	長尾 明美（1 月 1 日～）
		教育部長	米谷 友宏
調　査		教育部 文化課長	小川 秀樹
		教育部 文化課 文化財保護係長	山口 裕平（報告書担当）
		教育部 文化課 文化財保護係	天野正太郎
		教育部 文化課 文化財保護係	笠置 拓也
庶　務		教育部 文化課 文化振興係長	吉兼 三佳
		教育部 文化課 文化振興係	姫野 和彦
		教育部 文化課 文化振興係	長尾 萌佳

整理作業員

奥野 康代　鎌田 尚子　河田まき子　所村裕香　中川美登里　松尾 留衣

第 1 図　辻垣下出口遺跡調査区域図（1/10,000）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に位置する（第２図）。この地域は明治 23 年（1890）の郡制公布で置かれた京都郡、築上郡の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口 73,294 人（令和２年１月末日現在）を擁す。市域は東に周防灘を望む京都平野の中央部を占める。この平野は律令制以降、上述の郡制公布まで置かれた京都郡、仲津郡、築城郡の３つの郡域にまたがるが、行橋市は市の北側が旧京都郡域、南側が旧仲津郡域にあたる。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と市町境を画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、覗山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峡川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、周防灘に注ぐ。

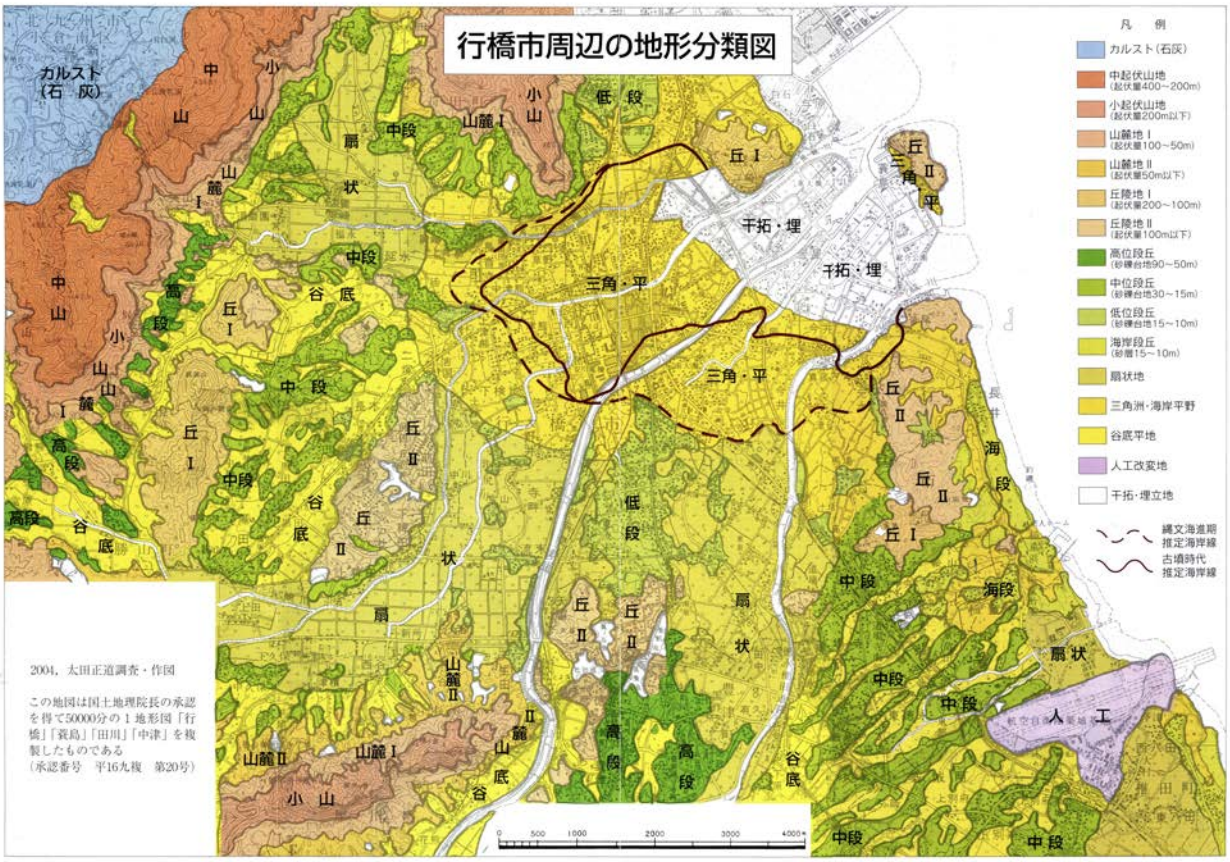
本書で報告する辻垣下出口遺跡は祓川下流域右岸の三角州に立地する。

第２節　歴史的環境

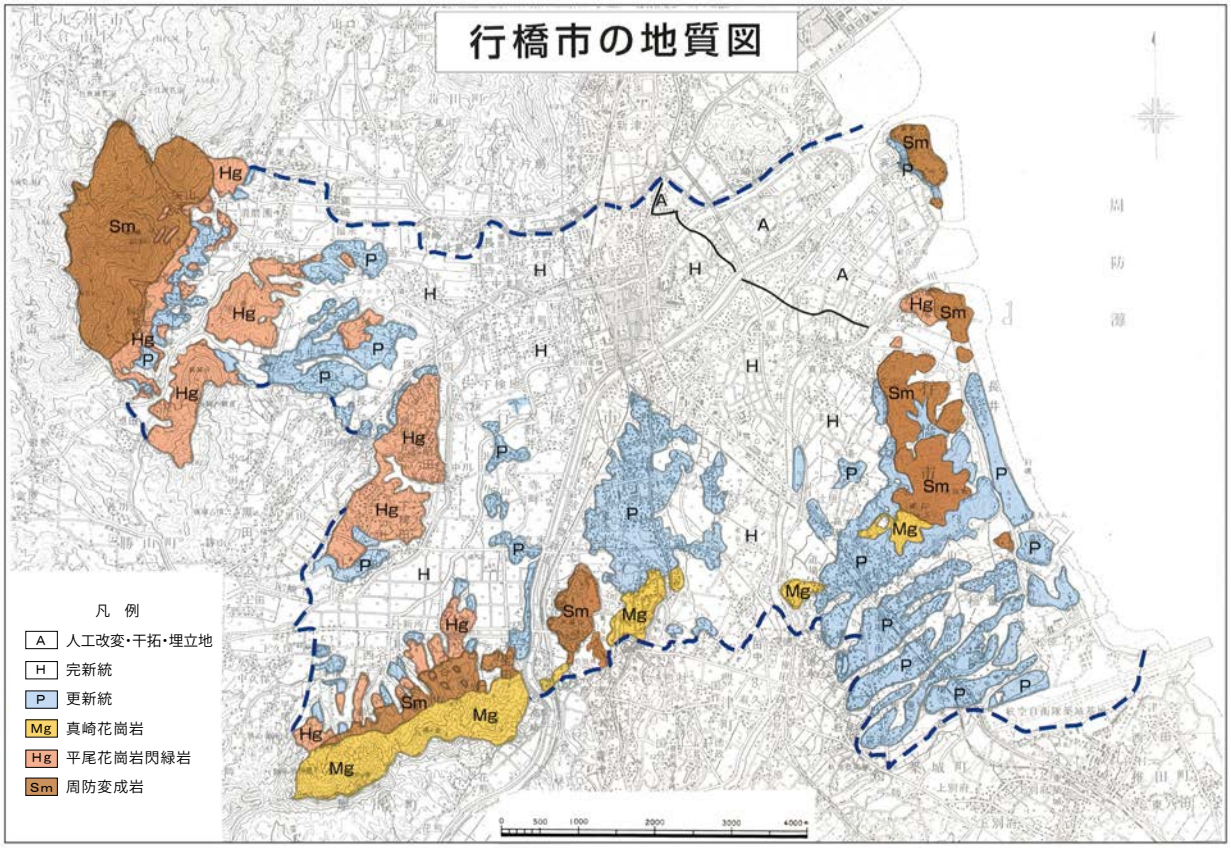
京都平野における人類の足跡は、今から約３万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。市域では渡築紫遺跡Ｃ区で、該期の尖頭状石器、台形様石器、削器、剥片などが火山灰層からまとまって出土し、石器製作を行っていた跡と考えられる。このほか鬼熊遺跡、入覚大原遺跡などで旧石器が見つかっている。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは中期の約 4800 年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸から昭和時代の干拓によって、蓑島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第５図）。市域の縄文時代の様相は発掘事例が少なくあまり明確ではないが、当時の今川河口部に近い宝山に貝塚が存在した。遺構は長者原遺跡、長井丸尾遺跡で後期の住居跡が１軒ずつ確認されているにすぎないが、土器は早期の押型文土器、前期の曽畑式

第２図　辻垣下出口遺跡の位置（1/2,000,000）



第３図　行橋市周辺の地形分類図（1/100,000）



第４図　行橋市周辺の地質図（1/100,000）

土器、轟B式土器、後期の西平式系土器、石器は早期のトロトロ石器、後期の大型打製石斧など各期の遺物が徐々に知られるようになってきた。

2600年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化していく。弥生時代の遺跡は早期より見られ、夜臼式土器や続く前期初頭の板付Ⅰ式土器が出土する長井遺跡や辻垣遺跡群がある。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で確認された矢留堂ノ前遺跡では前期の環濠集落が見つかった。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。なかでも下稗田遺跡では竪穴住居やそれに伴う多くの貯蔵穴が発掘された。谷部の湿地帯では木製農具も見つかっており、石斧や石庖丁、石剣などの多くの石器も発見された。貯蔵穴からは炭化したコメに加え、淡水産や海水産の貝殻、魚骨なども見つかっており、稲作を行いながら、狩猟、採集、漁撈と多様な生活様式であったことが分かる。代わって後期の遺跡には下崎ヒガンデ遺跡、代遺跡などが知られる。後期末から古墳時代への過渡期は、いわゆる『魏志倭人伝』に見られる「邪馬台国」の時代であり、京都平野にも「国」があったと想定される。その国の中心集落（国邑）の第一候補が延永ヤヨミ園遺跡である。調査した範囲のみで200軒程の竪穴住居があり、一定の区画を囲んだ居館の存在も想定されている。延永ヤヨミ園遺跡は内海に面しており、瀬戸内海を介して近畿や瀬戸内地方との交流拠点であったとも考えられる。

京都平野における本格的な古墳時代は、3世紀末～4世紀初頭頃に三角縁神獣鏡を副葬した石塚山古墳（苅田町）の築造に始まる。その後、平野内の首長墓の系列は4世紀末頃のビワノクマ古墳、5世紀前半の御所山古墳（苅田町）、5世紀末の番塚古墳（同）と続き、6世紀には八雷古墳、扇八幡古墳（みやこ町）、庄屋塚古墳（同）、箕田丸山古墳（同）が築かれる。これら最有力層の前方後円墳が築かれるのは、いずれも旧京都郡域で、その多くは各時期において豊前地域で最大級の規模を有し、旧京都郡域を拠点とする首長層が傑出した勢力を保持していたことを物語っている。一方平野の南東域を占める仲津郡域の前方後円墳出現は稲童古墳群の盟主墳である5世紀中頃の石並古墳を嚆矢とし、6世紀後半の隼人塚古墳をもって終息する。前方後円墳の築造の終息にともない、地域の首長墓は旧京都郡においては、橘塚古墳（みやこ町）、綾塚古墳（同）、旧仲津郡においては、彦徳甲塚古墳（同）、甲塚方墳（同）といった巨大な横穴式石室を内部主体とする大型の円墳や方墳に移行する。一方、6世紀頃より家父長制社会が成立し、造墓が支配者層に留まらず浸透していき、群集墳や横穴墓の築造が盛んになった。全国的にみても京都平野は古墳の宝庫であり、平尾台や観音山、覗山山麓、御所ヶ岳、馬ヶ岳の山裾など平野の縁辺部に濃密に分布する。特に竹並横穴墓群は1,000基近い横穴墓が発掘調査され、未調査及び調査以前に破壊された横穴墓を加えると約1,500基の一大墳墓域である。

7世紀は古代史上の飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。8世紀前半までに京都郡に椿市廃寺、仲津郡では上坂廃寺、木山廃寺が創建され、8世紀中葉には豊前国分寺、豊前国分尼寺が創建された。またこの頃、唐や新羅との緊張関係の高まりに伴い、御所ヶ岳の北麓に全長約3㎞にわたり城壁を巡らせた山城（御所ヶ谷神籠石）が築かれた。

豊前国の国府は『倭名類聚抄』に京都郡に所在すると記載されるが、比定地が確定しなかったため長く議論されてきた。みやこ町国作・惣社地区で見つかった官衙遺跡が国府跡と確定したが、この遺跡は8世紀前半以前の様相が明確でないため、東九州自動車道建設に伴い発掘調査された福原長者原官衙遺跡がこれに先行する豊前国府、あるいは豊前国と豊後国にまたがる「豊国」を支配する役所であった可能性が指摘されている。御所ヶ谷神籠石の北麓を駅路（古代官道豊前路）が東西に走り、丘陵の切り通しや発掘調査の際に遺構が確認されている。また延永ヤヨミ園遺跡で「津」墨書土器が出土し、『類聚三代格』にみえる「草野津」の所在地がほぼ確定した。

1. 石塚山古墳　2. 番塚古墳　3. 御所山古墳　4. 徳永夫婦塚古墳　5. 黒添メウト塚古墳　6. 徳永丸山古墳
7. 徳永泉古墳　8. 福丸古墳群　9. 椿市廃寺　10. 入覚上畔遺跡　11. 入覚コウチ遺跡　12. 入覚秋光遺跡
13. 別所古墳　14. ビワノクマ古墳　15. 延永ヤヨミ園遺跡　16. 八雷古墳　17. 前田山遺跡　18. 下稗田遺跡
19. 庄屋塚古墳　20. 綾塚古墳　21. 橘塚古墳　22. 扇八幡古墳　23. 箕田丸山古墳　24. 金屋遺跡
25. 羽根木古屋敷遺跡　26. 崎野遺跡　27. 長井遺跡　28. 代遺跡　29. 馬場代古墳群　**30. 辻垣下出口遺跡**
31. 辻垣遺跡群　32. 隼人塚古墳　33. 覗山城跡　34. 稲童古墳群　35. 渡築紫古墳群　36. 宝山桑ノ木遺跡
37. 矢留堂ノ前遺跡　38. 福原長者原官衙遺跡　39. ヒメコ塚古墳　40. 竹並遺跡　41. 御所ヶ谷神籠石　42. 馬ヶ岳城跡
43. 天生田大将陣横穴群　44. 甲塚方墳　45. 彦徳甲塚古墳　46. 惣社古墳　47. 居屋敷窯跡　48. 徳永川ノ上遺跡
49. 豊前国府跡　50. 豊前国分寺跡　51. 豊前国分尼寺跡　52. 木山廃寺　53. 上坂廃寺　54. 船迫窯跡群

第5図　京都平野の主要遺跡分布図（1/80,000）

第３章　辻垣下出口遺跡

辻垣下出口遺跡の発掘調査は県営ほ場整備事業元永地区の工事に先立ち行った。調査区の行政地番は福岡県行橋市大字辻垣字下出口 527、528、529、536 番地で、調査面積は 4,900㎡である。

調査の結果、掘立柱建物（SB）１軒、土坑（SK）24 基、井戸（SE）１基、溝（SD）15 条など多数の遺構を検出し、土師器、須恵器、白磁、青磁など多種多様な遺物が出土した。調査区の層序は黒褐色土（耕作土）の１層のみである。遺構検出面（地山）は茶褐色砂質土で、遺構の埋土は総じて黒褐色砂質土であった。

（１）掘立柱建物

SB001（第６図）

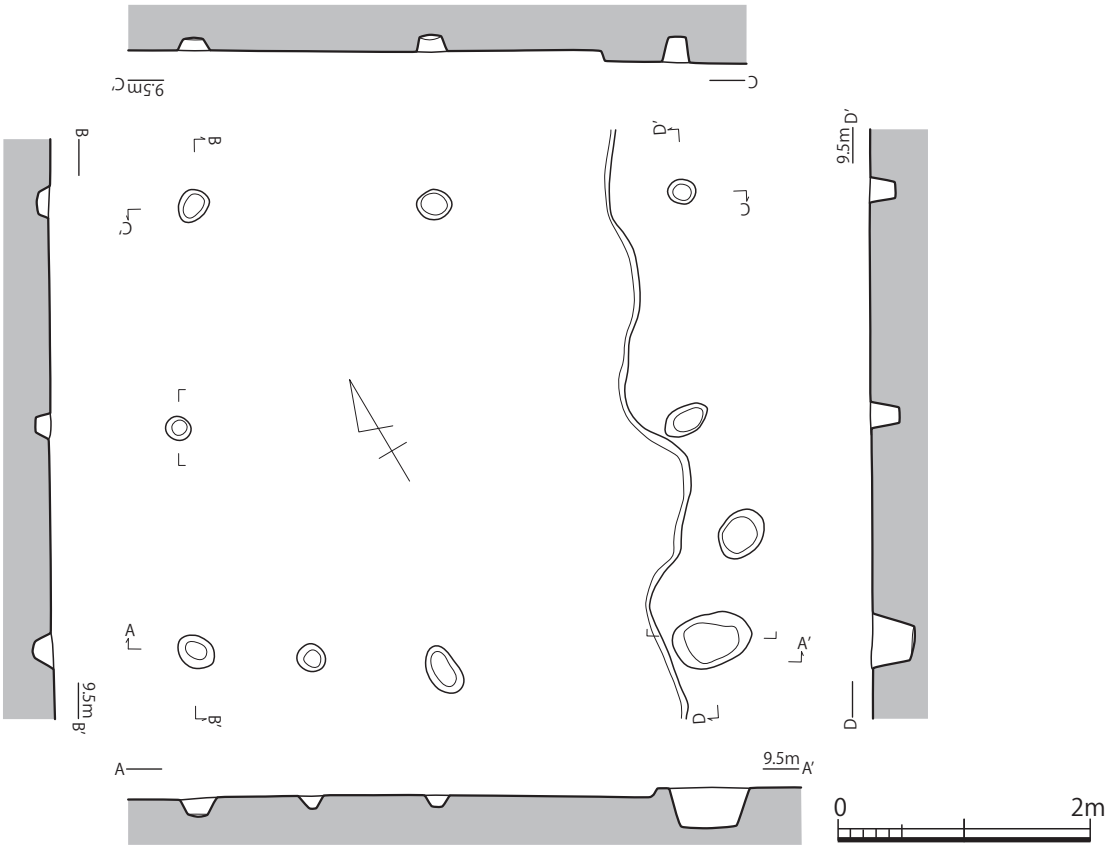
調査区の中央西寄りで検出した２間×２間の掘立柱建物である。方位は東側の柱列でＮ－ 31°－Ｅにとる。桁行 3.9m、梁行 3.6m。柱間は南北側で 1.95m、東西側で 1.8m と整った柱穴配置をとる。柱穴は径 20 ～ 60㎝、深さ 10 ～ 30㎝を測る。柱穴より土師器、土師質土器が出土したが、小片のため図示できなかった。

（２）土坑

SK011（第８・９図、図版３・５）

調査区の中央西寄りで検出した。SD051 の底面にある。円形を呈した２段掘りの土坑で、径 1.2m、深さ 0.6mを測る。井戸の可能性もある。土師器と瓦器が出土した。

土師器　１～３は埦。１・２はほぼ完形で、１は口径 16.0㎝、器高 5.0㎝、２は復元口径 16.2㎝、器高 5.0



第６図　SB 001 実測図（1/60）

第７図　辻垣下出口遺跡遺構配置図（1/400）

cmを測る。３は体部から高台部の破片である。

瓦器　４は埦。ほぼ完形で、口径 15.8cm、器高 5.5cmを測る。

SK012（第 10・11 図、図版５）

調査区の西寄りで検出した。SD053 を切る。長楕円形を呈し、長軸 3.3m、短軸 1.9m、深さ 1.05mを測る。須恵器、瓦器、白磁などが出土した。

須恵器　５・６は甕。５は頸部から肩部の破片。外面はカキメ後にタタキを施し、内面に青海波文当具痕を残す。自然釉が付着する。６は胴部片。調整は５と同様である。

土師器　７・８は小皿。いずれも底部片で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

瓦器　９～ 10 は埦。いずれも底部から高台部の破片。11 は小皿。ほぼ完形で、口径 8.45cm、器高 1.5cm。

土師質土器　12 は鍋。口縁部から体部の破片で、外面にススが付着する。

須恵質土器　13 は鉢。底部片で、いわゆる東播系の捏鉢である。

白磁　14・15 は碗。口縁部から体部の破片で、いずれも口縁端部は玉縁になる。

石製品　16 は滑石製石鍋。底部片で、外面にススが付着する。

SK013（第 10 図）

調査区の西寄りで検出した。SA071 に近接する。楕円形を呈し、長軸 2.75m、短軸 1.75m、深さ 0.2mを測る。出土遺物には土師器、瓦器、白磁などがあるが、小片のため図示できなかった。

SK014（第 12・13 図）

調査区の南西側で検出した。SK015･016、SD052 などが近接する。やや歪な長方形を呈し、長軸 2.0m、短軸 1.35m、深さ 0.15mを測る。出土遺物には土師器、土師質土器、青磁などがあり、青磁を図示した。

青磁　17 は碗。いわゆる同安系の体部小片で、内面に櫛点描文、外面に櫛描文を施す。

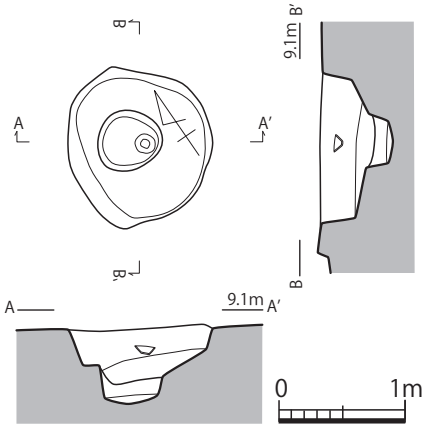
SK015（第 12 図）

調査区の南西側で検出した。SK014・016、SD052 が近接する。隅丸長方形を呈し、長軸 2.75m、短軸 1.7m、深さ 0.1m を測る。出土遺物には土師器があるが、小片のため図示できなかった。

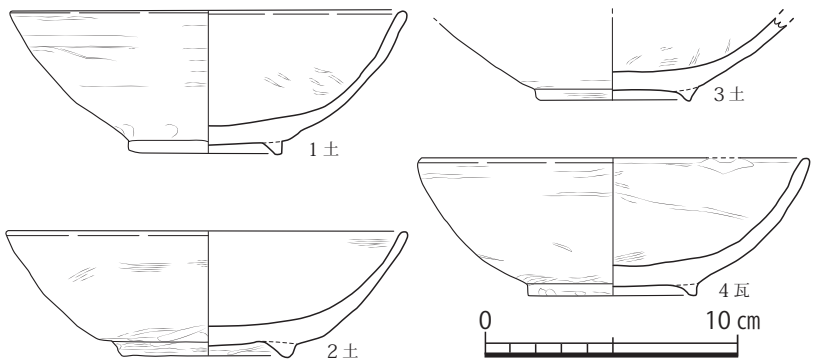
SK016（第 14・15 図）

調査区の南西端で検出した。SK014・015 が近接する。南側は調査区外へと広がる。長方形を呈すると考えられ、長辺 5.15m、短辺は 1.3m、深さ 0.1m を測る。出土遺物には土師器、須恵器、瓦器などがあり、須恵器を図示した。

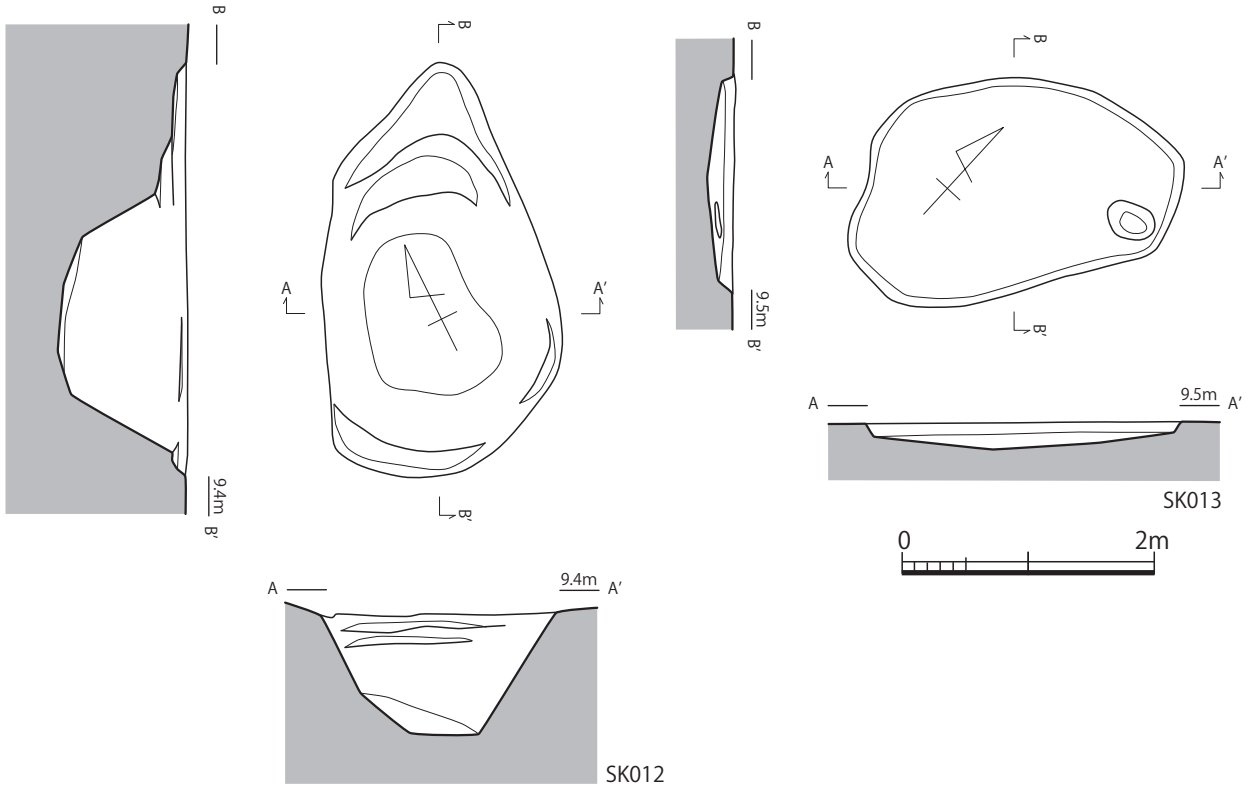
須恵器　18 ～ 20 は甕。いずれも胴部の小片で、外面に平行タタキを施し、内面に当具痕を残す。19・20 は当具痕をナデ消している。



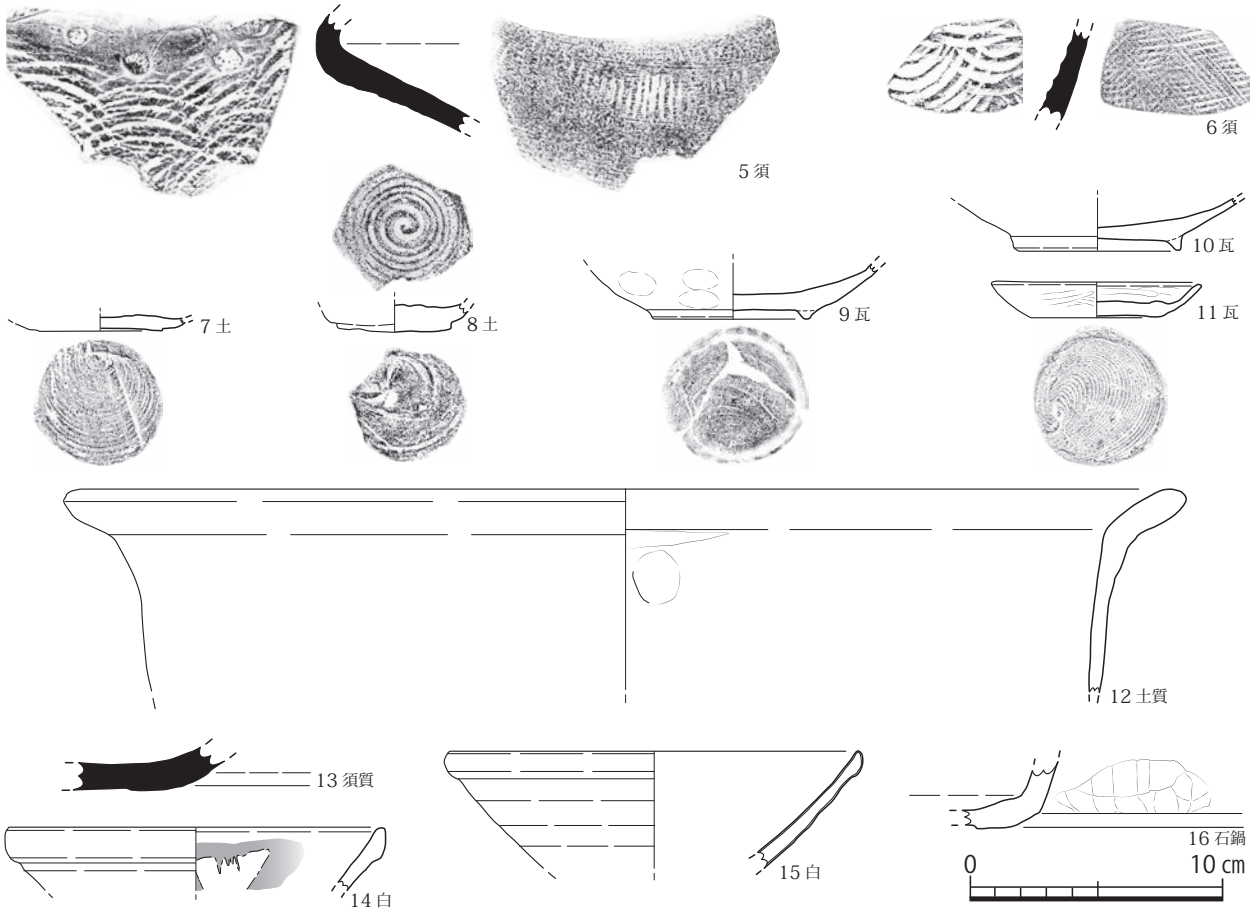
第８図　SK 011 実測図（1/60）



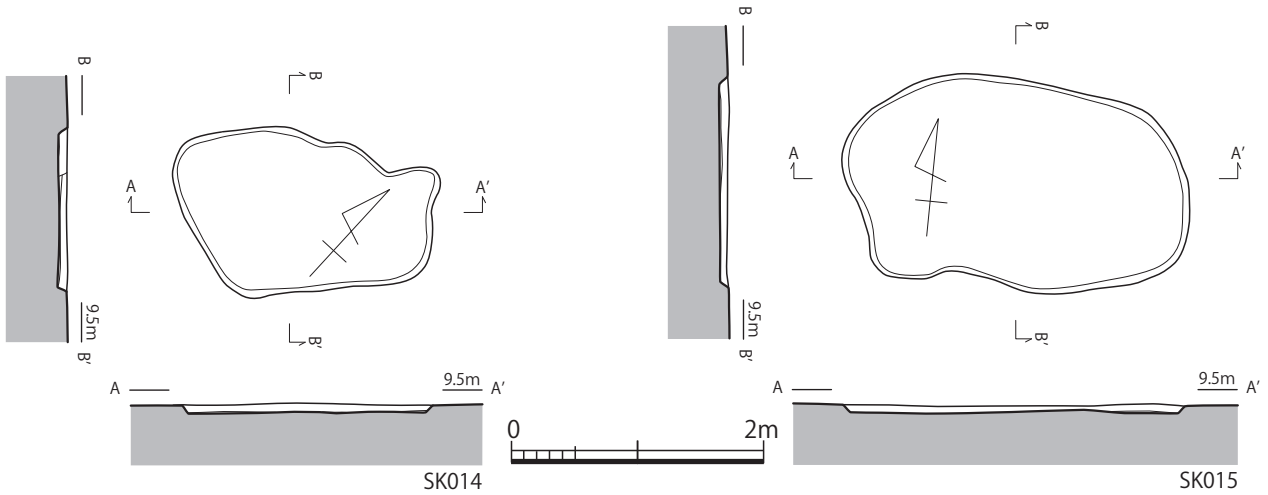
第９図　SK 011 出土遺物実測図（1/3）



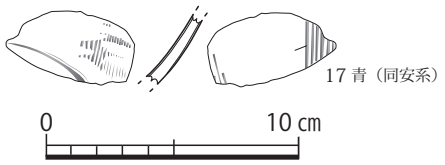
第 10 図　SK 012・013 実測図（1/60）



第 11 図　SK 012 出土遺物実測図（1/3）



第 12 図　SK 014・015 実測図（1/60）

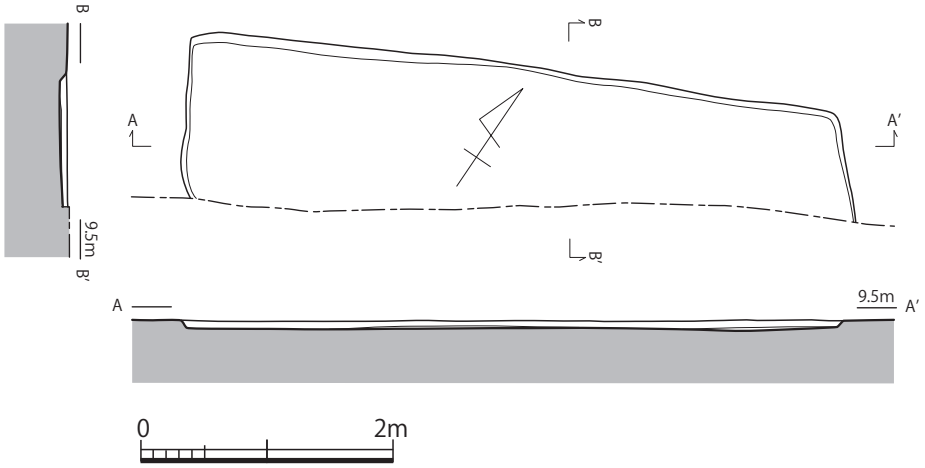


第 13 図　SK 014 出土遺物実測図（1/3）

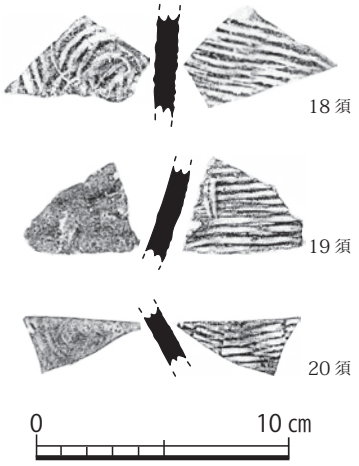
SK017（第 16・17 図、図版 5）

調査区の中央で検出した。やや歪な三角形を呈し、一辺 1.5 ～ 2.0m、深さ 0.1m を測る。出土遺物には土師器、須恵器、中国陶器があり、中国陶器を図示した。

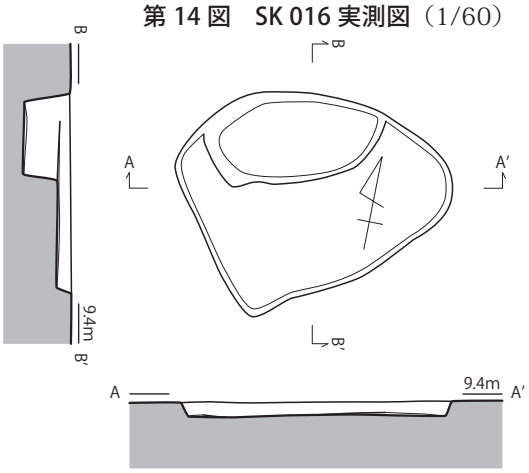
中国陶器　21 は甕。口縁部片で、端部はΓ形を呈し、下位に 2



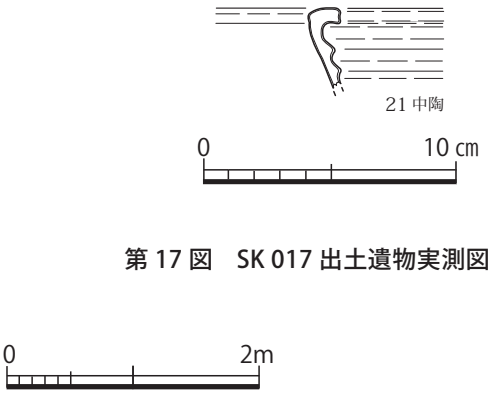
第 14 図　SK 016 実測図（1/60）



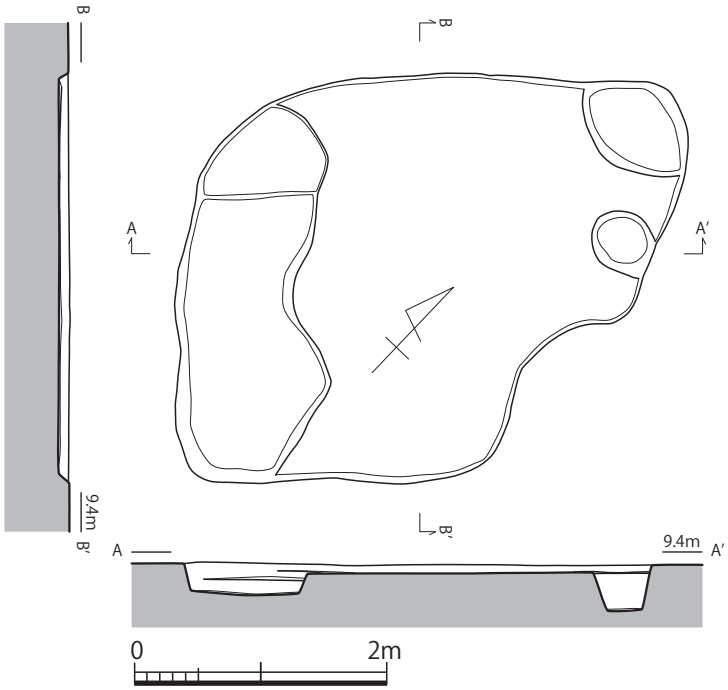
第 15 図　SK 016 出土遺物実測図（1/3）



第 16 図　SK 017 実測図（1/60）



第 17 図　SK 017 出土遺物実測図（1/3）



第 18 図　SK 018 実測図（1/60）

第 19 図　SK 018 出土遺物実測図（1/3）

条の突帯をめぐらす。釉薬は灰黄色を呈す。

SK018（第 18・19 図、図版 5）

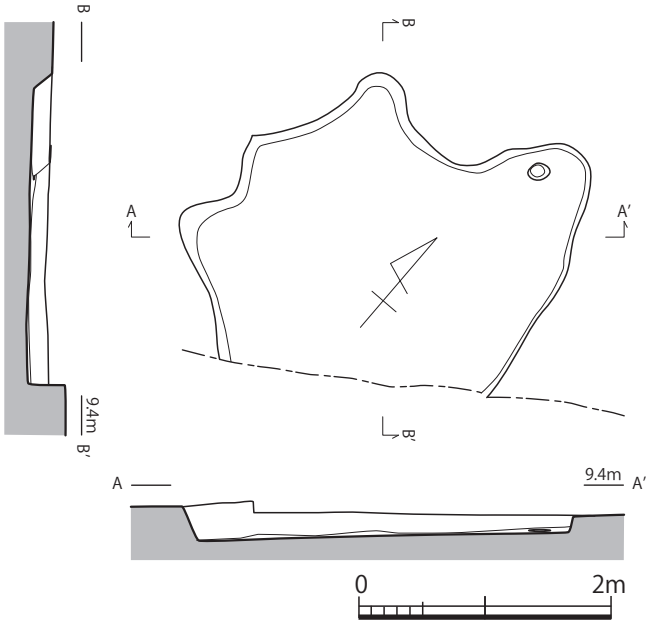
調査区の中央南寄りで検出した。やや歪な菱形を呈し、長軸 4.85m、短軸 3.3m、深さ 0.1m を測る。複数の遺構に切られている。出土遺物には土師器、瓦器、土師質土器、青磁、土製品などがあり、土師質土器と土製品を図示した。

土師質土器　22 は鍋。口縁部の小片で、外面にススが付着する。

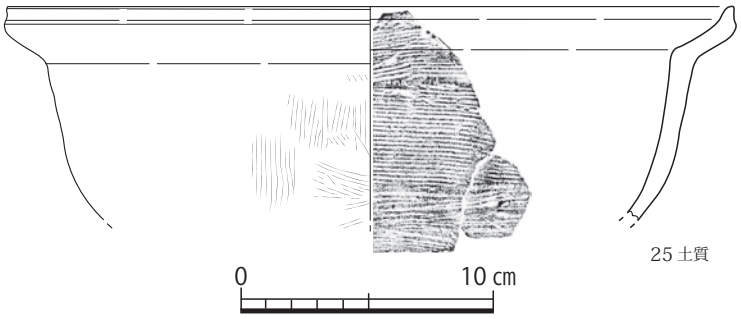
土製品　23 は棒状土製品。上部を欠損し、現状で長さ 9.7㎝を測る。用途は不明。24 は有孔土錘。完形で棒状を呈す。長さ 4.7㎝、幅 1.2㎝を測る。漁網錘である。

SK019（第 20・21 図、図版 5）

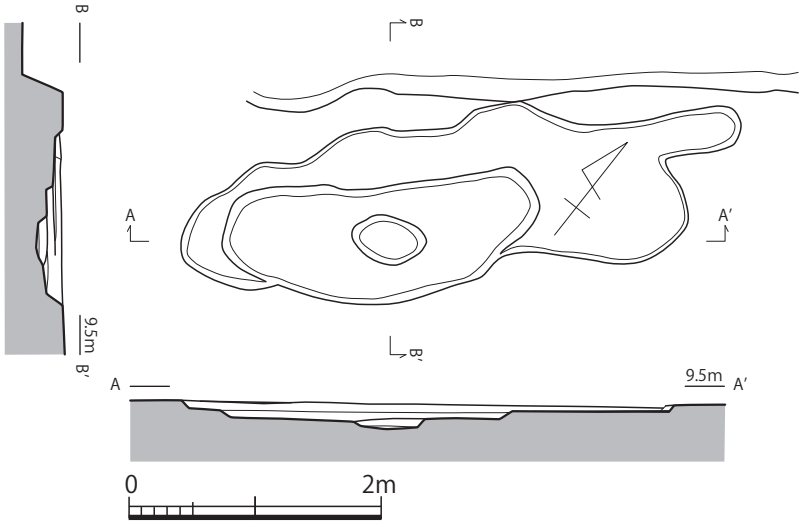
調査区の中央南端で検出した。SD052 を切り、南側は調査区外へと広がる。不整形で検出できた範囲で、長軸 3.3m、短軸 2.6m、深さ 0.2m を測る。出土遺物には土師器、瓦器、土師質土器、白磁青磁などがあり、土師質土器を図示した。



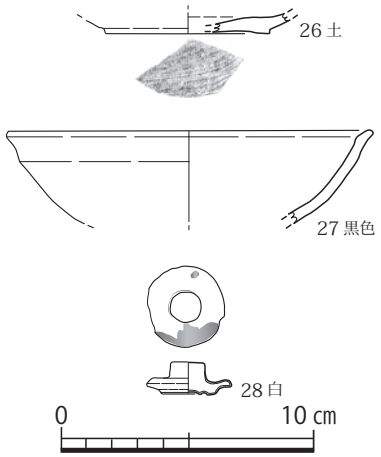
第 20 図　SK 019 実測図（1/60）



第 21 図　SK 019 出土遺物実測図（1/3）



第 22 図　SK 020 実測図（1/60）



第 23 図　SK 020 出土遺物実測図（1/3）

土師質土器　25 は鍋。口縁部から体部片で、復元口径 29.2㎝を測る。内外面にハケメが施され、外面にススが付着する。

SK020（第 22・23 図、図版 5）

調査区の南西側で検出した。SK014、SD052 に近接する。歪な長楕円形を呈し、長軸 4.05m、短軸 1.4m、深さ 0.2m を測る。土師器、黒色土器、白磁が出土した。

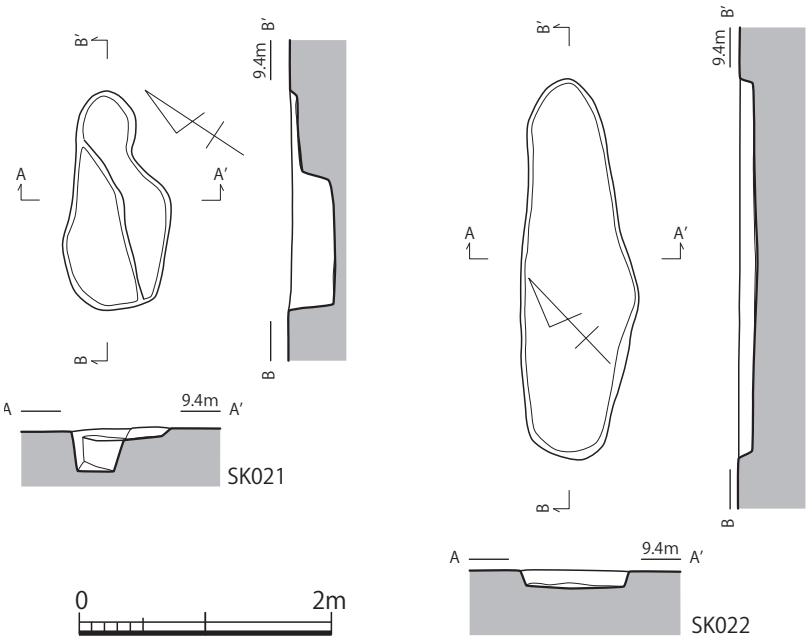
土師器　26 は小皿。底部片で、底部外面に回転糸切り痕を残す。

黒色土器　27 は埦か。口縁部から体部片で、復元口径 14.6㎝を測る。いわゆる内黒の黒色土器である。

白磁　28 は蓋。ほぼ完形の摘みをもつ蓋で、径 3.3㎝、器高 1.3㎝を測る。後述する SD051 出土の白磁小壺とセットになる可能性がある。

SK021（第 24 図）

調査区の中央東寄りで検出した。やや歪な瓢形を呈し、長軸 1.75m、短軸 0.85m、深さ 0.35mを測る。弥生土器、土師器が出土したが、小片のため図示できなかった。



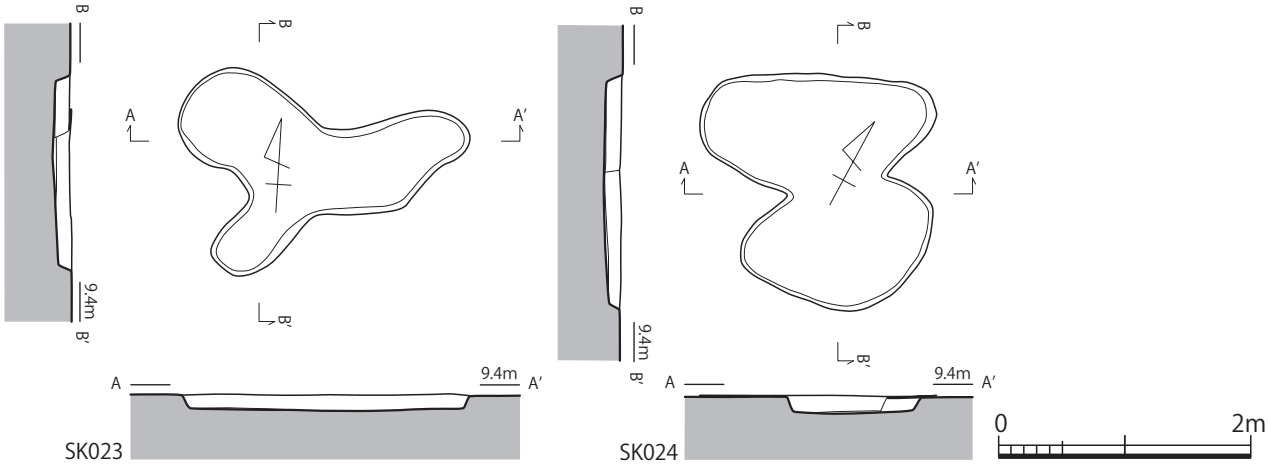
第 24 図　SK 021・022 実測図（1/60）

SK022（第 24 図）

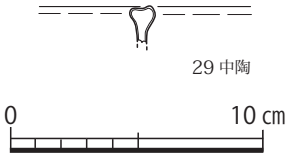
調査区の中央で検出した。SK023・024 が近接する。長楕円形を呈し、長軸 3.0 m、短軸 0.95 m、深さ 0.15mを測る。土師器、須恵器、瓦器、白磁などが出土したが、小片のため図示できなかった。

SK023（第 25・26 図、図版 5）

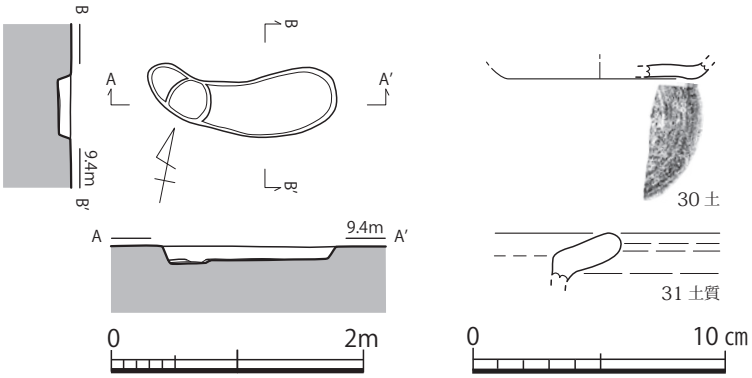
調査区の中央で検出した。SK022 に近接する。不整形で、長軸 2.3m、短軸 1.65m、深さ 0.15 m を測る。出土遺物に土師器、須恵質土器、白磁、中国陶器があり、中国陶器を図



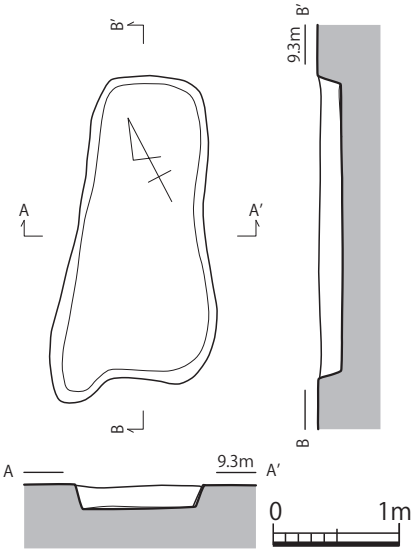
第 25 図　SK 023・024 実測図（1/60）



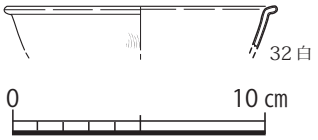
第 26 図　SK 023 出土遺物実測図（1/3）



第 27 図　SK 025 実測図（1/60）　第 28 図　SK 025 出土遺物実測図（1/3）



第 29 図　SK 026 実測図（1/60）



第 30 図　SK 026 出土遺物実測図（1/3）

示した。

中国陶器　29 は盤。小型品の口縁部片で、釉薬は暗褐色を呈す。

SK024（第 25 図）

調査区の中央で検出した。SK022、SX084 が近接する。やや歪な瓢型を呈し、長軸 1.9m、短軸 1.85m、深さ 0.15mを測る。土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、白磁が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK025（第 27・28 図）

調査区の中央で検出した。やや歪んだ楕円形を呈し、長軸 1.55m、短軸 0.55、深さ 0.15mを測る。出土遺物に土師器、土師質土器がある。

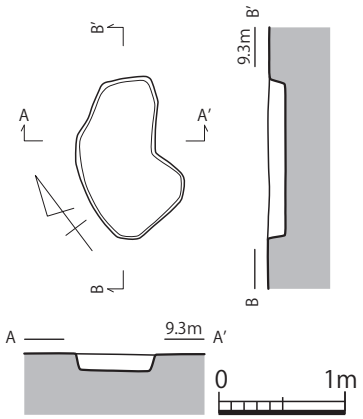
土師器　30 は小皿。底部の小片である。

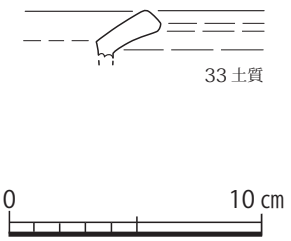
土師質土器　31 は鍋。口縁部の小片で、外面にススが付着する。

SK026（第 29・30 図、図版 5）

調査区の中央東寄りで検出した。SK027、SD064 が近接する。やや歪な長方形を呈し、長辺 2.6m、短辺 1.2m、深さ 0.2mを測る。土師器、瓦器、須恵質土器、白磁、青磁などが出土し、白磁を図示した

白磁　32 は碗。口縁部から体部片で、復元口径 13.8㎝を測る。口縁端部を嘴状に折り曲げて仕上げる。





第 31 図　SK 027 実測図（1/60）　第 32 図　SK 027 出土遺物実測図（1/3）

SK027（第 31・32 図）

調査区の中央東寄りで検出した。SK026、SD063 が近接する。やや歪な楕円形を呈し、長軸 1.3m、短軸 0.8m、深さ 0.15mを測る。土師器、瓦器、土師質土器、炭が出土し、土師質土器を図示した。

土師質土器　33 は鍋。口縁部の小片である。

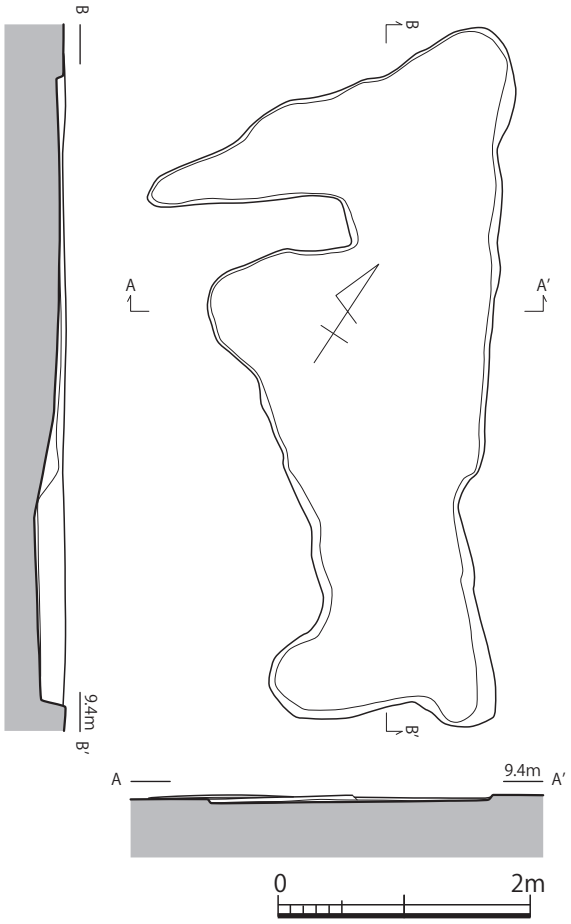
SK028（第 33・34 図、図版 5）

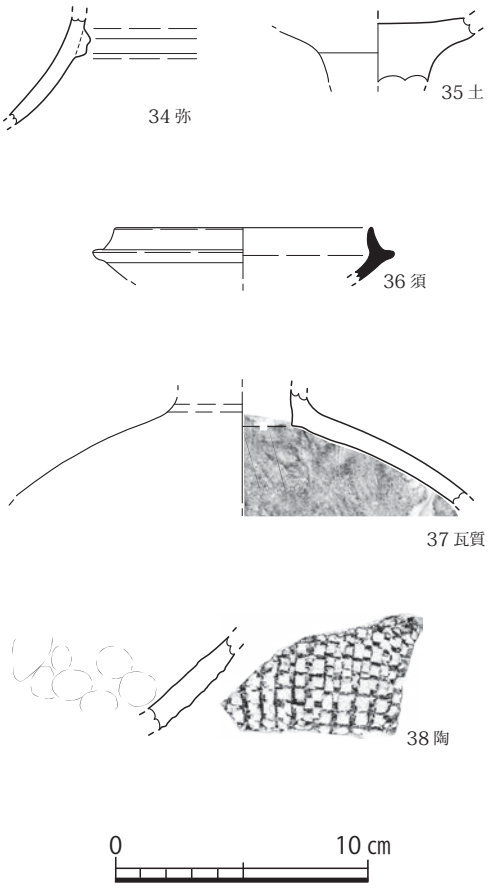
調査区の東寄りで検出した。SD058 に接する。不整形で、長軸 5.55m、短軸 2.8m、深さ 0.2mを測る。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶器、白磁などがあり、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器を図示した。

弥生土器　34 は壺。胴部下半の破片で、上位に M 字突帯を 1 条めぐらす。

土師器　35 は高坏。坏部底面から脚部上端の破片である。

須恵器　36 は坏身。口縁部から坏部片で、復元口径 10.3㎝を測る。





第 33 図　SK 028 実測図（1/60）　第 34 図　SK 028 出土遺物実測図（1/3）

瓦質土器　37 は壺。頸部から肩部片で、内面にはケズリの痕跡を残す。

陶器　38 は甕。国産の無釉陶器で、外面に格子目タタキを施す。産地不明。

SK029（第 35 図）

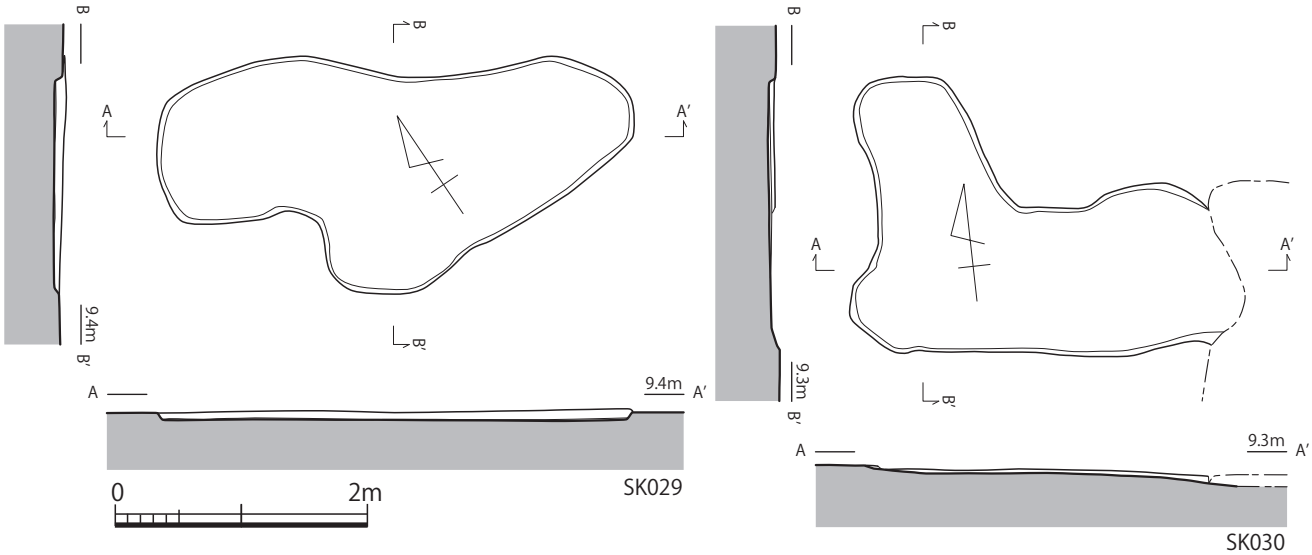
調査区の北東寄りで検出した。不整形で、長軸 3.8m、短軸 1.9m、深さ 0.1mを測る。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK030（第 35 図）

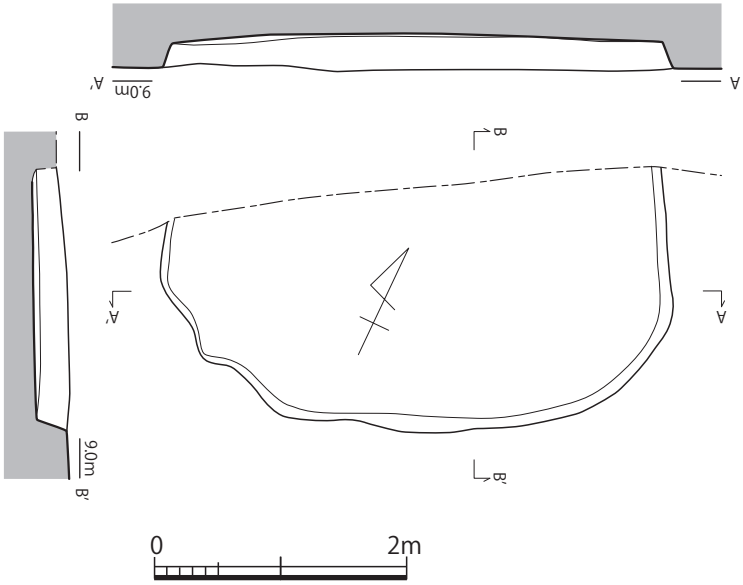
調査区の北東端で検出した。Ｌ字形を呈し、東側は調査区のきわに接している。長軸 3.15m、短軸 2.2m、深さ 0.05mを測る。土師器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK031（第 36・37 図、図版５）

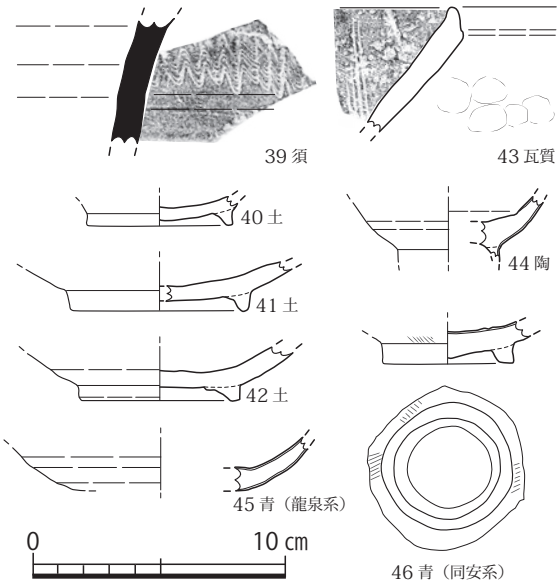
調査区の中央北端で検出した。北側は調査区外へと広がっている。検出できた範囲で、長軸 4.05m、短軸 1.95m、深さ 0.3mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶器、白磁、青磁、炭などが出土したが、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、青磁を図示した。



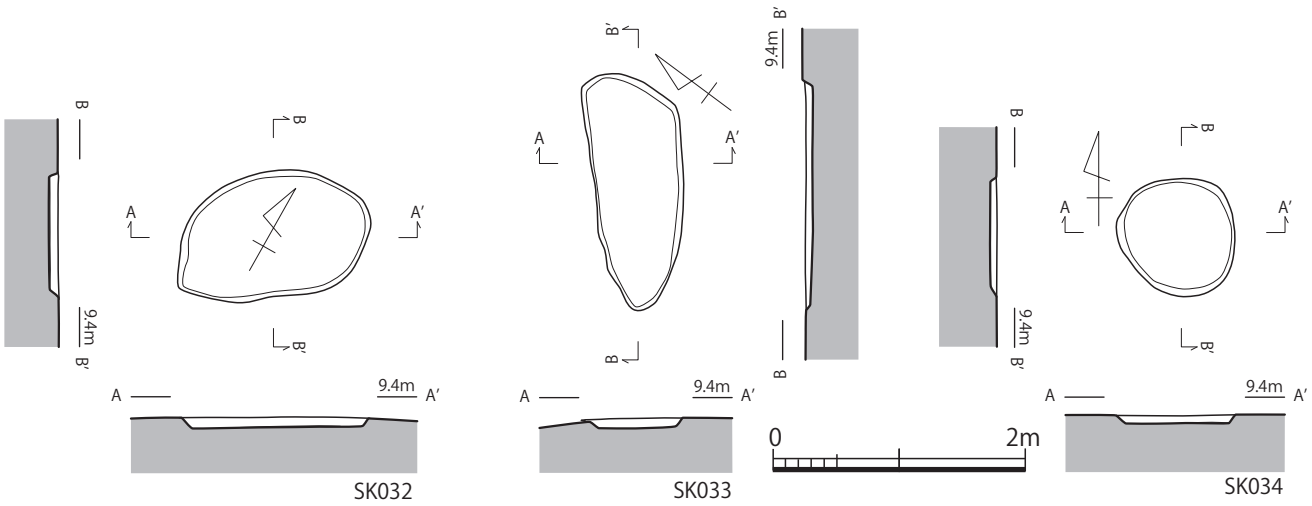
第 35 図　SK 029・030 実測図（1/60）



第 36 図　SK 031 実測図（1/60）



第 37 図　SK 031 出土遺物実測図（1/3）



第 38 図　SK 032 ～ 034 実測図（1/60）

土師器　40 ～ 42 は埦。いずれも底部から高台部の破片である。

須恵器　39 は大甕か。頸部片で、外面に櫛描波状文を施す。自然釉が付着する。

瓦質土器　43 は鉢。口縁部から体部片で、内面に 4 条 1 組の擂目を施す。

陶器　44 は埦。体部から高台部片で、釉薬は黄褐色を呈す。見込みは釉を掻き取る。古瀬戸か。

青磁　45・46 は碗。45 は体部片。龍泉窯系で内外面に装飾をもたない。46 は底部から高台部の破片。同安窯系で、外面にわずかに櫛描文を残す。

SK032（第 38 図）

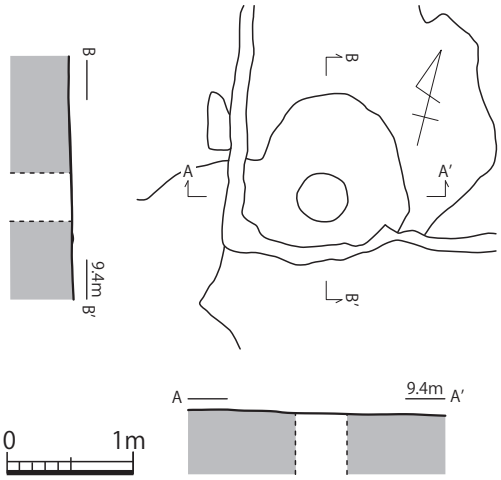
調査区の北西側で検出した。楕円形を呈し、長軸 1.65m、短軸 1.0m、深さ 0.1m を測る。土師器、瓦器が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK033（第 38 図）

調査区の北西側で検出した。長楕円形を呈し、長軸 1.9m、短軸 0.7m、深さ 0.1mを測る。土師器、陶器、白磁が出土したが、小片のため図示できなかった。

SK034（第 38 図）

調査区の北西側で検出した。円形を呈し、径 0.95m、深さ 0.1m を測る。出土遺物に土師器があるが、小片のため、図示できなかった。

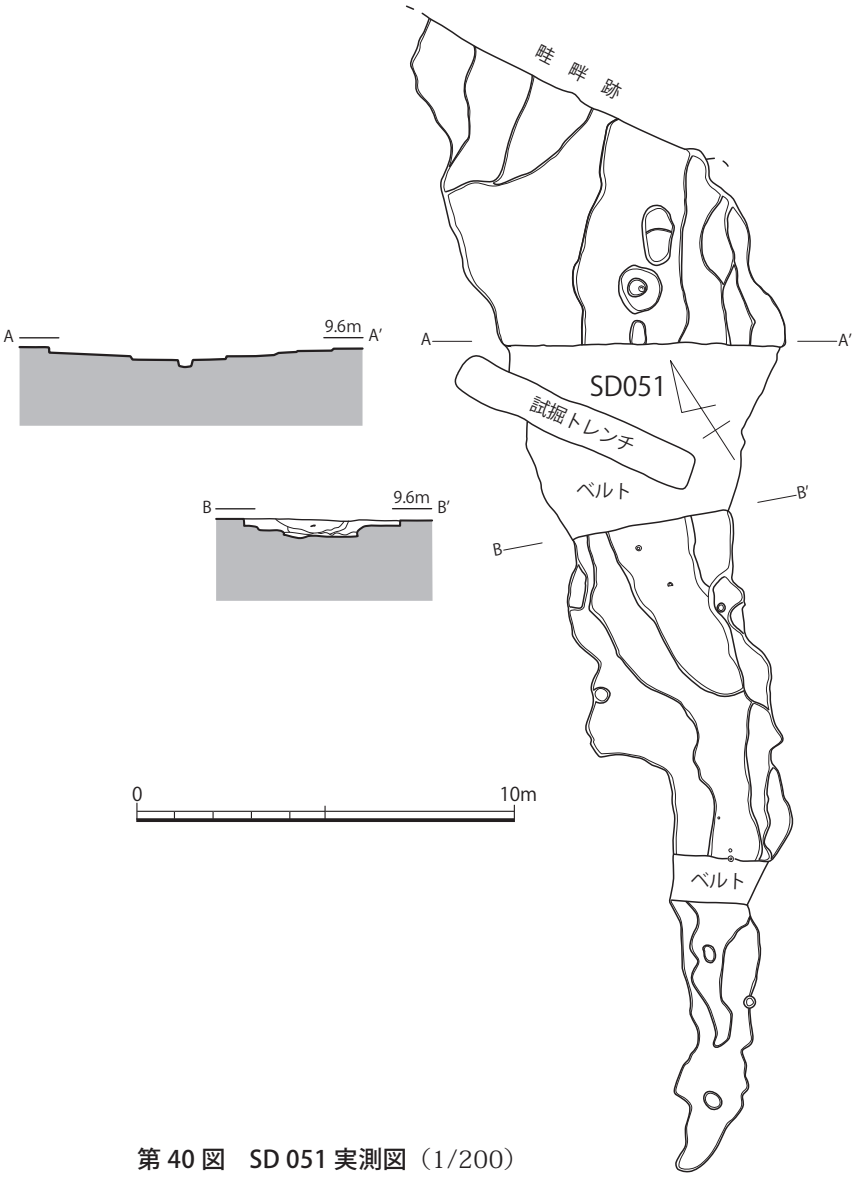


第 39 図　SE041 実測図（1/60）

（3）井戸

SE041（第 39 図、図版 3）

調査区の中央やや北西寄りで検出した。円形を呈し、径 0.4m、深さは湧水のため分からなかった。通常は曲物を組んだり木を刳り貫いて井筒とするが、どういった構造であったかは明確にできない。出土遺物は無かった。



第 40 図　SD 051 実測図（1/200）

（4）溝

SD051（第 40 ～ 43 図、図版 4 ～ 6）

調査区の西側を南西から北東方向に伸びる。北東側は畦畔にぶつかり、その先は削平されている。北東側の底面に SK011 がある。現状で、長さ約 31 m、最大幅 7.5 m、深さ 0.5 m を測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁など、多くの遺物が出土した。

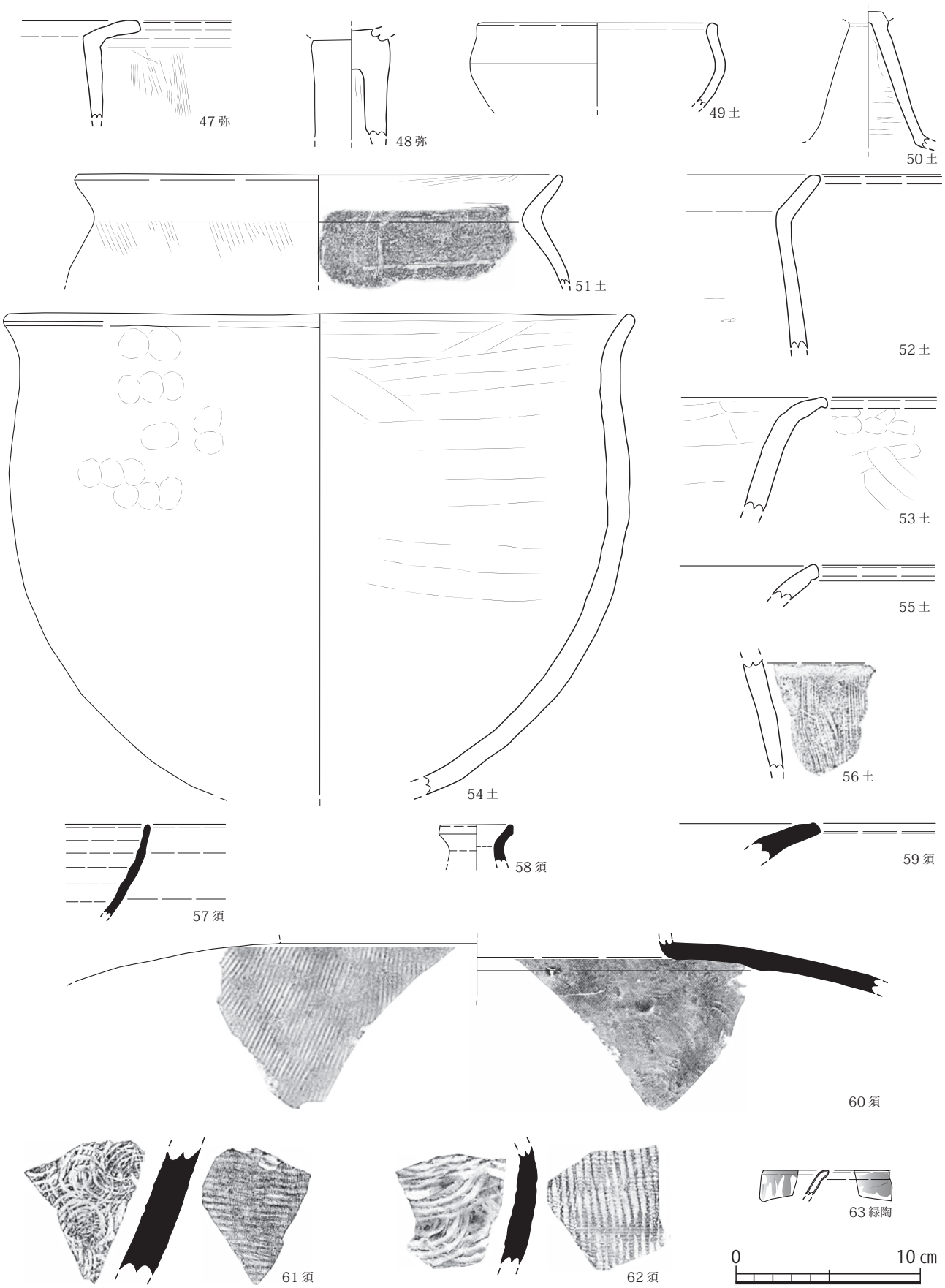
弥生土器　47 は甕。口縁部から胴部の破片である。口縁部は Γ 形を呈す。須玖式。48 は高坏。坏部底面から脚部上端の破片である。脚部の残存部は筒状を呈す。

土師器　49 ～ 56 は古墳時代から奈良時代前後の土師器。49 は坏。口縁部から体部片で、復元口径 12.6㎝を測る。50 は高坏。坏部底面から脚部下半の破片。脚部は裾部にかけて喇叭形に広がり、端部はさらに屈曲して広がる形状をとる。脚部内面にシボリやケズリの痕跡を残す。51 ～ 56 は甕。51 は口縁部から肩部片。くの字口縁で、復元口径 26.4㎝を測る。52 は口縁部から胴部上半の破片。くの字口縁だが、51 より屈曲が緩い。53 も口縁部から胴部上半の破片。端部は喇叭形に広がる形状となる。54 は口縁部から胴部下半の破片で、底部を欠く。復元口径 34.6㎝を測る。口縁端部の形状は緩く外反させる。内面はヘラケズリ調整。55 は口縁部片、56 は胴部片である。64 ～ 87 は平安時代後半から鎌倉時代の土師器。64 は坏身。古墳時代の坏身の形状に似ており、あまり類例を知らない。口縁部から底部片で、復元口径 5.2㎝、器高 3.2㎝を測る。底部外面に回転糸切り痕を残す。65 ～ 73 は小皿。72 は回転ヘラ切りで、他は回転糸切りで仕上げる。底部外面に板状圧痕を残すものもある。74 ～ 81 は坏。78・80 は回転ヘラ切りで、他は回転糸切りで仕上げる。小皿と同様に板状圧痕を残すものもある。82 ～ 87 は椀。82 ～ 86 は体部から高台部片、87 は底部から高台部片である。

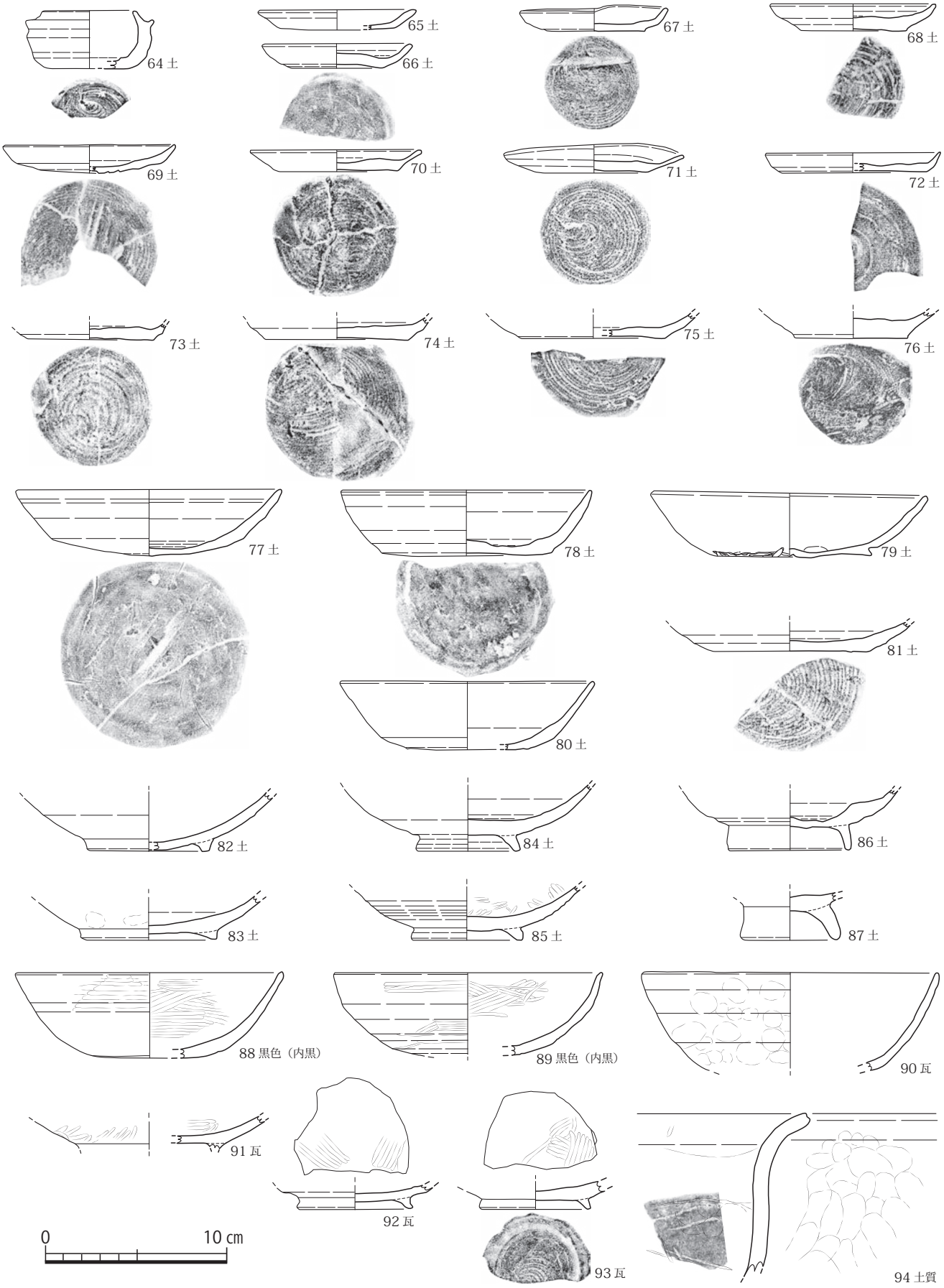
須恵器　57 は椀。口縁部から体部片。58 は壺か。口縁部片で、口径 4.0㎝を測る。59 ～ 62 は甕。59 は口縁端部の破片。60 は頸部から肩部片で、外面に平行タタキを施し、内面に青海波文当具痕を残す。61・62 は胴部片。61 は内面に同心円文当具痕、62 は青海波文当具痕を残す。

緑釉陶器　63 は椀か。口縁部の小片。土師質であるため、防長産と考えられる。

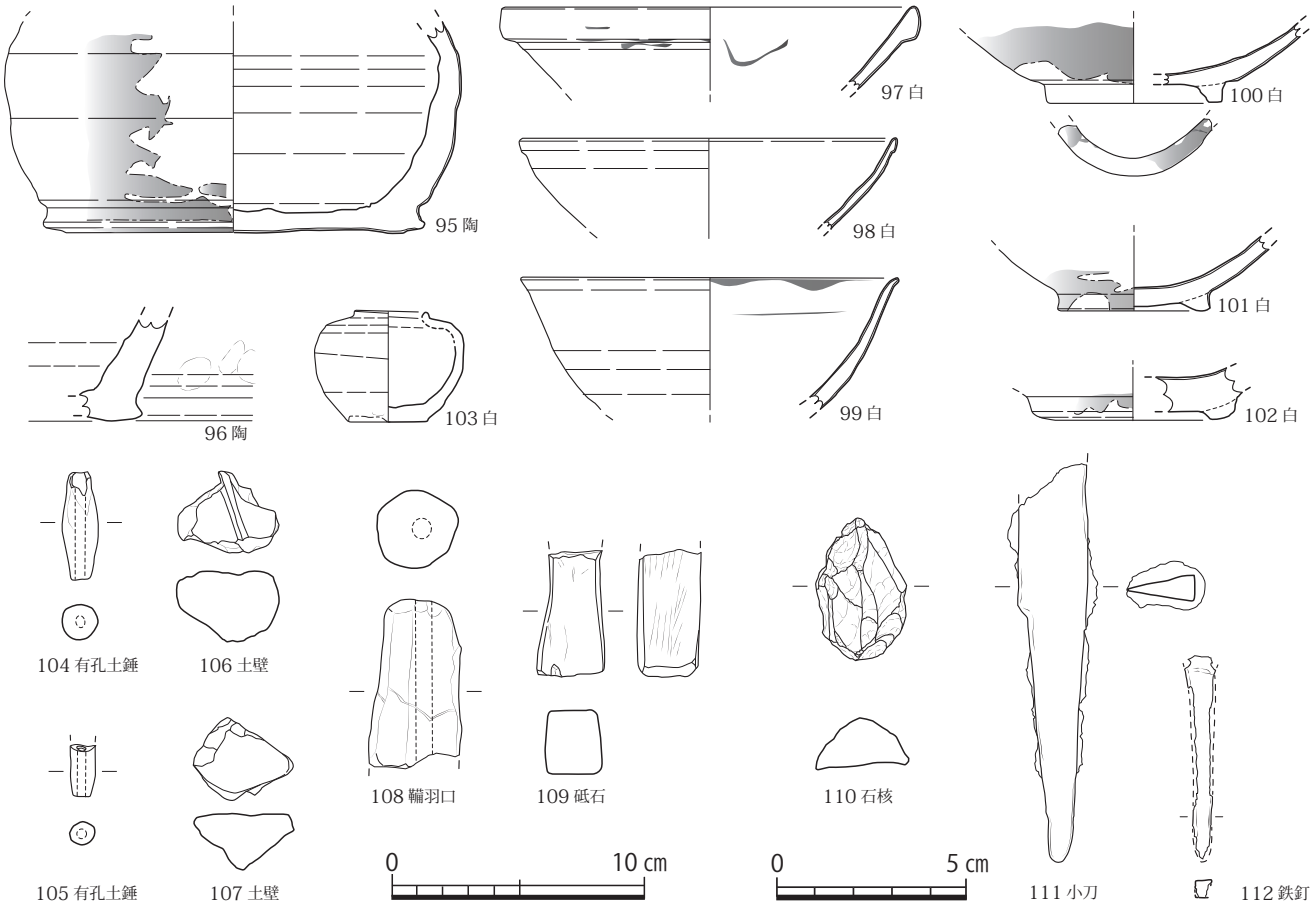
黒色土器　88・89 は坏。いずれも復元口径 15.0㎝を測る。いわゆる内黒の黒色土器である。



第 41 図　SD 051 出土遺物実測図 1（1/3）



第 42 図　SD 051 出土遺物実測図 2（1/3）



第 43 図　SD 051 出土遺物実測図 3（1/2・1/3）

瓦器　90 ～ 93 は埦。いずれも破片資料で、全形をうかがえるものは無い。

土師質土器　94 は鍋。口縁部から体部にかけての破片である。

陶器　95 は壺。胴部から底部片で、復元底径 15.3㎝を測る。底部外面はヘラ切り後ナデて仕上げている。外面には自然釉がかかる。産地不明。96 は甕。底部の小片である。備前焼と考えられる。

白磁　97 ～ 103 は白磁。97 ～ 102 は碗。97 は口縁部から体部片で、復元口径 16.8㎝を測る。口縁端部は玉縁となる。98 も口縁部から体部片で、復元口径 15.2㎝を測る。口縁端部は小さな玉縁となる。99 は口縁部から体部片で、復元口径 15.2㎝を測る。口縁端部は外反する。100・101 は体部から高台部片。100 は畳付に目痕を残す。102 は底部から高台部片。103 は小壺。完形品で、口径 2.9㎝、底径 3.6㎝、器高 4.5㎝を測る。外面は胴部下位まで施釉する。底面は回転ヘラケズリで仕上げで露胎となる。

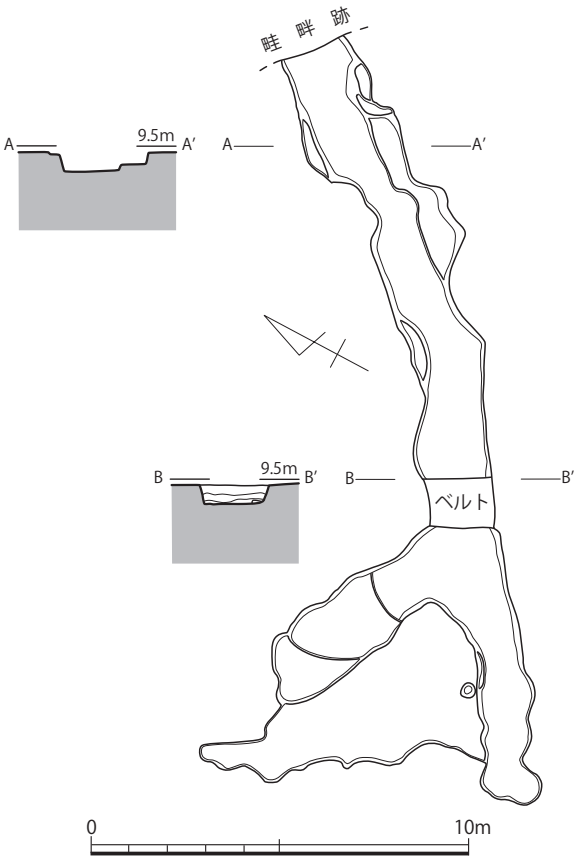
土製品　104・105 は有孔土錘。いずれも欠損するが棒状を呈す有孔土錘で、漁網錘と考えられる。106・107 は土壁。いずれもスサ入りの粘土塊である。108 は鞴羽口。上端部の破片である。金属溶解物の付着は確認できない。

石製品　109 は砥石。上部を欠く。幅は 2.7㎝で、 4 面の砥面を残す。細粒砂岩製。

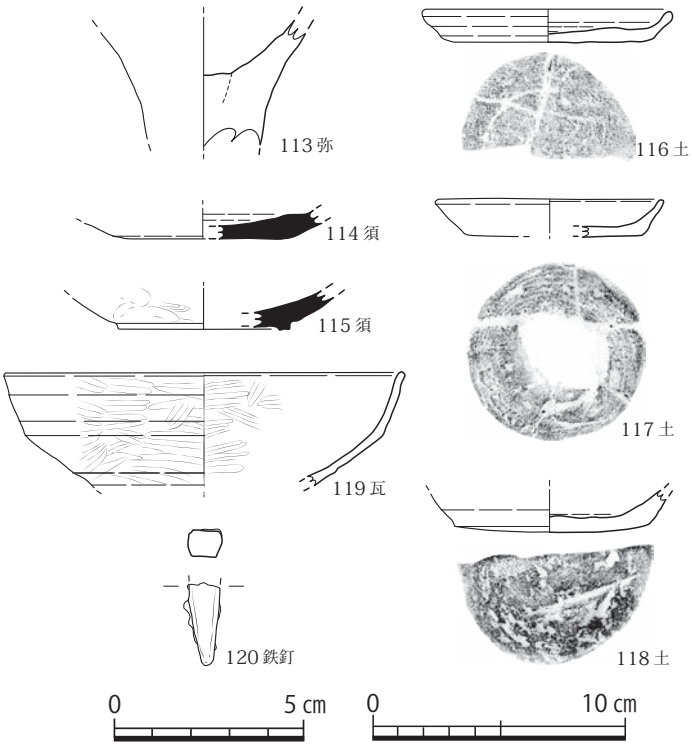
石器　110 は石核か。長さ 3.6㎝、幅 2.3㎝、厚さ 1.4㎝を測る。全体的にローリングを受けている。石材は黒曜石。産地はよく分からないが、色調から姫島産ではないと考えられる。

鉄器　111 は小刀。刃部から茎部にかけての破片で、刃部の上半と切先を欠く。残長 10.6㎝を測る。全体的に錆に覆われ、木質などの有機物は目視できない。また茎部の目釘も確認できない。

鉄製品　112 は鉄釘。全体的に剥離が進み、状態は良くない。断面形は方形を呈す。



第 44 図　SD 052 実測図（1/200）



第 45 図　SD 052 出土遺物実測図（1/2・1/3）

SD052（第 44・45 図、図版 4 ・ 6）

調査区の南端を南西から北東方向に伸びる。西側はＶ字状に広がる。一方東側は一部調査区のきわにぶつかり、調査区外へと広がる。SK019 に切られている。現状で、長さ約 30m、最大幅 9.1m、深さ 0.5 mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、中国陶器など、多くの遺物が出土し、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、鉄釘を図示した。

弥生土器　113 は甕。底部片であるが、底面を欠く。

土師器　116･117 は小皿。いずれも底部は回転糸切りで仕上げる。116 は底部外面に板状圧痕を残す。118 は小坏。底部片で回転ヘラ切りで仕上げ、板状圧痕を残す。

須恵器　114 は坏身。底部片で回転ヘラケズリで仕上げる。115 は埦。底部から高台部の破片。

瓦器　119 は埦か。口縁部から体部片。復元口径 16.0㎝を測る。

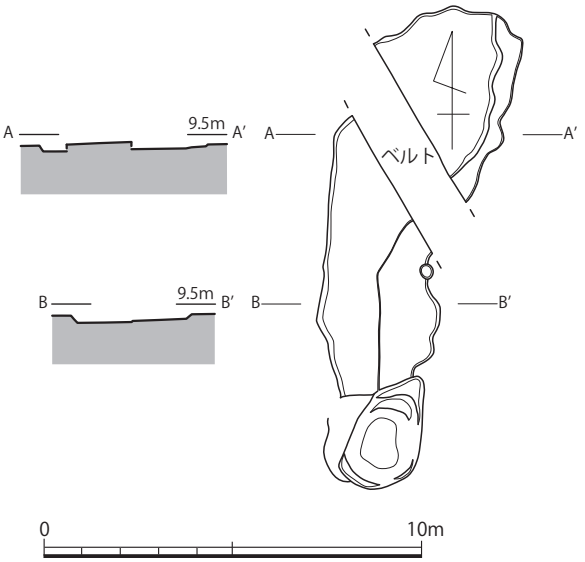
鉄製品　120 は鉄釘。先端部の破片。断面形は方形である。

SD053（第 46・47 図、図版 6）

調査区の西側を南西から北東方向に伸びる。西側は SK012 に切られている。長さ約 11m､最大幅 4 m、深さ 0.2 mを測る。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、白磁、炭など、多くの遺物が出土した。そのうち弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、瓦器、瓦質土器、白磁、土錘、砥石を図示した。

弥生土器　121 は甕。底部の破片で、復元底径 5.0㎝を測る。断面で粘土の接合痕をうかがうことができる。

土師器　122 は甕。口縁部から胴部上位の破片で、頸部から口縁部にかけて外反する。外面はタタキ



第 46 図　SD 053 実測図（1/200）

を施す。135・136 は小皿。いずれも 2 分の 1 程度を残し、底部は回転糸切りで仕上げる。底部外面に板状圧痕を残す。137 は坏。口縁部から底部片で、復元口径 14.4㎝、器高 3.4㎝を測る。138 ～ 142 は埦。いずれも体部下位から高台部の破片である。

須恵器　123・124 は蓋。いずれも天井部から口縁部の破片で、123 は復元口径 13.0㎝、124 は復元口径 12.0㎝を測る。123 は宝珠形の摘みが付くと考えられる。124 は 123 に比して器高が低いことから、扁平な摘みが付くと考えられる。いずれも口縁端部は下方に折り曲げ、嘴状に仕上げる。125 は坏身。受部から底部片。底部は回転ヘラ切りで、回転ヘラケズリを施さない。126 は埦。体部下位から高台部の破片である。127 は器台か。器部の破片で、その外面上位に 1 条の三角突帯をめぐらせる。128・129 は甕ないし壺。128 は口縁部から頸部の破片で、復元口径 13.4㎝を測る。頸部内面より下位に青海波文当具痕を残す。129 は頸部から肩部片。外面にカキメを施し、頸部内面より下位に青海波文当具痕を残す。130 ～ 132 は甕。130 は頸部から肩部片、131 は肩部片、132 は胴部片である。いずれも外面に平行タタキを施し、131 と 132 は内面に青海波文当具痕を残す。

緑釉陶器　133 は埦か。口縁部から体部にかけての破片で、復元口径 14.8㎝を測る。胎土が土師質であることから防長産と考えられる。

製塩土器　134 は胴部の小片。内面に細かい布目痕を残し、外面はオサエによる指頭痕が明瞭に残る。

瓦器　143・144 は埦。いずれも底部から高台部片で、144 は高台内の底部外面に、ヘラ状工具による十字の施文が確認できる。

瓦質土器　145 は鍋。口縁部から体部にかけての破片である。

白磁　146 ～ 148 は碗。146 は口縁部から体部片で、復元口径 16.8㎝を測る。口縁端部は玉縁である。147 は口縁部から体部片で、復元口径 16.2㎝を測る。口縁端部は外反する。148 も口縁部から体部片で、体部は内湾して丸みを帯び、口縁端部は直口縁となる。149 は角坏。口縁部から体部片で、平面形は八角形になると考えられる。

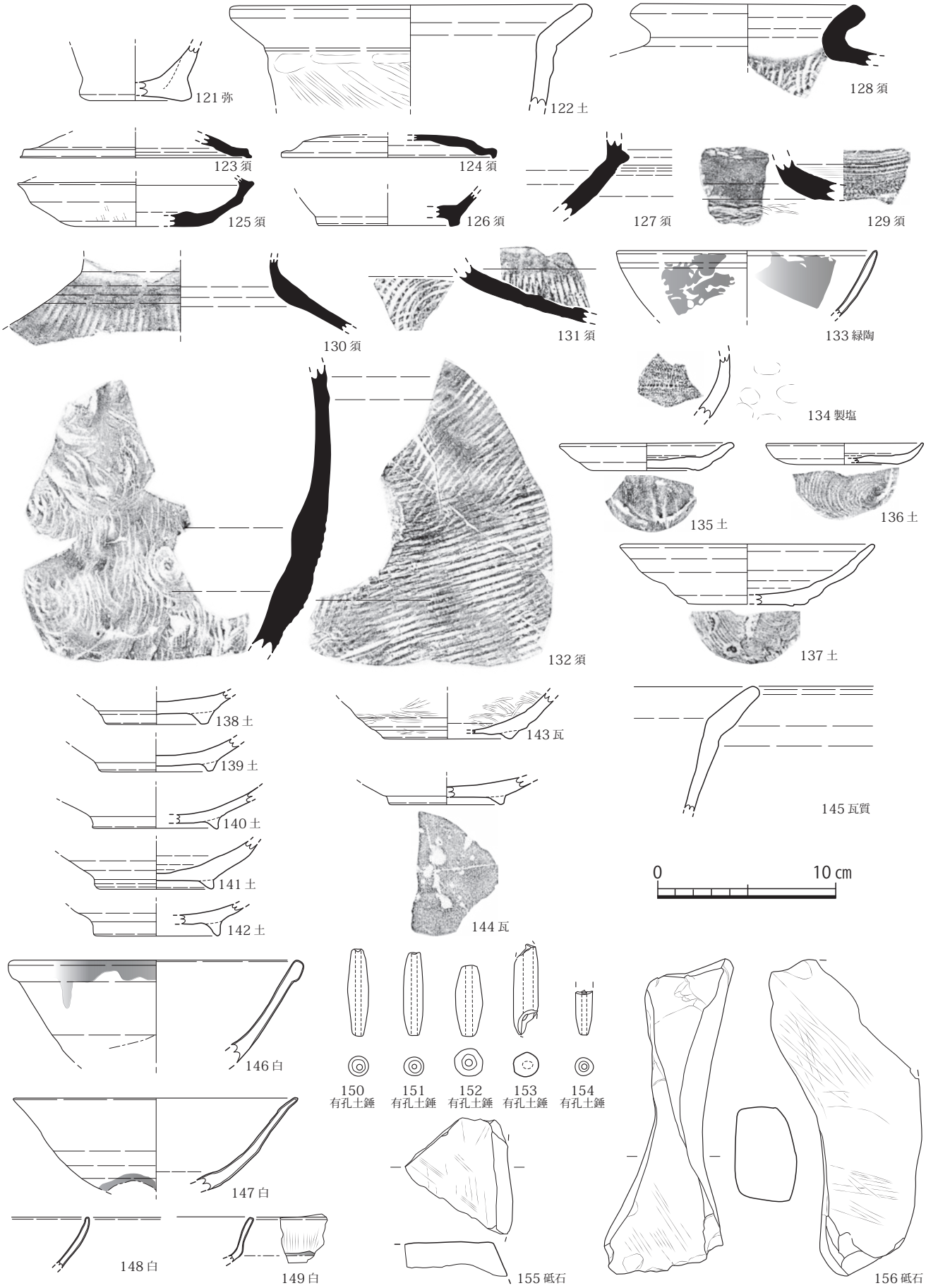
土製品　150 ～ 154 は有孔土錘。いずれも棒状を呈し、漁網錘と考えられる。150 ～ 152 は完形で、150 は長さ 4.9㎝、幅 1.1㎝、151 は長さ 4.2㎝、幅 1.1㎝、152 は長さ 4.0㎝、幅 1.6㎝を測る。

石製品　155・156 は砥石。155 は砥面を 2 面残す破片である。石材は細粒砂岩。156 は全体の 4 分の 3 程度を残し、おおよその全形をうかがえる。中央がくびれる角柱状を呈し、断面形は長方形である。残長 17.9㎝、幅 6.7㎝を測る。重量は約 570 g ある。砥面は 5 面あり、置き砥として使用したものであろう。石材は細粒砂岩である。

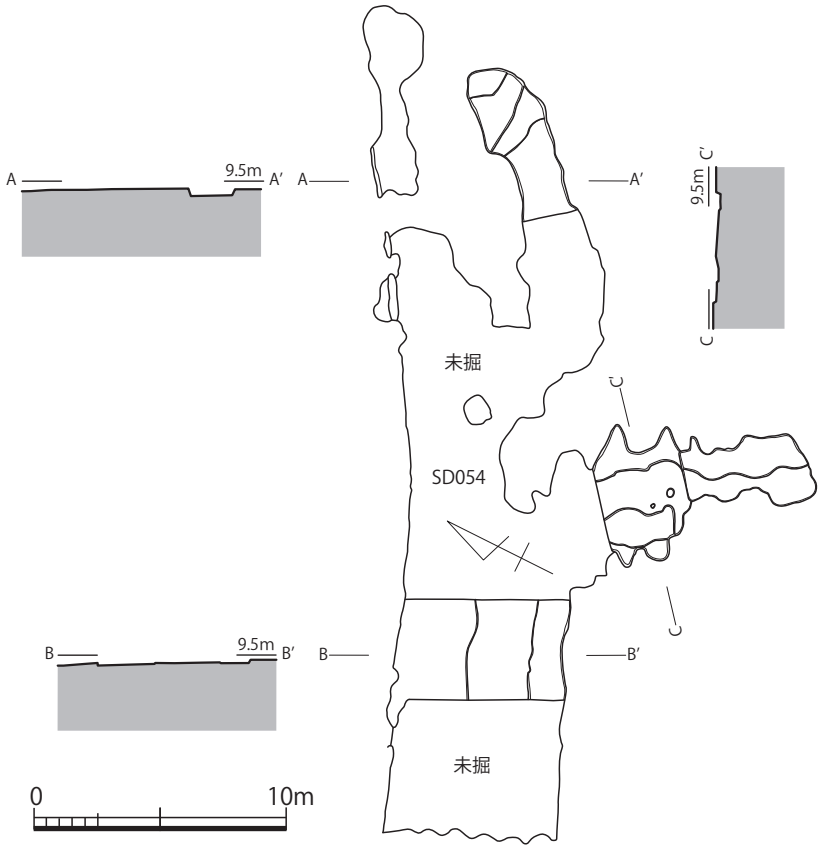
SD054（第 48・49 図、図版 6）

調査区の中央を南西から北東方向に伸び、東側は枝分かれする。長さ約 32m、最大幅 6.5m、深さ 0.2 mを測る。土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、白磁、青磁が出土した。

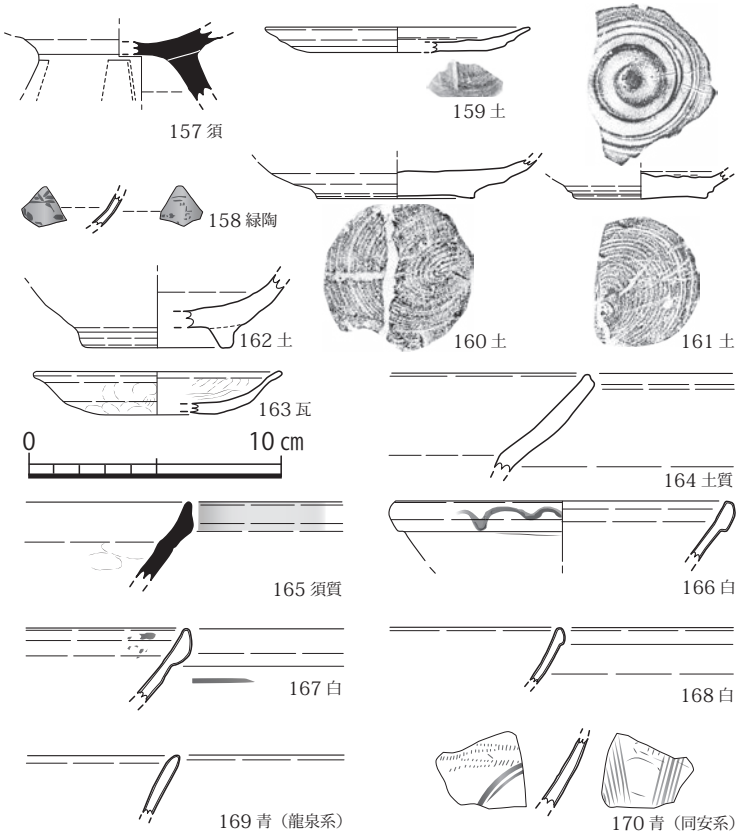
土師器　159 は小皿。口縁部から底部片で、復元口径 10.6㎝、器高 1.0 を測る。160・161 は坏。い



第 47 図　SD 053 出土遺物実測図（1/3）



第 48 図　SD 054 実測図（1/300）



第 49 図　SD 054 出土遺物実測図（1/3）

ずれも底部片で、回転糸切りで仕上げる。板状圧痕はない。161 は見込みに明瞭なロクロナデの痕跡を残す。162 は埦。体部から高台部の破片である。

須恵器　157 は高坏。坏部底面から脚部上位の破片。脚部には 4 方向に透孔を切り込む。

緑釉陶器　158 は埦か。体部の小片である。須恵質であることから畿内産と考えられる。釉薬は深緑色で、黄緑色を呈す防長産とは異なる。

瓦器　163 は小皿。口縁部から底部片で、復元口径 9.9㎝、器高 1.7㎝を測る。

土師質土器　164 は鍋か。口縁部片の破片である。

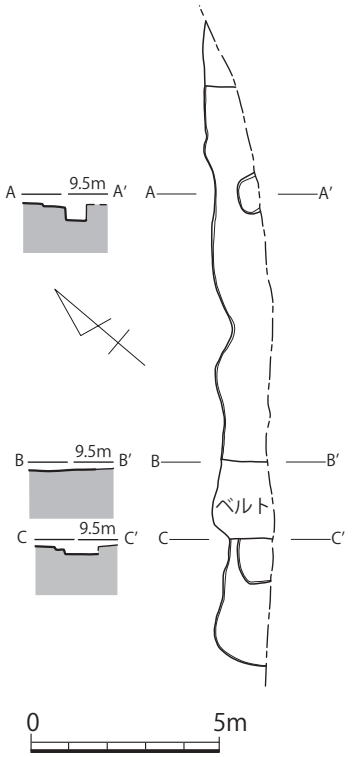
須恵質土器　165 は鉢。口縁部から体部上位の破片で、口縁端部は玉縁状に肥厚させる。いわゆる東播系の捏鉢である。

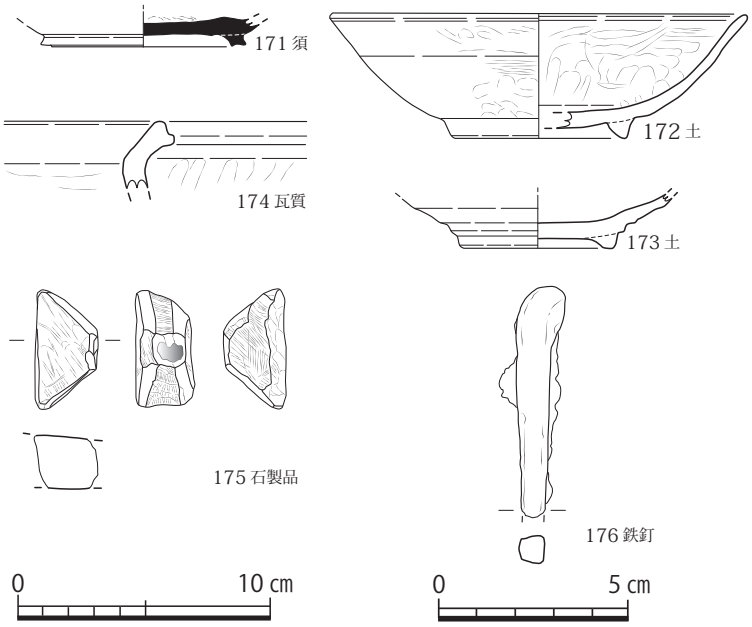
白磁　166 ～ 168 は碗。166・167 は口縁部から体部片で、端部を玉縁とする。168 も口縁部から体部の破片。口縁端部は小さな玉縁となる。

青磁　169・170 は碗。169 は口縁部片で、龍泉窯系で内外面に装飾をもたない。口縁端部は丸く直口する。170 は体部片。同安窯系で、内面に櫛点描文、外面に櫛描文を施す。

SD055（第 50・51 図、図版 6）

調査区の南端を南西から北東方向に伸び、東側は調査区外へと続く。SD052 と一連の遺構の可能性がある。検出できた範囲で、長さ約 17m、最大幅 1.5m、深さ 0.2 mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁などがあり、土師器、須恵器、瓦質土器、滑石





第 51 図　SD 055 出土遺物実測図（1/2・1/3）

第 50 図　SD 055 実測図（1/200）

製品、鉄釘を図示した。

土師器　172・173 は埦。172 は 4 分の 1 程度を残す破片で、復元口径 16.7㎝、器高 5.0㎝を測る。173 は底部から高台部片。

須恵器　171 は埦。底部から高台部の破片である。

瓦質土器　174 は壺か。口縁部から頸部の破片で、口縁端部は凹んでいる。

石製品　175 は滑石製品。平面形が台形を呈すが、欠損品である。石鍋の再加工品か。

鉄製品　176 は鉄釘。先端部を欠き、現状で長さ 6.1㎝、幅 0.7㎝を測る。全体的に錆に覆われているため形状は明瞭ではないが、頭部は肥厚する。断面形が方形になる角釘である。

SD056（第 52・53 図、図版 6）

調査区の南西端を南西から北東方向に伸びる。SD055 の延長線上に接するようにあり、一連の遺構となる可能性がある。検出できた範囲で、長さ 8.4m、最大幅 1.8m、深さ 0.2mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁などがあり、土師器、土師質土器、須恵質土器、白磁を図示した。

土師器　177 は坏。底部片で、回転糸切りで仕上げる。

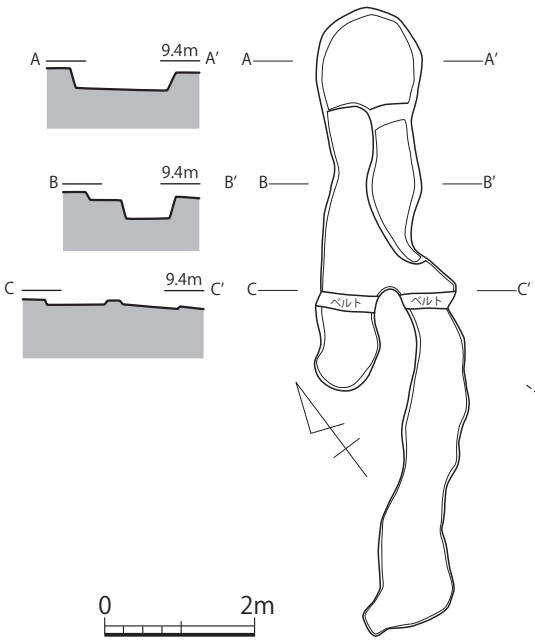
土師質土器　178 は鍋。口縁部の小片である。

須恵質土器　179 は鉢。底部片で、回転ヘラ切りする。いわゆる東播系の捏鉢である。

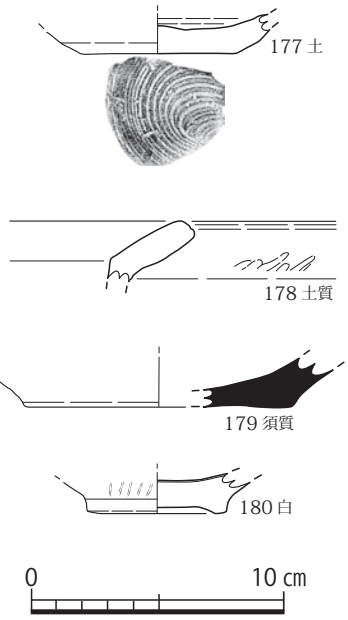
白磁　180 は碗。底部から高台部の破片。外面にヘラケズリの痕跡を残す。

SD057（第 54・55 図、図版 6）

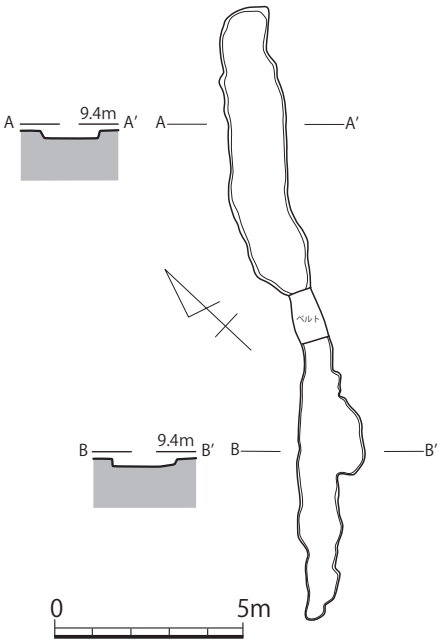
調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。後述の SD058 と並行する。長さ約 15m、最大幅 1.8m、深さ 0.2mを測る。出土遺物に土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、陶器、白磁などがあるが、白磁と土錘を図示した。



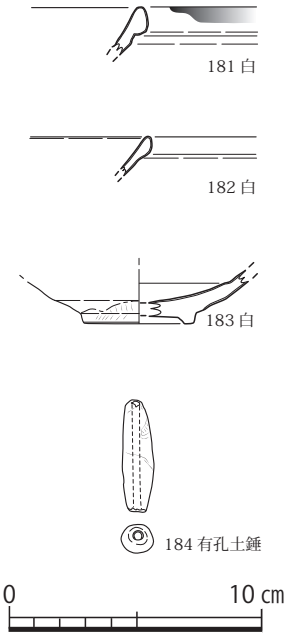
第 52 図　SD 056 実測図（1/100）



第 53 図　SD 056 出土遺物実測図（1/3）



第 54 図　SD 057 実測図（1/200）



第 55 図　SD 057 出土遺物実測図（1/3）

白磁　181 は碗。口縁部片で、端部は肉厚な玉縁になる。182・183 は皿。182 は口縁部片。端部は玉縁である。183 は体部から高台部の破片。

土製品　184 は有孔土錘。棒状を呈す。完形で、長さ 4.5㎝、幅 1.25㎝を測る。漁網錘である。

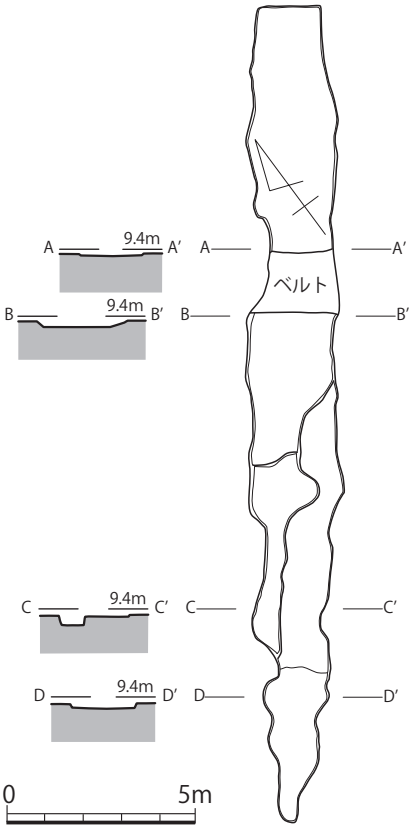
SD058（第 56・57 図、図版７）

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。前述の SD057 と並行する。長さ約 21.5ｍ、最大幅 2.5ｍ、深さ 0.2ｍを測る。出土遺物に土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁、中国陶器などがあり、土師器、瓦器、白磁、青磁、中国陶器、土錘を図示した。

土師器　185 は小皿。全体の３分の２を残し、復元口径 9.6㎝、器高 1.5㎝を測る。底部は回転糸切りで仕上げ、板状圧痕を残す。186 ～ 189 は坏。186 は全体の４分の１程度を残し、復元口径 14.4㎝、器高 3.0㎝を測る。底部は回転糸切りか。187 は体部から底部片。188・189 は底部片。いずれも底部は回転糸切りで仕上げる。188 は板状圧痕を残す。190 ～ 193 は埦。190 はほぼ完形で、口径 16.7㎝、器高 6.0㎝を測る。191 は底部片で高台が剥離する。192・193 は底部から高台部片。

瓦器　194・195 は埦。いずれも底部から高台部の破片である。

白磁　196 ～ 199 は碗。196 は口縁部片。端部は玉縁となる。197 は口縁部から体部片。口縁端部は屈折し、嘴状に尖る。内面には櫛目文を施す。198 は体部から高台部片。外面に縦方向のヘラ描文を施す。



第 56 図　SD 058 実測図（1/200）

199 は底部から高台部片。

青磁　200 ～ 201 は碗。200 は口縁部から体部片で、復元口径 14.0㎝を測る。龍泉窯系で、内面に雲文と櫛描文を施す。201 も口縁部から体部片。復元口径 13.4㎝を測る。

中国陶器　202 は盤。口縁部の破片で、端部はＴ字形を呈す。

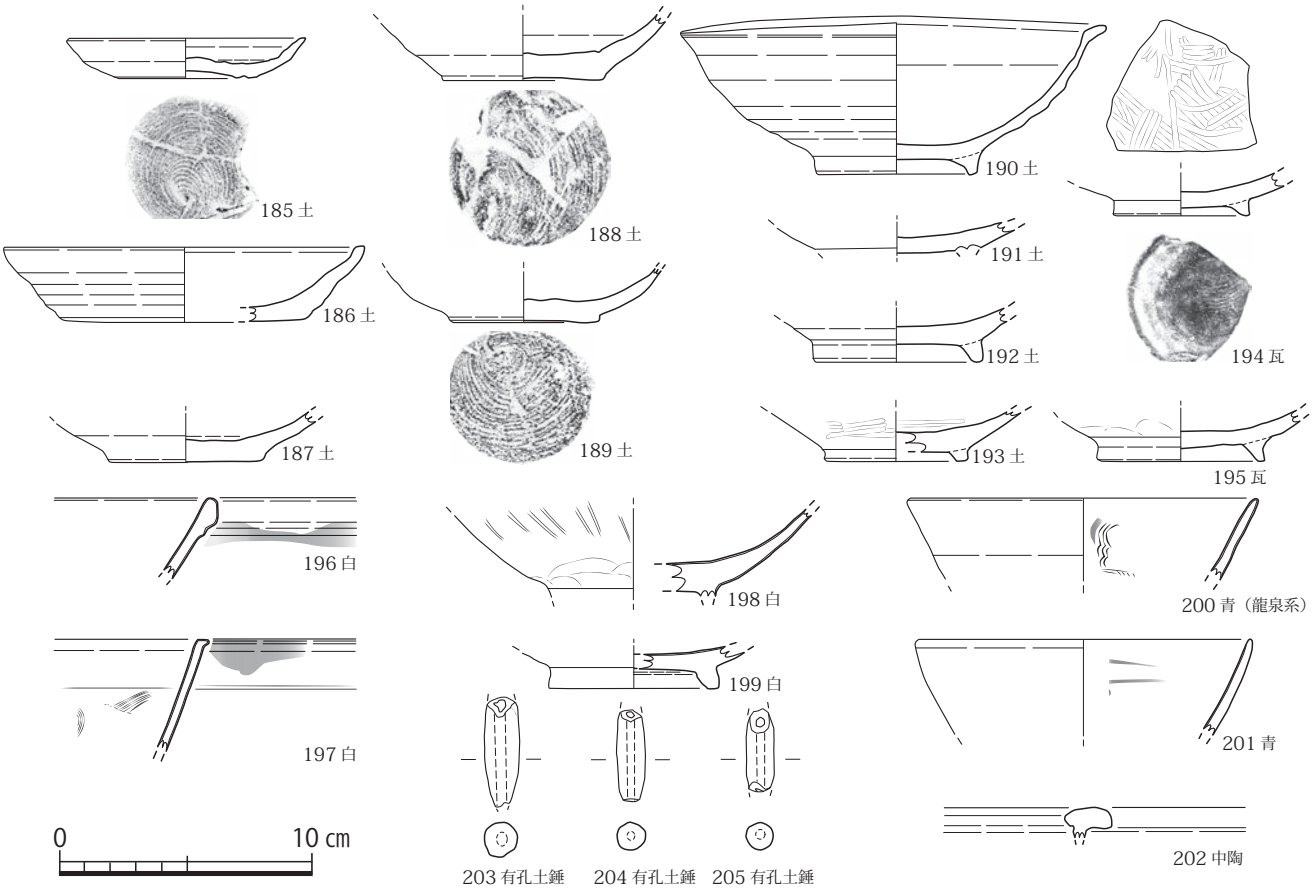
土製品　203 ～ 205 は有孔土錘。棒状を呈し、漁網錘と考えられる。いずれも端部を欠損する。

SD059（第 58・59 図、図版７）

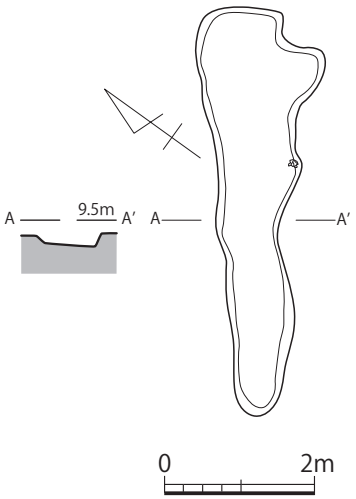
調査区の中央南寄りを西から東方向に伸びる。SD051 と並行し、一連の遺構の可能性がある。長さ 5.4ｍ、最大幅 1.7ｍ、深さ 0.2ｍを測る。出土遺物に弥生土器、土師器、瓦器、土師質土器があり、弥生土器と土師器を図示した。

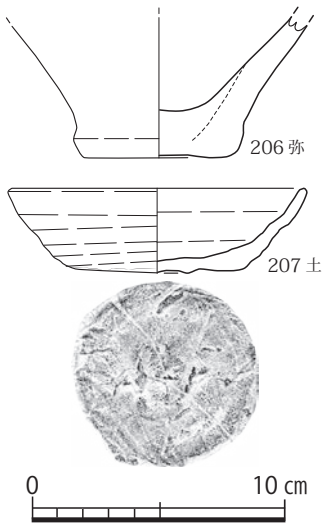
弥生土器　206 は壺。胴部下位から底部の破片である。甕の可能性もある。

土師器　207 は坏。ほぼ完形で、口径 11.8㎝、器高 3.4㎝を測る。底部は回転ヘラ切りする。板状圧痕を残す。

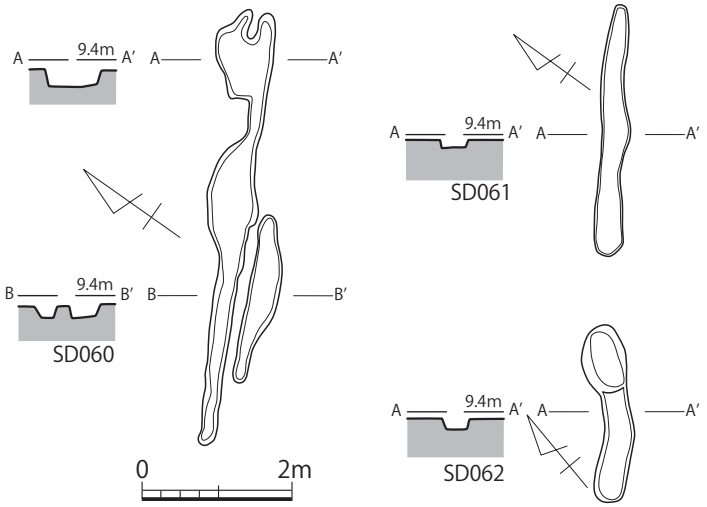


第 57 図　SD 058 出土遺物実測図（1/3）





第 58 図　SD 059 実測図（1/100）　**第 59 図　SD 059 出土遺物実測図**（1/3）



第 60 図　SD 060 ～ 062 実測図（1/100）

SD060（第 60 図）

調査区の西側を西から東方向に伸びる。SX081 と並行し、一連の遺構の可能性がある。長さ 5.8m、最大幅 0.8m、深さ 0.2mを測る。出土遺物に弥生土器、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器があるが、小片のため図示できなかった。

SD061（第 60 図）

調査区の中央南寄りを南西から北東方向に伸びる。長さ 3.3m、最大幅 0.4m、深さ 0.2mを測る。出土遺物に瓦器、青磁があるが、小片のため図示できなかった。

SD062（第 60 図）

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。SD062 の延長線上にあることから、一連の遺構の可能性がある。長さ 2.4m、最大幅 0.6m、深さ 0.2mを測る。出土遺物に土師器、瓦器、須恵質土器があるが、小片のため図示できなかった。

SD063（第 61・62 図、図版 7）

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。SD057 と近接することから、一連の遺構の可能性がある。長さ約 7m、最大幅 2.5m、深さ 0.2mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、白磁、青磁などがあり、土師器、土師質土器、白磁を図示した。

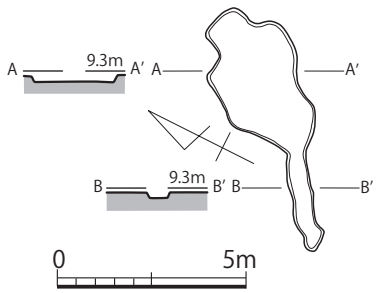
土師器　208 は埦。底部から高台部の破片。

土師質土器　209 は鍋。口縁部の小片である。

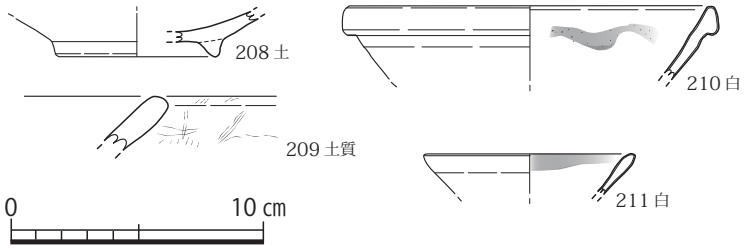
白磁　210 は碗。口縁部から体部片で、復元口径 15.0㎝を測る。口縁端部は玉縁になる。211 は皿。口縁部片で、復元口径 8.4㎝を測る。口縁端部はやや肥厚した直口縁になる。

SD064（第 63・64 図、図版 7）

調査区の中央東寄りを南西から北東方向に伸びる。西側を SX084 に切られる。また延長線上に SD058 があり、一連の遺構の可能性がある。現状で長さ 6.5m、最大幅 2.0m、深さ 0.2mを測る。出土遺物は遺憾なことに整理過程で SX084 の出土遺物と混ざってしまった。両遺構の出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁、中国陶器、炭などがあり、土師器、須恵器、瓦



第 61 図　SD 063 実測図（1/200）



第 62 図　SD 063 出土遺物実測図（1/3）

器、須恵質土器、白磁、土錘を図示した。

土師器　213 は坏。底部片で、回転糸切りで仕上げる。

須恵器　212 は壺。口縁部から頸部片で、口縁部は喇叭形に大きく広がる。

瓦器　214 は埦。底部から高台部の破片である。

須恵質土器　215 は鉢。口縁部片で、内面には強いナデの痕跡が残る。いわゆる東播系の捏鉢である。

白磁　216・217 は碗。216 は口縁部片で、端部は玉縁となる。217 は口縁部から体部の破片。端部は直口する。

土製品　218・219 は有孔土錘。棒状を呈し、漁網錘と考えられる。いずれも端部を欠く。

SD065（第 65・66 図、図版７）

調査区の北西側を南西から北東方向に伸びる。南に SX083 が接する。長さ 2.3m、最大幅 1.1m、深さ 0.1mを測る。出土遺物は土師器、須恵器、陶器があり、土師器を図示した。

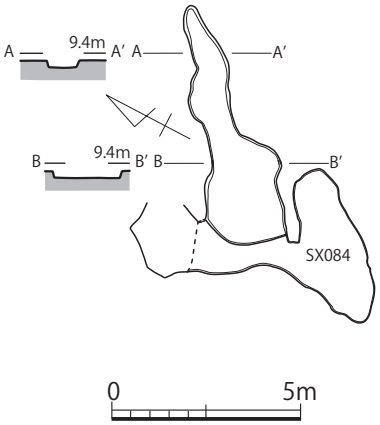
土師器　220 は埦。底部から高台部の破片である。

（５）柵列

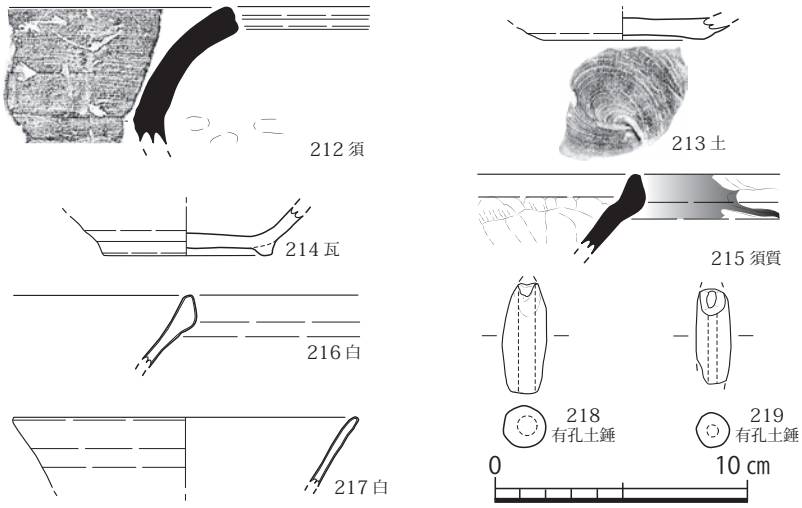
SA071（第 67・68 図、図版７）

調査区の西寄りにある。３つの柱穴からなる２間分を検出した。中央の柱穴は若干ずれるが、長さ 5.6 mを測る。柱穴は径 30 ～ 50㎝、深さ 15 ～ 30㎝を測る。柱穴から土師器、瓦器、凹石が出土し、瓦器と凹石を図示した。

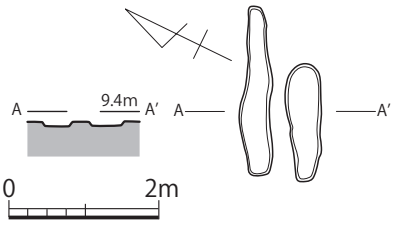
土師器　221 ～ 223 は埦。221 は体部から高台部片。内面にヘラミガキ痕を残す。222・223 は底部から高台部片。



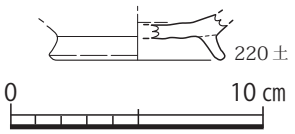
第 63 図　SD 064 実測図（1/200）



第 64 図　SD 064・SX 084 出土遺物実測図（1/3）



第 65 図　SD 065 実測図（1/100）



第 66 図　SD 065 出土遺物実測図（1/3）

石器　224 は凹石。完形で扁平な楕円形を呈す。長さ 9.9㎝、幅 7.8㎝、厚さ 3.6㎝で、重さは約 320 g を量る。一方の面の中央が敲打され、凹んでいる。河原石を利用したものと思われるが、石材は分からない。

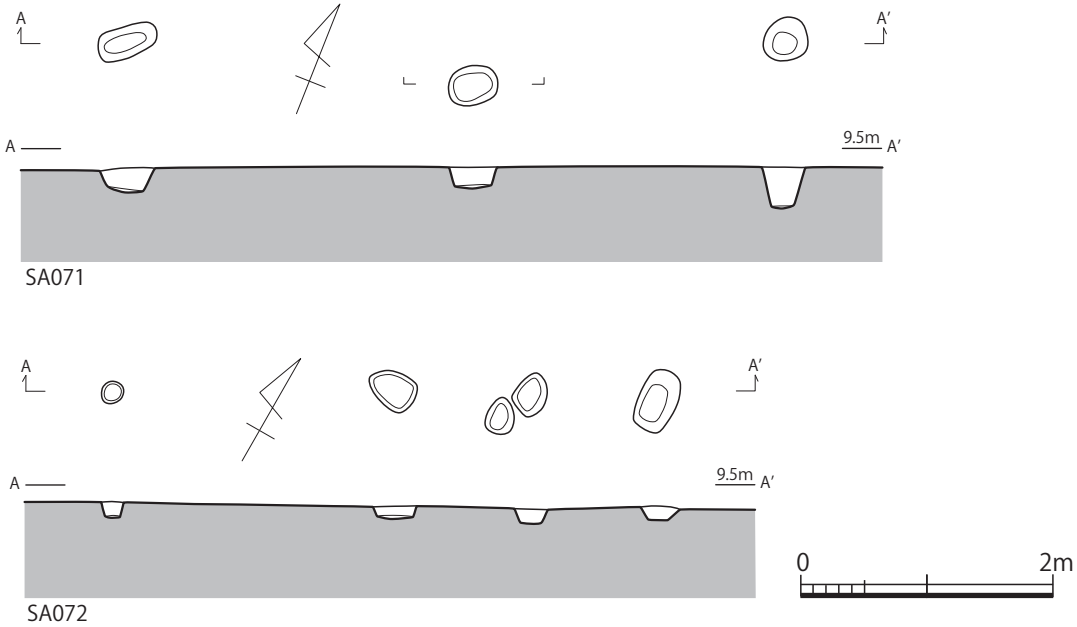
SA072（第 67 図）

調査区の南西寄りにある。SD051 の西側に接するようにある。４つの柱穴からなる３間分を検出し、長さ 4.55mを測る。柱穴は径 15 ～ 50㎝、深さ 10 ～ 15㎝を測る。柱穴から陶器が出土したが、小片のため図示できなかった。

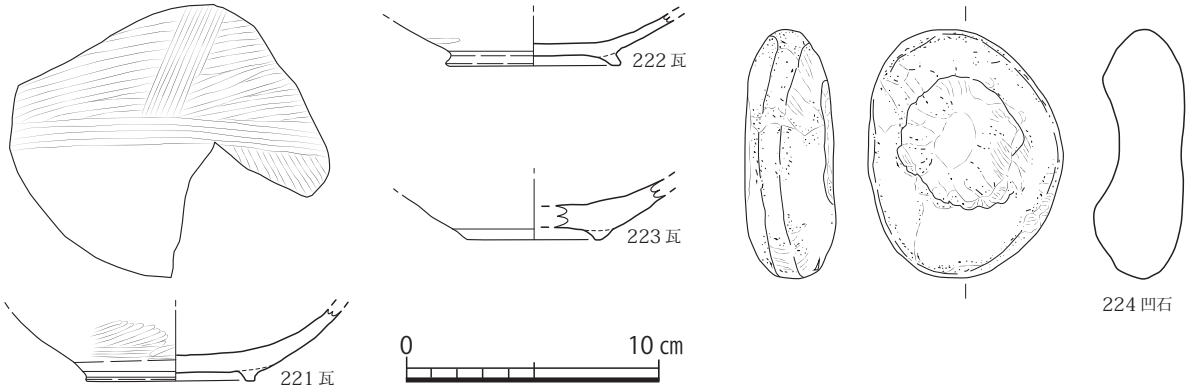
（６）不明遺構

SX081（第 69・70 図、図版７）

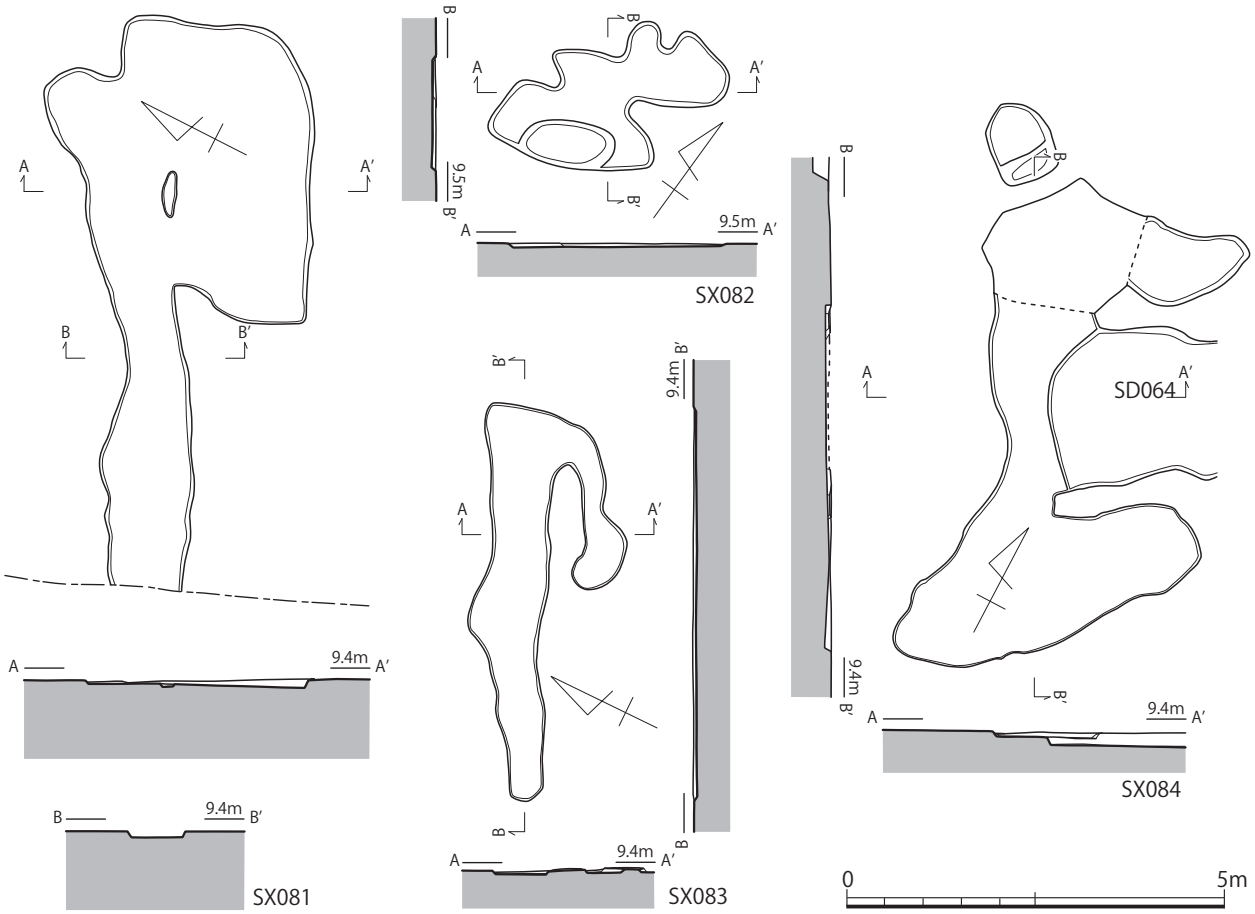
調査区の西端にあり、西側は調査区外へと続いている。SD060 が南西側に接する。平面形は歪なΓ形を呈し、現状で



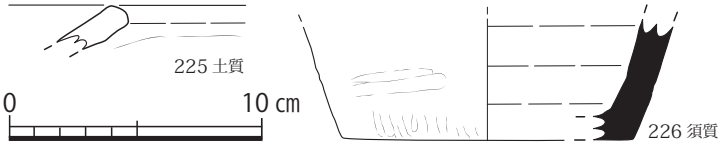
第 67 図　SA 071・072 実測図（1/60）



第 68 図　SA 071 出土遺物実測図（1/3）



第 69 図　SX081 ～ 084 実測図（1/100）



第 70 図　SX 081 出土遺物実測図（1/3）

長さ 7.6m、最大幅 3.5m、深さ 0.1m を測る。出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器があり、土師質土器と須恵質土器を図示した。

土師質土器　225 は鍋。口縁部の小片である。

須恵質土器　226 は瓶か。胴部下位から底部の破片で、底部は回転ヘラケズリで仕上げる。産地は不明である。

SX082（第 69 図）

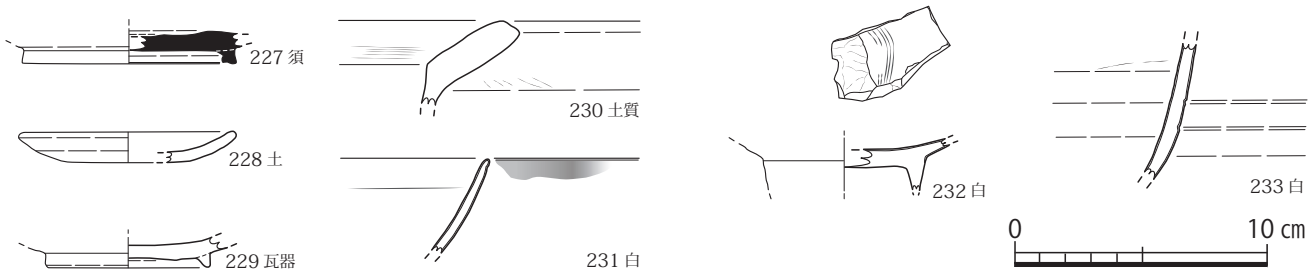
調査区の中央南寄りにある。平面形は歪なN形を呈し、現状で長さ 3.0m、最大幅 1.9m、深さ 0.1m を測る。出土遺物に土師器、瓦器があるが、小片のため図示できなかった。

SX083（第 69 図）

調査区の中央西寄りにあり、SD065 と接する。平面形は歪なΓ形を呈し、長さ 5.3m、最大幅 1.8m、深さ 0.1mを測る。出土遺物に土師器、須恵器、瓦器があるが、小片のため図示できなかった。

SX084（第 64・69 図、図版 7）

調査区の中央やや東寄りにあり、SD064 を切る。平面形はΣ形を呈し、長軸 6.7m、短軸 4.1m、深さ 0.1mを測る。出土遺物は先述したように SD064 と混ざってしまっている。両遺構の出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、白磁、青磁、中国陶器、炭などがあり、図化できる



第 71 図　SP 出土遺物実測図（1/3）

もの第 69 図で示した。

（7）柱穴（第７・71 図、図版７）

調査では複数の柱穴を検出し、土師器、須恵器、瓦器、白磁、青磁など、少量ではあるが多様な遺物が出土した。以下では図化できたものを報告する。

土師器　228 は小皿。口縁部から底部片で、復元口径 8.6㎝、器高 1.2㎝。底部は回転糸切りで仕上げる。SP131 出土。

須恵器　227 は埦。底部から高台部の破片。SP134 出土。

瓦器　229 は埦。底部から高台部の破片。SP106 出土。

土師質土器　230 は鍋。口縁部の小片である。SP112 出土。

白磁　231・232 は碗。231 は口縁部から体部片。口縁端部は直口である。SP118 出土。232 は底部から高台部の破片。見込に櫛描文を施す。高台は高く、直立するものである。SP106 出土。233 は壺。胴部の破片で、内外面にロクロナデの痕跡を残す。SP128 出土。

（8）表土（第 72・73 図、図版８）

以下では、遺構検出時の表土剥ぎの際に見つかった遺物を報告する。表面採集品も含むものと考えられる。

弥生土器　234 は壺。頸部片で、付け根に 1 条の三角突帯をめぐらす。

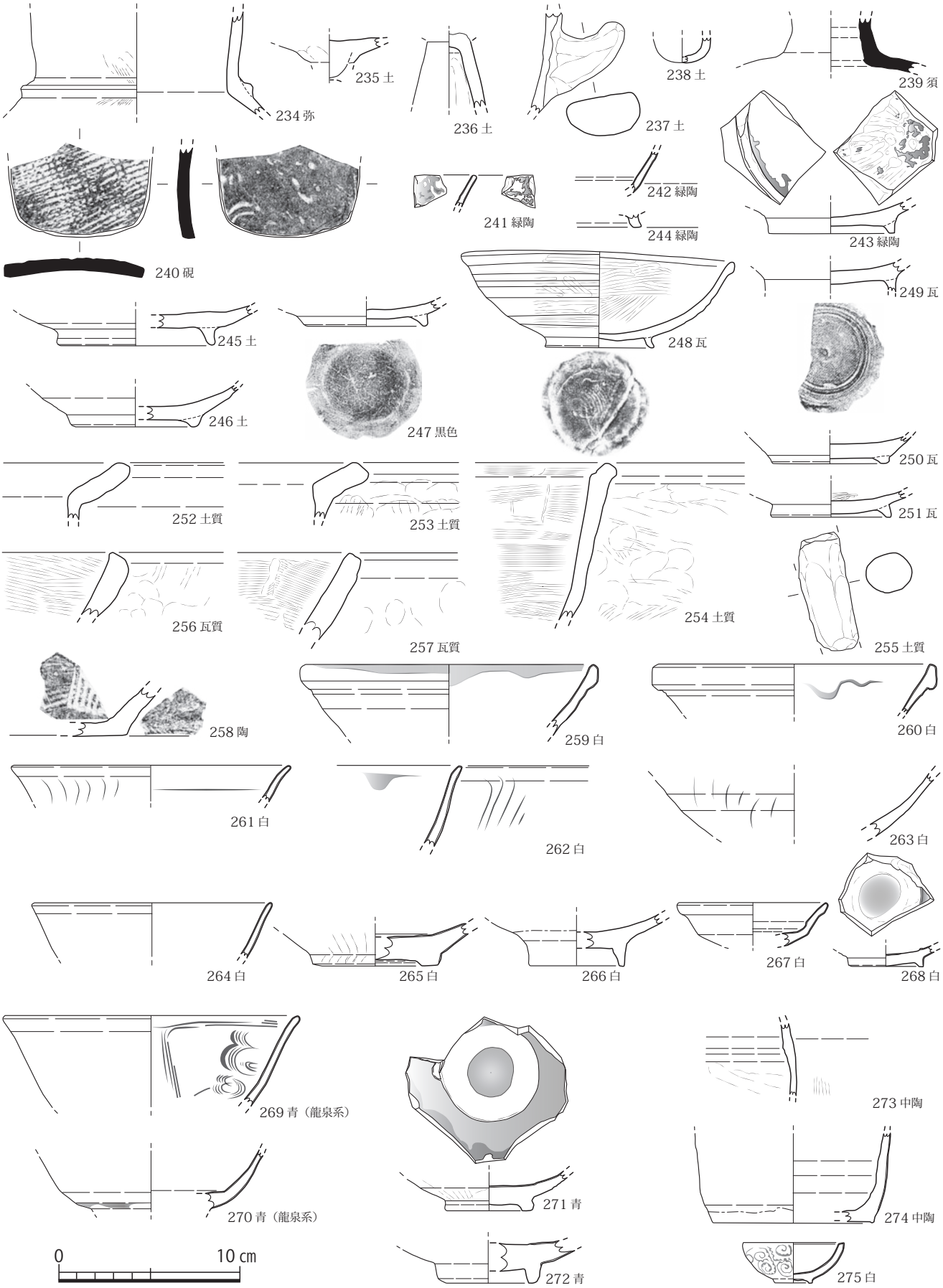
土師器　235 ～ 238 は古墳時代から奈良時代前後の土師器。235･236 は高坏。235 は坏部底面の破片。脚部との接合面で剥離する。236 は脚部上半の破片。内面にオサエの指頭痕を残す。237 は甑か。把手の破片である。238 は手捏のミニュチュア土器。口縁部を欠く。245・246 は平安時代後半から鎌倉時代の土師器。いずれも埦で、底部から高台部の破片。

須恵器　239 は壺ないし瓶類。頸部の破片である。240 は硯。甕を再加工した猿面硯で、市内では初例となる。上部を欠き、現状で長さ 5.4㎝、幅 8.0㎝、厚さ 0.7㎝を測る。海となる内面には青海波文当具痕が残るが、墨を擦ったことで全体的に磨滅している。また墨痕も明瞭に確認できる。外面は格子目文タタキの痕跡を残す。

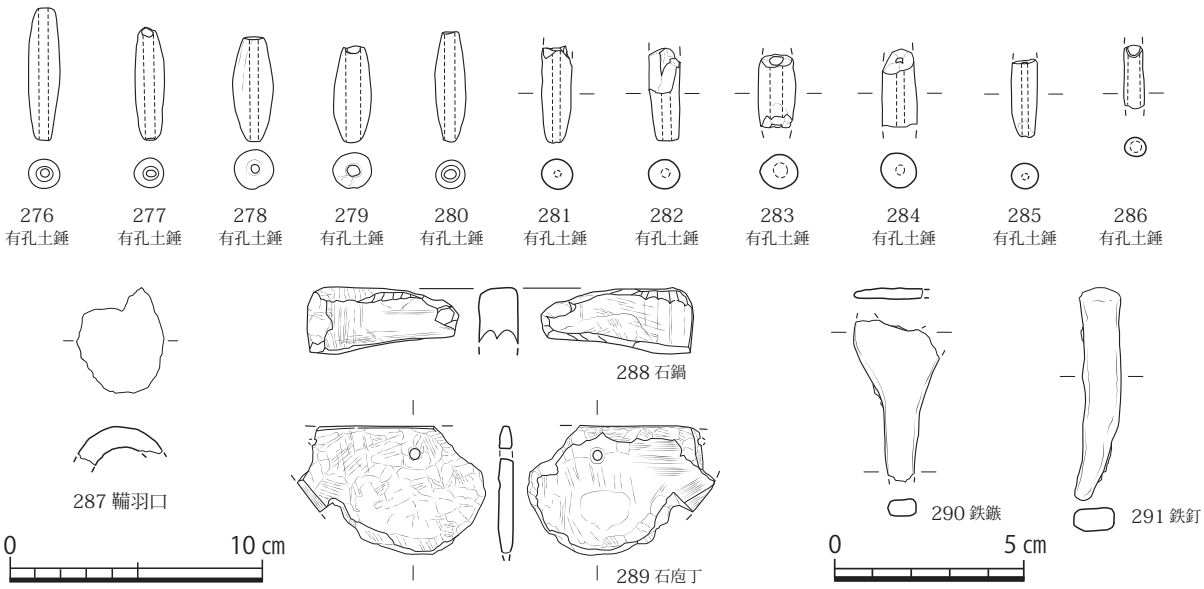
緑釉陶器　241 ～ 244 は埦。241 は口縁部片。土師質であることから防長産と推定できる。242 は体部下半の破片。やはり土師質で、防長産と考えられる。243 は底部から高台部の破片。胎土は土師質で全体的に釉薬は剥離する。防長産。244 は高台部の小片で、接合面で剥離したものである。胎土は須恵質で、近江産と考えられる。釉薬はやや濃い緑色を呈す。

黒色土器　247 は埦。底部から高台部の破片で、いわゆる内黒の黒色土器である。

瓦器　248 ～ 251 は埦。248 はほぼ完形で、口径 15.2㎝、器高 5.4㎝を測る。249 ～ 251 は底部から高台部の破片である。



第 72 図　表土 出土遺物実測図 1（1/3）



第 73 図　表土 出土遺物実測図 2（1/2・1/3）

土師質土器　252 ～ 255 は鍋。252・253 は口縁部片である。254 は口縁部から体部の破片で、内面はヨコハケ、外面にはオサエによる指頭痕を残す。255 はいわゆる足鍋の脚部片である。

瓦質土器　256・257 は鉢。いずれも口縁部片で、内面にヨコハケ、ナナメハケを施す。

陶器　258 は擂鉢。底部片で、内面に櫛状工具で擂目を施す。備前産か。

白磁　259 ～ 266 は碗。259 は口縁部から体部片で、復元口径 16.6㎝を測る。口縁端部を玉縁とする。260 は口縁部片で、復元口径 15.8㎝を測る。口縁端部は 259 と同様の玉縁である。261 は口縁部片で、復元口径 15.0㎝を測る。外面にヘラ状工具で花弁文を施す。262 は口縁部から体部、263 は体部片で、外面に 261 と同様の花弁文をもつ。264 は口縁部から体部片。復元口径 13.4㎝を測る。口縁端部を直口とする。265 は底部から高台部の破片。外面にヘラケズリ痕を残す。口縁部が玉縁となるものに一般的な高台部のつくりである。266 も底部から高台部片。高台は高く直立するものである。267・268 は皿。267 は口縁部から体部片で、復元口径 8.4㎝を測る。口縁端部は玉縁となる。268 は底部から高台部の破片。見込の釉薬を輪状に掻き取る。275 は紅皿。近世の肥前陶磁で、型成形を行う。外面は唐草文である。

青磁　269 ～ 272 は碗。269 は口縁部から体部片で、復元口径 16.6㎝を測る。龍泉窯系で、内面はヘラ状工具で分割して飛雲文を施す。270 は体部から底部片。龍泉窯系で、内外面とも無文である。271 は体部から高台部片。見込の釉薬を輪状に掻き取る。272 は底部から高台部片。底部は肉厚で、見込の釉薬をすべて掻き取る。

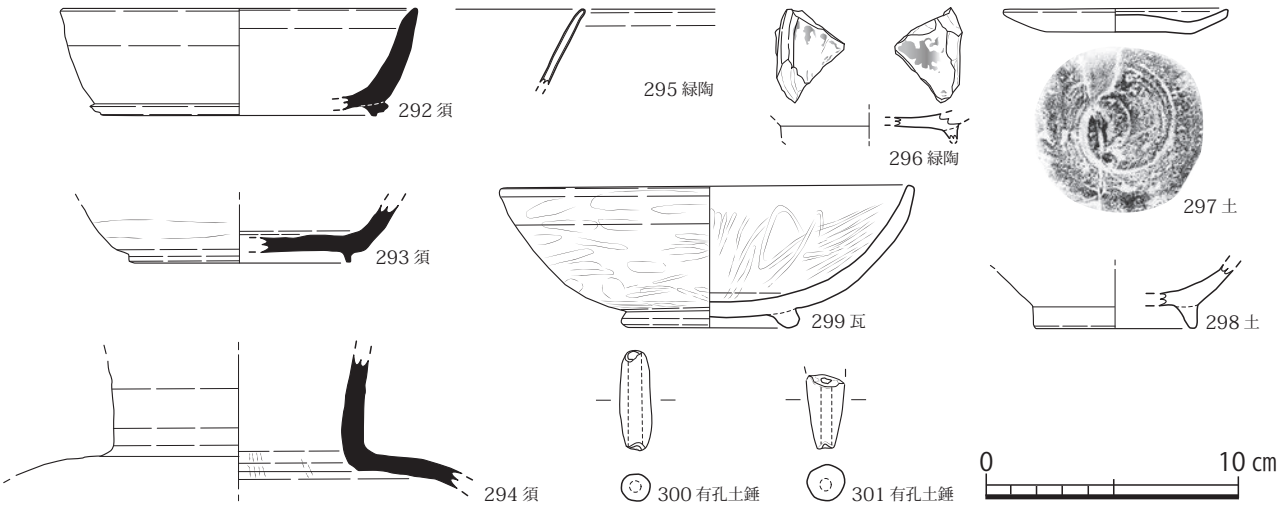
中国陶器　273 は水柱あるいは耳壺と考えられる。胴部編で、釉薬は黒褐色を呈す。274 は壺。胴部下位から底部の破片である。釉薬は灰黄色を呈す。

土製品　276 ～ 286 は有孔土錘。いずれも棒状を呈し、漁網錘と考えらえる。276 ～ 280 は完形ないしほぼ完形で、276 は長さ 5.2㎝、幅 1.3㎝、277 は長さ 4.5㎝、幅 1.2㎝、278 は長さ 4.2㎝、幅 1.6㎝、279 は長さ 3.8㎝、幅 1.5㎝、280 は長さ 4.4㎝、幅 1.25㎝をそれぞれ測る。287 は鞴羽口。小片であるが、先端に近い破片と思われる。

石製品　288 は石鍋。滑石製で、外面にススが付着する。

石器　289 は石庖丁。直背外湾刃型の破片である。２孔を穿つ。石材は頁岩質砂岩か。

鉄器　290 は鉄鏃。刃部先端と茎基部を欠く、雁股形の破片である。現状で長さ 4.3㎝を測る。刃部は



第 74 図　包含層トレンチ出土遺物実測図（1/3）

薄い。木質などの有機物は確認できない。

鉄製品　291 は鉄釘。ほぼ完形で、長さ 5.6㎝、幅 1.0㎝を測る。錆に覆われ頭部はあまり明確でない。断面形が方形の角釘である。

（9）包含層トレンチ（第７・74 図、図版８）

ラベルに「包含層トレンチ南」とあり、平板測量図から調査区の西端に設定された、一辺９ｍの正方形トレンチから出土した遺物であることが分かる。

土師器　297 は小皿。全体の３分の２程度を残し、復元口径 8.9㎝、器高 0.9㎝を測る。底部は回転糸切りで仕上げる。298 は埦。底部から高台部の破片である。

須恵器　292・293 は埦。292 は口縁部から高台部の破片で、口径 14.4㎝、器高 4.3㎝を測る。293 は体部から高台部片。294 は壺。頸部から肩部の破片である。

緑釉陶器　295・296 は埦。295 は口縁部から体部片である。須恵質であることから、畿内産と考えられる。296 は底部から高台部の破片。土師質で、黄緑色の釉薬が薄くかかる。防長産。

瓦器　299 は埦。ほぼ完形で、口径 16.5㎝、器高 5.7㎝を測る。

土製品　300･301 は有孔土錘。いずれも棒状を呈し、漁網錘と考えられる。300 は完形で、長さ 4.0㎝、幅 1.25㎝を測る。

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
1	SK011	土師器	埦	口径 16.0，高台径 6.2，器高 5.0	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ，オサエ	良好	～２㎜の砂粒	内外：灰白 10YR 8/2	ほぼ完形	○	
2	SK011	土師器	埦	復元口径 16.2，高台径 6.7，器高 5.0	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	～１㎜の砂粒少量	内外：にぶい黄橙 10YR 6/3	ほぼ完形	○	
3	SK011	土師器	埦	高台径 6.1，残高 3.3	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ，オサエ	良好	～２㎜の砂粒少量	内外：灰白 2.5Y 8/1	体部～高台部片	○	
4	SK011	瓦器	埦	口径 15.8，高台径 6.7，器高 5.5	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ，ヘラケズリ	良好	～４㎜の砂粒少量	内：灰白 2.5Y 8/2，黒 2.5Y 2/1 外：灰白 2.5Y 8/2	ほぼ完形	○	
5	SK012	須恵器	甕	残高 4.7	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ→カキメ→タタキ	良好	～２㎜の白色砂粒	内：褐灰 10YR 5/1 外：灰白 10YR 8/1	頸部～肩部片	○	自然釉付着
6	SK012	須恵器	甕	残高 3.6	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ→タタキ	良好	～１㎜の砂粒	内：灰 N 6/ 外：黄灰 2.5Y 6/1	胴部片		
7	SK012	土師器	小皿	底径 5.0，残高 0.7	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～４㎜の砂粒	内：にぶい橙 5YR 6/4 外：橙 5YR 6/6	底部片		
8	SK012	土師器	小皿	底径 4.6，残高 1.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～３㎜の透白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	底部片		
9	SK012	瓦器	埦	高台径 6.3，残高 2.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→オサエ	良好	緻密	内：灰白 10YR 8/2 外：灰白 10YR 8/1，灰 N 4/	底部～高台部片	○	
10	SK012	瓦器	埦	復元高台径 6.8，残高 2.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～１㎜の砂粒	内：褐灰 10YR 6/1 外：灰白 10YR 8/2	底部～高台部片		
11	SK012	瓦器	小皿	口径 8.45，底径 5.15，器高 1.5	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→回転糸切り→ヘラミガキ	良好	緻密	内外：灰 N 4/，暗灰 N 3/	ほぼ完形	○	
12	SK012	土師質土器	鍋	復元口径 45.0，残高 8.2	内：ヨコナデ，オサエ 外：ヨコナデ	良好	～２㎜の砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/3 外：黒褐 10YR 3/1	口縁部～体部片	○	外面スス
13	SK012	須恵質土器	鉢	残高 1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ヘラ切り	良好	～５㎜の砂粒	内外：灰白 10YR 7/1	底部片		東播系
14	SK012	白磁	碗	復元口径 15.2，残高 2.5	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/1 釉：灰白 2.5Y 7/1	口縁部～体部片		（Ⅳ）
15	SK012	白磁	碗	復元口径 16.8，残高 4.7	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～１㎜の白色砂粒少量	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部～体部片	○	（Ⅳ）
16	SK012	石製品	石鍋	残高 2.7	ケズリ	—	滑石	内：灰 N 5/ 外：暗灰 N 3/	底部片	○	外面スス
17	SK014	青磁	碗	残高 2.8	内：ロクロナデ→櫛点描文→施釉 外：ロクロナデ→櫛描文→施釉	良好	～１㎜の白色砂粒少量	素地：灰白 2.5Y 7/1 釉：灰オリーブ 5Y 6/2	体部片		同安窯系（Ⅰ-1b）
18	SK016	須恵器	甕	残高 4.1	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	～１㎜の白色砂粒	内：灰白 5Y 7/1 外：灰 5Y 6/1	胴部片		
19	SK016	須恵器	甕	残高 3.8	内：回転ナデ→（当具痕）→ナデ 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	～１㎜の白色砂粒	内：灰 N 5/ 外：灰 N 4/	胴部片		
20	SK016	須恵器	甕	残高 4.6	内：回転ナデ→（青海波文当具痕）→ナデ 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	緻密	内：褐灰 10YR 5/1 外：暗灰 N 3/	胴部片		
21	SK017	陶器	甕	残高 3.2	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰 5Y 6/1 釉：灰黄 2.5Y 7/2	口縁部片	○	中国陶器
22	SK018	土師質土器	鍋	残高 2.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～１㎜の砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 6/4 外：褐灰 7.5YR 4/1	口縁部片		外面スス
23	SK018	土製品	棒状土製品	残長 9.7，幅 3.2，厚 3.3	ナデ，オサエ	—	～３㎜の砂粒多量	にぶい黄橙 10YR 7/3	上部欠損	○	
24	SK018	土製品	有孔土錘	長 4.7，幅 1.2	—	—	～１㎜の砂粒	にぶい黄橙 10YR 7/2	完形	○	棒状
25	SK019	土師質土器	鍋	復元口径 29.2，残高 8.6	内：回転ナデ→ハケ 外：回転ナデ→ハケ	良好	～１㎜の砂粒	内：灰黄褐 10YR 6/2 外：灰黄褐 10YR 5/2	口縁部～体部片	○	外面スス
26	SK020	土師器	小皿	復元底径 6.6，残高 0.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～２㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	底部片		
27	SK020	黒色土器	埦	復元口径 14.6，残高 3.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～５㎜の透白色砂粒 ～２㎜の白色砂粒	内：暗灰 N 3/ 外：橙 5YR 6/6	口縁部～体部片		内黒
28	SK020	白磁	蓋	径 3.3，器高 1.3	内：ロクロナデ→ナデ→施釉 外：ロクロナデ→ナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	ほぼ完形	○	
29	SK023	陶器	盤	残高 1.5	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰黄褐 10YR 6/2 釉：暗灰 N 3/，暗赤褐 2.5YR 3/4	口縁部片	○	中国陶器
30	SK025	土師器	小皿	復元底径 7.5，残高 0.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～２㎜の砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR 6/4	底部片		
31	SK025	土師質土器	鍋	残高 1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～１㎜の砂粒	内：にぶい黄褐 10YR 5/3 外：灰黄褐 10YR 4/2	口縁部片		外面スス
32	SK026	白磁	碗	復元口径 13.8，残高 2.2	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→櫛描文→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/1 釉：灰黄 2.5Y 7/2	口縁部片	○	（Ⅴ-3b）
33	SK027	土師質土器	鍋	残高 1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～３㎜の砂粒	内外：橙 2.5YR 6/6	口縁部片		
34	SK028	弥生土器	壺	残高 4.2	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	緻密	内外：浅黄橙 10YR 8/3	胴部片	○	
35	SK028	土師器	高坏	残高 2.6	内：ナデ 外：ナデ	良好	～３㎜の砂粒	内外：明赤褐 5YR 5/8	坏部～脚部片		
36	SK028	須恵器	坏身	復元口径 10.3，残高 2.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～１㎜の白色砂粒	内外：黄灰 2.5Y 6/1	口縁部～体部片		
37	SK028	瓦質土器	壺	残高 4.6	内：ナデ→ケズリ 外：ナデ	良好	緻密	内外：灰白 10YR 7/1	肩部片	○	
38	SK028	陶器	甕	残高 3.8	内：回転ナデ→オサエ 外：回転ナデ→格子目タタキ	良好	緻密	内外：灰白 2.5Y 7/1	胴部片	○	
39	SK031	須恵器	大甕	残高 5.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ→櫛描波状文	良好	～３㎜の白色砂粒	内：黄灰 2.5Y 4/1 外：黄灰 2.5Y 4/1，灰白 2.5Y 7/1	頸部片	○	自然釉付着
40	SK031	土師器	埦	復元高台径 5.8，残高 1.1	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	緻密	内外：にぶい橙 5YR 7/4，褐灰 10YR 5/1	底部～高台部片		
41	SK031	土師器	埦	復元高台径 7.0，残高 2.0	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→ナデ	やや不良	～２㎜の砂粒	内：灰白 10YR 8/2 外：にぶい黄褐 10YR 5/3	底部～高台部片		
42	SK031	土師器	埦	復元高台径 6.4，残高 2.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～３㎜の砂粒	内外：灰白 10YR 8/2	底部～高台部片		
43	SK031	瓦質土器	擂鉢	残高 5.0	内：回転ナデ→ナデ→擂目施文 外：回転ナデ→ナデ，オサエ	やや不良	～３㎜の砂粒	内：褐灰 10YR 5/1 外：にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部片	○	

表１　出土遺物観察表１

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
44	SK031	陶器	碗	残高 2.6	内：ロクロナデ→施釉→釉掻き取り 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：淡黄 2.5Y 8/4 釉：オリーブ褐 2.5Y 4/4	体部～ 高台部片	○	古瀬戸？
45	SK031	青磁	碗	残高 2.1	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～1㎜の白色砂粒	素地：灰黄 2.5Y 6/2 釉：黄褐 2.5Y 5/3	体部片		龍泉窯系 （Ⅰ-1a）
46	SK031	青磁	碗	高台径 5.2，残高 2.1	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→櫛描文	良好	～3㎜の白色砂粒	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰オリーブ 5Y 6/2	底部～ 高台部片	○	同安窯系
47	SD051	弥生土器	甕	残高 5.4	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→タテハケ	良好	～5㎜の砂粒	内：橙 7.5YR 6/6 外：にぶい褐 7.5YR 5/3	口縁部片	○	須玖式
48	SD051	弥生土器	高坏	残高 5.9	内：ヨコナデ→シボリ 外：ヨコナデ	良好	～3㎜の砂粒多量	内外：にぶい黄橙 10YR 6/3	脚部片	○	
49	SD051	土師器	坏	復元口径 12.6，残高 4.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ヘラケズリ	良好	～3.5㎜の白色砂粒	内：黒褐 10YR 3/2 外：灰黄褐 10YR 5/2，赤橙 10R 6/6	口縁部～ 体部片		
50	SD051	土師器	高坏	残高 7.5	内：回転ナデ→シボリ，ケズリ 外：回転ナデ	良好	～4.5㎜の白色砂粒	内外：明赤褐 2.5YR 5/6	坏部～ 脚部片	○	
51	SD051	土師器	甕	復元口径 26.4，残高 6.0	内：回転ナデ→ケズリ，ハケ 外：回転ナデ→タテハケ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内：明赤褐 2.5YR 5/8 外：明赤褐 2.5YR 5/6	口縁部～ 肩部片	○	
52	SD051	土師器	甕	残高 9.5	内：回転ナデ→ケズリ 外：回転ナデ	良好	緻密	内：にぶい黄橙 10YR 7/3 外：にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部～ 胴部片		
53	SD051	土師器	甕	残高 6.3	内：回転ナデ→ケズリ 外：回転ナデ→オサエ	良好	～3㎜の砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/4 外：灰黄褐 10YR 5/2	口縁部～ 胴部片		
54	SD051	土師器	甕	復元口径 34.6，残高 26.5	内：回転ナデ→ヘラケズリ 外：回転ナデ→ナデ，オサエ	良好	～5㎜の砂粒	内：明赤褐 5YR 5/8 外：にぶい赤褐 5YR 5/4	口縁部～ 胴部片		
55	SD051	土師器	甕	残高 1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～4㎜の砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR 7/4	口縁部片		
56	SD051	土師器	甕	残高 6.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ→タテハケ	良好	～3㎜の砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 5/3 外：橙 7.5YR 6/6	胴部片		
57	SD051	須恵器	埦	残高 5.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：灰 7.5Y 6/1	口縁部～ 体部片		
58	SD051	須恵器	小壺	口径 4.0，残高 2.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	緻密	内：灰白 2.5Y 7/1 外：灰 N 6/	口縁部片	○	
59	SD051	須恵器	甕 or 壺	残高 2.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2㎜の砂粒	内：黄灰 2.5Y 6/1 外：灰 N 4/	口縁部片		自然釉付着
60	SD051	須恵器	大甕	残高 2.2	内：ヨコナデ→（青海波文当具痕）→ナデ 外：ヨコナデ→平行タタキ	良好	～4㎜の白色砂粒	内：灰白 N 7/ 外：黄灰 2.5YR 5/1	頸部～ 胴部片		
61	SD051	須恵器	大甕	残高 6.9	内：回転ナデ→（同心円文当具痕） 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰 5Y 5/1 外：灰 5Y 4/1	胴部片		
62	SD051	須恵器	大甕	残高 6.5	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	緻密	内：灰 N 6/ 外：灰 N 4/	胴部片		
63	SD051	緑釉陶器	碗	残高 1.4	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	～1㎜の砂粒	素地：灰白 10YR 8/1 釉：明オリーブ灰 5GY 7/1	口縁部片	○	防長系
64	SD051	土師器	坏身	復元口径 5.2，復元底径 4.4，器高 3.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～2㎜の白色砂粒少量	内：にぶい橙 7.5YR 7/4 外：にぶい橙 5YR 7/4	1/4 程度	○	
65	SD051	土師器	小皿	復元口径 8.8，残高 1.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR 8/2 外：浅黄橙 10YR 8/3	1/4 程度		
66	SD051	土師器	小皿	復元底径 5.0，残高 1.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや良好	～4㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	1/3 程度		
67	SD051	土師器	小皿	口径 8.1，底径 5.4，器高 13.0	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙 5YR 7/6 外：橙 5YR 6/8	ほぼ完形	○	
68	SD051	土師器	小皿	復元底径 5.8，器高 1.5	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→回転糸切り（板状圧痕）	やや良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 7/6	1/4 程度		
69	SD051	土師器	小皿	口径 9.6，復元底径 8.2，残高 1.6	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	1/2 程度		
70	SD051	土師器	小皿	口径 9.5，底径 6.6，器高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～3㎜の白色砂粒	内：橙 5YR 6/6 外：橙 5YR 7/6	3/4 程度	○	
71	SD051	土師器	小皿	口径 10.1，底径 6.0，器高 1.5	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 6/4 外：にぶい橙 5YR 6/4	2/3 程度	○	
72	SD051	土師器	小皿	復元口径 9.8，復元底径 8.1，残高 1.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：褐灰 5YR 4/1，にぶい橙 7.5YR 6/4 外：にぶい橙 7.5YR 6/4	1/4 程度		
73	SD051	土師器	小皿	底径 7.0，残高 0.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	底部片		
74	SD051	土師器	坏	底径 8.0，残高 1.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～4㎜の白色砂粒	内：橙 2.5YR 6/6 外：にぶい橙 2.5YR 6/4	底部片		
75	SD051	土師器	坏	復元口径 8.0，残高 1.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～2㎜の白色砂粒	内：橙 5YR 6/6 外：橙 5YR 7/6	底部片		
76	SD051	土師器	坏	底径 6.3，残高 1.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや良好	～5㎜の白色砂粒	内：灰褐 7.5YR 5/1 外：浅黄橙 7.5YR 8/4	底部片		
77	SD051	土師器	坏	口径 14.8，底径 10.6，器高 3.7	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り（板状圧痕）	やや良好	～4㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR 6/4	ほぼ完形	○	
78	SD051	土師器	坏	復元口径 14.0，器高 3.6	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り（板状圧痕）	やや良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 6/4 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	1/2 程度	○	
79	SD051	土師器	坏	口径 15.1，器高 3.6	内：ロクロナデ→ナデ，オサエ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～3㎜の透白色砂粒 ～4㎜の砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/4 外：橙 5YR 7/6	ほぼ完形	○	
80	SD051	土師器	坏	復元口径 14.0，残高 3.8	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/4 外：橙 2.5YR 6/6	1/3 程度		
81	SD051	土師器	坏	復元底径 8.6，残高 1.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 6/4 外：橙 5YR 6/6	底部片		
82	SD051	土師器	埦	復元高台径 6.6，残高 3.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや不良	～3㎜の白色砂粒	内：淡橙 5YR 8/4 外：橙 5YR 7/6	底部～ 高台部片		
83	SD051	土師器	埦	高台径 7.6，残高 2.4	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/2 外：にぶい橙 7.5YR 7/3	底部～ 高台部片	○	
84	SD051	土師器	埦	定径 6.6，器高 3.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	～3㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/4 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	体部～ 高台部片	○	
85	SD051	土師器	埦	高台径 6.0，残高 2.8	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ	良好	～3㎜の透白色砂粒	内：灰白 2.5Y 8/1 外：浅黄橙 10YR 8/3	体部～ 高台部片	○	
86	SD051	土師器	埦	高台径 6.7，残高 3.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰黄褐 10YR 5/2 外：にぶい橙 7.5YR 7/2	体部～ 高台部片	○	

表２　出土遺物観察表２

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
87	SD051	土師器	埦	復元高台径 5.2，残高 2.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	～１㎜の白色砂粒	内外：灰白 2.5Y 8/2	底部～高台部片		
88	SD051	黒色土器	坏	復元口径 15.0，底径 7.1，器高 4.8	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラ切り→ヘラミガキ	良好	～４㎜の砂粒	内：褐灰 10YR 4/1 外：にぶい黄橙 10YR 7/3	1/3 程度		内黒
89	SD051	黒色土器	坏	復元口径 15.0，残高 4.6	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	～１㎜の砂粒少量	内：褐灰 10YR 4/1 外：橙 5YR 7/6	口縁部～体部片		内黒
90	SD051	瓦器	埦	復元口径 16.6，残高 5.5	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→オサエ	良好	～１㎜の砂粒	内外：褐灰 10YR 5/1	口縁部～体部片		
91	SD051	瓦器	埦	残高 1.5	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～２㎜の透白色砂粒	内外：灰白 10YR 8/1	底部～高台部片		
92	SD051	瓦器	埦	復元高台径 6.4，残高 1.3	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	緻密	内外：黒褐 10YR 3/1	底部～高台部片		
93	SD051	瓦器	埦	復元高台径 6.2，残高 2.0	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ	良好	～１㎜の白色砂粒少量	内外：暗灰 N 3/	底部～高台部片		
94	SD051	土師質土器	鍋	残高 9.1	内：回転ナデ→ケズリ，オサエ 外：回転ナデ→オサエ	やや良好	～３㎜の白色砂粒	内：灰黄褐 10YR 6/2 外：褐灰 10YR 4/1，にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部～体部片		
95	SD051	陶器	壺	復元底径 15.3，残高 8.5	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→ヘラ切り→ナデ	良好	～１㎜の砂粒	素地：灰白 2.5Y 7/1 釉：黄灰 2.5Y 5/1	胴部～底部片	○	自然釉付着
96	SD051	陶器	甕	残高 4.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ→オサエ	良好	～１㎜の砂粒	素地：灰白 10YR 7/1 釉：褐灰 10YR 5/1	底部片		備前？
97	SD051	白磁	碗	復元口径 16.8，残高 3.3	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～１㎜の砂粒	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	口縁部～体部片	○	（Ⅳ）
98	SD051	白磁	碗	復元口径 15.2，残高 3.6	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 7/1 釉：浅黄 2.5Y 7/3	口縁部～体部片		（Ⅱ-1）
99	SD051	白磁	碗	復元口径 15.2，残高 5.3	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～１㎜の砂粒	素地：灰白 2.5Y 8/1 釉：灰白 2.5Y 8/2	口縁部～体部片	○	
100	SD051	白磁	碗	復元高台径 7.0，残高 3.2	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～１㎜の砂粒	素地：灰白 2.5Y 8/2 釉：灰黄 2.5Y 7/2	体部～高台部片		高台に目痕あり
101	SD051	白磁	碗	復元高台径 5.1，残高 3.0	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～３㎜の砂粒	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	底部～高台部片		（Ⅳ）
102	SD051	白磁	碗	復元高台径 8.2，残高 1.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～１㎜の砂粒	素地：灰白 2.5Y 7/1 釉：灰白 5Y 7/2	底部～高台部片		
103	SD051	白磁	小壺	口径 2.9，底径 3.6，器高 4.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→施釉	良好	～１㎜の砂粒少量	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	完形	○	
104	SD051	土製品	有孔土錘	残長 4.3，幅 1.4	—	—	～１㎜の砂粒	淡黄 2.5Y 8/3	上端部欠損	○	棒状
105	SD051	土製品	有孔土錘	残長 2.1，幅 1.0	—	—	～１㎜の白色砂粒	灰褐 7.5YR 5/2	端部片	○	棒状
106	SD051	土製品	土壁	残高 2.8，残幅 4.1	—	—	～３㎜の白色砂粒	橙 5YR 6/6	小片	○	
107	SD051	土製品	土壁	残高 2.2，残幅 4.0	—	—	～４㎜の砂粒	橙 5YR 6/6	小片	○	
108	SD051	土製品	輔羽口	残長 6.7，幅 3.6	オサエ，ナデ	—	～１㎜の白色砂粒少量	橙 7.5YR 7/6	上端部片	○	
109	SD051	石製品	砥石	残長 5.0，幅 2.7，重量 60.95g	—	—	細粒砂岩	黄灰 2.5Y 6/1	小片	○	砥面４面
110	SD051	石器	石核	長 3.6，幅 2.3，厚 1.4，重量 12.89g	—	—	黒曜石	黒 N 2/	完形	○	ローリングを受ける
111	SD051	鉄器	小刀	残長 10.6	鍛造	—	—	—	刃部～茎部片	○	
112	SD051	鉄製品	鉄釘	残長 5.3，幅 0.5	鍛造	—	—	—	頭部～先端部片	○	剥離著しい
113	SD052	弥生土器	甕	残高 5.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～１㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/2 外：橙 2.5YR 6/6	底部片		
114	SD052	須恵器	坏	復元底径 6.2，残高 0.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	～２㎜の白色砂粒	内：灰白 N 7/ 外：灰 N 6/	底部片		
115	SD052	須恵器	埦	復元底径 6.8，残高 1.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～１㎜の白色砂粒	内外：灰 5Y 6/1	底部～高台部片		
116	SD052	土師器	小皿	復元底径 7.6，器高 1.3	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	不良	～２㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR 8/2，褐灰 10YR 4/1 外：褐灰 10YR 4/1，にぶい橙 7.5YR 7/4	1/2 程度		
117	SD052	土師器	小皿	口径 9.0，底径 7.0，器高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	やや良好	～１㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/3 外：橙 5YR 6/6	2/3 程度		
118	SD052	土師器	小坏	残高 1.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り（板状圧痕）	やや不良	～２㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR 8/2 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	1/2 程度	○	
119	SD052	瓦器	埦	復元口径 16.0，残高 4.5	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	緻密	内：暗灰 N 3/ 外：にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部片	○	
120	SD052	鉄製品	鉄釘	残長 2.2，幅 0.9	鍛造	—	—	—	先端部片	○	
121	SD053	弥生土器	甕	復元底径 5.0，残高 3.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～３㎜の白色砂粒	内：灰白 2.5Y 7/1 外：淡赤橙 2.5YR 7/4	底部片	○	
122	SD053	土師器	甕	復元口径 20.6，残高 5.2	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→タタキ，オサエ	良好	～3.5㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/4，褐 7.5YR 4/3 外：にぶい橙 5YR 7/4	口縁部片	○	
123	SD053	須恵器	坏蓋	復元口径 13.0，残高 1.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～２㎜の白色砂粒	内外：灰 5Y 6/1	口縁部片		
124	SD053	須恵器	坏蓋	復元口径 12.0，残高 1.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	～３㎜の白色砂粒	内外：灰 5Y 5/1	天井部～口縁部片	○	
125	SD053	須恵器	坏身	復元底径 7.2，残高 2.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ→回転ヘラ切り	やや良好	～1.5㎜の白色砂粒	内：灰白 2.5Y 7/1 外：灰白 5Y 7/1	受部～底部片		
126	SD053	須恵器	埦	復元高台径 8.0，残高 1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～２㎜の白色砂粒	内外：灰 N 6/	高台部片		
127	SD053	須恵器	器台？	残高 4.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～４㎜の砂粒 ～１㎜白色砂粒	内：灰 N 6/ 外：灰黄 2.5Y 7/2	体部片	○	自然釉付着
128	SD053	須恵器	壺 or 甕	復元口径 13.4，残高 3.4	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ	良好	～２㎜の白色砂粒	内外：黄灰 2.5Y 6/1	口縁部～頸部片	○	
129	SD053	須恵器	壺 or 甕	残高 2.2	内：回転ナデ→（当具痕） 外：回転ナデ→カキメ	良好	～１㎜の白色砂粒	内：灰 N 6/ 外：灰 5Y 6/1	肩部片		

表３　出土遺物観察表３

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
130	SD053	須恵器	壺	残高 4.0	内：ロクロナデ→（当具痕）→ナデ 外：ロクロナデ→平行タタキ	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/2 外：にぶい黄橙 10YR 6/3	頸部～肩部片	○	
131	SD053	須恵器	甕	残高 3.3	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	～1㎜の砂粒	内：灰 N 5/ 外：灰 N 5/，灰黄 2.5Y 6/2	肩部片		
132	SD053	須恵器	甕	残高 16.4	内：回転ナデ→（青海波文当具痕） 外：回転ナデ→平行タタキ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：灰白 N 8/	胴部片	○	
133	SD053	緑釉陶器	碗	復元口径 14.8，残高 3.7	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	緻密	素地：浅黄橙 10YR 8/3 釉：オリーブ黄 7.5Y 6/3	口縁部～体部片	○	防長系
134	SD053	製塩土器		残高 3.6	内：ナデ→（布目痕） 外：ナデ→オサエ	良好	～1㎜の白色砂粒少量	内：にぶい黄橙 10YR 6/3 外：橙 7.5YR 7/6	胴部片	○	
135	SD053	土師器	小皿	復元口径 10.0，器高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	やや不良	～2㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/4 外：にぶい橙 5YR 7/4	1/3 程度		
136	SD053	土師器	小皿	復元口径 8.0，器高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内：橙 5YR 7/6，淡橙 5YR 8/4 外：橙 5YR 7/6	1/2 程度	○	
137	SD053	土師器	坏	復元口径 14.4，器高 3.4	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	不良	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/3 外：にぶい橙 7.5YR 7/2	1/4 程度	○	
138	SD053	土師器	埦	復元高台径 5.6，残高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～4㎜の透白色砂粒 ～1.5㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/3，橙 7.5YR 7/6 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	底部～高台部片		
139	SD053	土師器	埦	高台径 6.4，残高 1.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 10YR 8/3 外：灰白 10YR 8/2	底部～高台部片		
140	SD053	土師器	埦	復元高台径 7.0，残高 2.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～2.5㎜の透白色砂粒 ～1.5㎜の白色砂粒	内：灰褐 7.5YR 6/2 外：にぶい褐 7.5YR 6/3	体部～高台部片	○	
141	SD053	土師器	埦	底径 6.5，残高 2.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	～3㎜の白色砂粒	内外：灰白 7.5YR 8/2	体部～高台部片	○	
142	SD053	土師器	埦	復元高台径 7.2，残高 1.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/3 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	底部～高台部片		
143	SD053	瓦器	埦	復元高台径 7.2，残高 2.2	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	緻密	内外：灰白 2.5Y 8/1，灰 N 4/	底部～高台部片		
144	SD053	瓦器	埦	復元高台径 6.2，残高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR 8/2 外：灰白 10YR 8/1	底部～高台部片		
145	SD053	瓦質土器	鍋	残高 7.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～2㎜の黒色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/3 外：褐灰 10YR 4/1	口縁部～体部片	○	
146	SD053	白磁	碗	復元口径 16.8，残高 5.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～2㎜の砂粒	素地：灰白 N 8/ 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部～体部片	○	（Ⅳ）
147	SD053	白磁	碗	復元口径 16.2，残高 5.2	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～1㎜の砂粒	素地：灰白 N 7/ 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部～体部片	○	
148	SD053	白磁	碗	残高 2.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部片		
149	SD053	白磁	角坏（八角）	残高 2.6	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→タテハケ→施釉	良好	～1㎜の砂粒	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 8/1，褐灰 10YR 5/1	口縁部～体部片	○	
150	SD053	土製品	有孔土錘	長 4.9，幅 1.1	—	—	～1㎜の砂粒	にぶい褐 7.5YR 5/4	完形	○	棒状
151	SD053	土製品	有孔土錘	長 4.2，幅 1.1	—	—	～1㎜の白色砂粒	褐灰 10YR 4/1	完形	○	棒状
152	SD053	土製品	有孔土錘	長 4.0，幅 1.6	—	—	～5㎜の砂粒	灰白 2.5Y 7/1，黄灰 2.5Y 5/1	完形	○	棒状
153	SD053	土製品	有孔土錘	残長 5.2，幅 1.4	—	—	～2㎜の白色砂粒	にぶい黄橙 10YR 7/3	両端部欠損	○	棒状
154	SD053	土製品	有孔土錘	残長 2.5，幅 1.0	—	—	緻密	黒褐 2.5Y 3/2	端部片	○	棒状
155	SD053	石製品	砥石	残長 6.6，残幅 5.9，重量 71.94g	—	—	細粒砂岩	浅黄橙 10YR 8/3	小片	○	砥面 2 面
156	SD053	石製品	砥石	残長 17.9，幅 6.7，重量 569.64g	—	—	細粒砂岩	黄灰 2.5Y 6/1	3/4 程度	○	砥面 5 面
157	SD054	須恵器	高坏	残高 2.8	内：回転ナデ→オサエ 外：回転ナデ→透かし	良好	～1㎜の砂粒少量	内外：灰白 N 7/	底部～脚部片	○	4 方向に透窓
158	SD054	緑釉陶器	碗	残高 1.3	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰 N 6/ 釉：暗オリーブ灰 2.5GY 4/1	体部片	○	須恵質
159	SD054	土師器	小皿	復元口径10.6，復元底径8.7，残高 1.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り？（板状圧痕）	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR 7/3	1/4 程度		
160	SD054	土師器	坏	底径 6.2，残高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～4㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/4 外：浅黄橙 7.5YR 8/3	底部片	○	
161	SD054	土師器	坏	復元口径 5.2，残高 1.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～1㎜の黒色砂粒	内：褐灰 10YR 6/1 外：褐灰 7.5YR 5/1	底部片		
162	SD054	土師器	埦	復元底径 5.6，残高 2.9	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：灰白 10YR 8/2	体部～高台部片	○	
163	SD054	瓦器	小皿	復元口径 9.9，器高 1.7	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→オサエ，ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：黄灰 2.5Y 6/1 外：灰白 2.5Y 7/1	1/4 程度		
164	SD054	土師質土器	鍋	残高 3.8	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～3㎜の砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 6/3 外：にぶい黄褐 10YR 5/3	口縁部片		
165	SD054	須恵質土器	鉢	残高 3.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：灰白 N 7/，灰 N 4/ 外：灰白 N 7/	口縁部片	○	東播系
166	SD054	白磁	碗	復元口径 13.8，残高 2.4	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 8/1	口縁部～体部片	○	（Ⅳ）
167	SD054	白磁	碗	残高 2.9	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～2㎜の白色砂粒少量	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部～体部片		（Ⅳ）
168	SD054	白磁	碗	残高 2.3	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	口縁部～体部片		（Ⅱ-1）
169	SD054	青磁	碗	残高 2.4	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 7/1 釉：灰オリーブ 7.5Y 5/2	口縁部片		龍泉窯系（Ⅰ）
170	SD054	青磁	碗	残高 2.7	内：ロクロナデ→櫛点描文→施釉 外：ロクロナデ→櫛目文→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 7/1 釉：灰オリーブ 7.5Y 6/2	体部片	○	同安窯系（Ⅰ-1b）
171	SD055	須恵器	埦	復元高台径 8.2，残高 1.1	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：灰白 N 6/	底部～高台部片		
172	SD055	土師器	埦	復元口径 16.7，復元高台径 6.9，残高 5.0	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ，ヘラミガキ	良好	緻密	内：灰黄褐 10YR 5/2 外：褐灰 10YR 4/1	1/4 程度	○	

表４　出土遺物観察表４

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
173	SD055	土師器	埦	復元高台径 6.0，残高 2.0	内：ロクロナデ→オサエ 外：ロクロナデ	良好	～5㎜の白色砂粒 ～2㎜の赤色砂粒	内外：浅黄橙 7.5YR 8/6	底部～高台部片	○	
174	SD055	瓦質土器	壺	残高 2.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：黄灰 2.5Y 6/1，灰 N 4/	口縁部～頸部片		
175	SD055	石製品	不明	残長 4.8，残幅 2.5，重量 37.72g	―	―	滑石	褐灰 7.5YR 4/1，灰黄褐 10YR 6/2，黄橙 10YR 8/6	小片	○	石鍋再加工か
176	SD055	鉄製品	鉄釘	残長 6.1，幅 0.7	鍛造	―	―	―	先端部欠損	○	
177	SD056	土師器	坏	復元底径 6.2，残高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～2.5㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/4，にぶい褐 7.5YR 5/3 外：にぶい橙 7.5YR 7/4，にぶい橙 7.5YR 6/4	底部片		
178	SD056	土師質土器	鍋	残高 2.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	口縁部片		
179	SD056	須恵質土器	鉢	復元底径 10.6，残高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：灰白 N 7/	底部片	○	東播系
180	SD056	白磁	碗	復元高台径 5.6，残高 1.6	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→ヘラケズリ	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/2 釉：灰白 2.5Y 8/2	高台部片		（Ⅳ）
181	SD057	白磁	碗	残高 1.9	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 N 8/ 釉：灰白 5Y 7/1	口縁部片		（Ⅳ）
182	SD057	白磁	皿	残高 1.5	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 8/1 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部片		（Ⅱ-2）
183	SD057	白磁	皿	復元高台径 4.8，残高 2.2	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～1㎜の黒色砂粒	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	体部～高台部片	○	（Ⅲ-2）
184	SD057	土製品	有孔土錘	長 4.5，幅 1.25	―	―	緻密	灰白 5Y 7/1，灰 N 6/	完形	○	棒状
185	SD058	土師器	小皿	復元口径 9.6，器高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：灰白 10YR 8/2	2/3 程度	○	
186	SD058	土師器	坏	復元口径 14.4，残高 3.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り？	良好	～3.5㎜の白色砂粒	内：橙 5YR 7/6 外：橙 5YR 7/8	1/4 程度	○	
187	SD058	土師器	坏	復元底径 6.0，残高 1.6	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～3㎜の透白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/4 外：灰褐 7.5YR 4/2	体部～底部片	○	
188	SD058	土師器	坏	底径 6.4，残高 2.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り（板状圧痕）	良好	～3㎜の赤色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/4 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	底部片	○	
189	SD058	土師器	坏	底径 5.8，残高 2.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～2㎜の透白色砂粒	内：にぶい橙 5YR 6/4 外：橙 5YR 6/6	底部片	○	
190	SD058	土師器	埦	口径 16.7，高台径 6.2，器高 6.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	～4㎜の白色砂粒	内外：淡橙 5YR 8/3	ほぼ完形	○	
191	SD058	土師器	埦	底径 6.6，残高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/2 外：灰黄褐 10YR 5/2	底部片	○	
192	SD058	土師器	埦	高台径 6.6，残高 2.15	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～4㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR 8/2 外：浅黄橙 7.5YR 8/3	底部～高台部片	○	
193	SD058	土師器	埦	復元高台径 5.8，残高 1.9	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	緻密	内外：灰白 10YR 8/2	底部～高台部片	○	
194	SD058	瓦器	埦	復元高台径 5.5，残高 1.7	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ	良好	～1㎜の白色砂粒少量	内：褐灰 10YR 4/1 外：褐灰 10YR 6/1	底部～高台部片	○	
195	SD058	瓦器	埦	高台径 6.6，残高 2.1	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰白 2.5Y 7/1 外：灰 5Y 5/1	底部～高台部片	○	
196	SD058	白磁	碗	残高 3.2	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 8/1 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部片	○	（Ⅳ）
197	SD058	白磁	碗	残高 4.5	内：ロクロナデ→櫛目文→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰オリーブ 5Y 6/2	口縁部～体部片	○	（Ⅴ-4b）
198	SD058	白磁	碗	残高 3.5	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→ヘラ描文→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	体部～高台部片	○	（Ⅴ-3）
199	SD058	白磁	碗	復元高台径 6.8，残高 1.7	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰白 5Y 7/2	体部～高台部片	○	
200	SD058	青磁	碗	復元口径 14.0，残高 3.3	内：ロクロナデ→片彫雲文・櫛描文→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 7/1 釉：オリーブ黄 5Y 6/3	口縁部～体部片	○	龍泉窯系（Ⅰ-3a）
201	SD058	青磁	碗	復元口径 13.4，残高 3.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/1 釉：灰白 2.5Y 8/2，青灰 10BG 6/1	口縁部～体部片	○	
202	SD058	陶器	盤	残高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	緻密	内外：灰褐 7.5YR 4/2	口縁部片	○	中国陶器
203	SD058	土製品	有孔土錘	残長 4.4，幅 1.4	―	―	～1㎜の白色砂粒	橙 7.5YR 6/6	両端部欠損	○	棒状
204	SD058	土製品	有孔土錘	残長 3.7，幅 1.15	―	―	～1㎜の白色砂粒	黒褐 2.5Y 3/1	上端部欠損	○	棒状
205	SD058	土製品	有孔土錘	残長 3.3，幅 1.1	―	―	～1㎜の白色砂粒	灰白 10YR 8/2，褐灰 10YR 6/1	両端部欠損	○	棒状
206	SD059	弥生土器	壺	底径 6.7，残高 5.3	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2㎜の透白色砂粒	内：灰白 10YR 7/1 外：橙 2.5YR 6/6	胴部～底部片	○	
207	SD059	土師器	坏	口径 11.8，底径 7.1，器高 3.4	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転ヘラ切り（板状圧痕）	良好	～3㎜の透白色砂粒 ～1㎜の白色砂粒	内：橙 5YR 6/6，黄灰 2.5Y 4/1 外：橙 5YR 6/6，明赤褐 5YR 5/6	ほぼ完形	○	
208	SD063	土師器	埦	復元高台径 6.4，残高 1.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	～2㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/3 外：浅黄橙 7.5YR 8/4	底部～高台部片	○	
209	SD063	土師質土器	鍋	残高 2.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：灰褐 7.5YR 4/2	口縁部片	○	
210	SD063	白磁	碗	復元口径 15.0，残高 2.9	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	口縁部～体部片	○	（Ⅳ）
211	SD063	白磁	皿	復元口径 8.4，残高 1.6	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰オリーブ 5Y 6/2	口縁部片	○	（Ⅱ-1a）
212	SD064 SX084	須恵器	壺	残高 5.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ→オサエ	良好	～1.5㎜の白色砂粒	内：灰 N 6/ 外：灰 N 5/	口縁部～頸部片	○	
213	SD064 SX084	土師器	坏	復元底径 6.6，残高 0.9	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～2㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/3 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	底部片	○	
214	SD064 SX084	瓦器	埦	復元高台径 6.6，残高 1.6	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→ナデ	やや良好	～5㎜の透白色砂粒 ～1.5㎜の白色砂粒	内：灰 N 5/，灰白 5Y 8/1 外：灰白 2.5Y 8/2	底部～高台部片	○	
215	SD064 SX084	須恵質土器	鉢	残高 3.2	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒 ～2㎜の透白色砂粒	内：灰白 2.5Y 7/1 外：灰白 2.5Y 7/1，暗灰 N 3/	口縁部片	○	東播系

表５　出土遺物観察表５

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
216	SD064 SX084	白磁	碗	残高 3.0	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部片	○	（Ⅳ）
217	SD064 SX084	白磁	碗	復元口径 13.8，残高 3.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 8/1 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部～ 体部片	○	
218	SD064 SX084	土製品	有孔土錘	残長 4.4，残幅 1.8	—	—	緻密	にぶい黄橙 10YR 7/3	ほぼ完形	○	棒状
219	SD064 SX084	土製品	有孔土錘	残長 3.8，残幅 1.9	—	—	緻密	にぶい黄橙 10YR 7/2	両端部欠損	○	棒状
220	SD065	土師器	埦	復元高台径 6.8，残高 1.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～5.5㎜の赤色砂粒 ～2㎜の透白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	底部～ 高台部片	○	
221	SA071	瓦器	埦	復元高台径 6.2，残高 2.9	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	～5㎜の砂粒	内：褐灰 10YR 6/1 外：灰黄褐 10YR 6/2，にぶい橙 2.5YR 6/4	体部～ 高台部片	○	
222	SA071	瓦器	埦	復元高台径 6.8，残高 1.8	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ，ナデ	良好	～3.5㎜の白色砂粒	内：灰白 N 8/ 外：灰白 N 8/，灰 N 6/	底部～ 高台部片	○	
223	SA071	瓦器	埦	復元高台径 7.4，残高 2.4	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～5㎜の透白色砂粒 多量	内：灰白 10YR 8/1 外：灰白 10YR 8/1，褐灰 10YR 6/1	底部～ 高台部片	○	
224	SA071	石器	凹石	長 9.9，幅 7.8，厚 3.6，重量 319.17g	—	—	—	—	完形	○	
225	SX081	土師質 土器	鍋	残高 1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～4㎜の透白色砂粒 多量	内外：灰黄褐 10YR 4/2	口縁部片	○	
226	SX081	須恵質 土器	瓶？	復元底径 11.6，残高 4.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ナデ，回転ヘラケズリ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：灰白 5Y 7/1	胴部～ 底部片	○	
227	SP134	須恵器	埦	復元高台径 8.5，残高 1.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	緻密	内：灰 5Y 4/1 外：灰 N 6/	底部～ 高台部片	○	
228	SP131	土師器	小皿	復元口径 8.6，器高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～0.5㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部～ 底部片	○	
229	SP106	瓦器	埦	復元高台径 6.4，残高 0.8	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ	良好	緻密	内：暗黒 N 3/ 外：灰黄褐 10YR 5/2	底部～ 高台部片	○	
230	SP112	土師質 土器	鍋	残高 3.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：にぶい黄褐 10YR 5/3 外：にぶい黄褐 10YR 4/3	口縁部片	○	
231	SP118	白磁	碗	残高 3.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部～ 体部片	○	
232	SP106	白磁	碗	復元高台径 6.0，残高 2.0	内：ロクロナデ→櫛描文→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	底部～ 高台部片	○	（Ⅴ-4b）
233	SP128	白磁	壺	残高 5.4	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰黄 2.5Y 7/2 釉：にぶい黄 2.5Y 6/3	胴部片	○	
234	表土	弥生土器	壺	復元底径 11.5，残高 5.7	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ→ハケ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 10YR 8/3 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	頸部～ 肩部片	○	
235	表土	土師器	高坏	残高 2.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ→オサエ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	坏部片		
236	表土	土師器	高坏	残高 4.2	内：回転ナデ→オサエ 外：回転ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒 ～1㎜の透白色砂粒	内外：明赤褐 2.5YR 5/6	脚部片		
237	表土	土師器	甑	残高 5.6	ナデ，オサエ	良好	～3㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR 7/3	把手片	○	
238	表土	土師器	手捏土器	残高 1.4	内：ナデ，オサエ 外：ナデ，オサエ	やや不良	緻密	内：浅黄橙 10YR 8/3 外：灰白 10YR 8/2	体部～ 底部片		
239	表土	須恵器	壺 or 瓶	復元頸部径 5.4，残高 3.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰 N 6/ 外：黄灰 2.5Y 6/1	頸部片	○	
240	表土	須恵器	硯	残長 5.4，残幅 8.0，残厚 0.7	—	—	～3㎜の白色砂粒	内：灰赤 2.5YR 4/2，褐灰 10YR 4/1 外：褐灰 10YR 6/1，褐灰 10YR 5/1	1/3 程度	○	猿面硯
241	表土	緑釉陶器	碗	残高 1.8	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	緻密	素地：橙 7.5YR 6/6 釉：明緑灰 7.5GY 7/1	口縁部片	○	防長系
242	表土	緑釉陶器	碗	残高 2.3	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 7/1 釉：浅黄 7.5Y 7/3	体部片		防長系
243	表土	緑釉陶器	碗	復元高台径 7.0，残高 2.7	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/2 釉：灰白 10Y 7/2	底部～ 高台部片	○	防長系
244	表土	緑釉陶器	碗	残高 0.7	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 N 7/ 釉：明緑灰 7.5GY 7/1	高台部片	○	須恵質
245	表土	土師器	埦	復元底径 8.4，残高 2.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～3㎜の白色砂粒	内：浅黄橙 7.5YR 8/3 外：浅黄橙 7.5YR 8/4	底部～ 高台部片	○	
246	表土	土師器	埦	復元高台径 6.8，残高 2.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～1㎜の黒色砂粒	内：浅黄橙 10YR 8/3 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	底部～ 高台部片	○	
247	表土	黒色土器	埦	高台径 6.7，残高 1.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	～1.5㎜の白色砂粒	内：にぶい橙 7.5YR 7/3 外：灰 N 4/	底部～ 高台部片	○	内黒
248	表土	瓦器	埦	口径 15.2，高台径 6.1，器高 5.4	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	緻密	内外：暗灰 N 3/	ほぼ完形	○	
249	表土	瓦器	埦	残高 1.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや良好	緻密	内：灰 N 4/ 外：にぶい黄橙 10YR 7/3	底部～ 高台部片		
250	表土	瓦器	埦	高台径 6.5，残高 1.5	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：灰黄褐 10YR 6/2 外：灰白 10YR 8/2	底部～ 高台部片		
251	表土	瓦器	埦	復元高台径 6.6，残高 1.1	内：ロクロナデ→ヘラミガキ 外：ロクロナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：暗灰 N 3/ 外：褐灰 10YR 5/1	底部～ 高台部片		
252	表土	土師質 土器	鍋	残高 3.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部片		
253	表土	土師質 土器	鍋	残高 3.1	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→オサエ	良好	～1㎜の白色砂粒	内外：褐灰 7.5YR 5/1	口縁部～ 体部片		
254	表土	土師質 土器	鍋	残高 8.8	内：回転ナデ→ヨコハケ 外：回転ナデ→ハケ，オサエ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰白 10YR 8/2 外：にぶい橙 7.5YR 7/3	口縁部～ 体部片	○	
255	表土	土師質 土器	足鍋	残高 6.6	ナデ，オサエ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：橙 2.5YR 6/6，7.5YR 6/6	脚部片	○	
256	表土	瓦質土器	鉢	残高 3.6	内：回転ナデ→ヨコハケ，ナナメハケ 外：回転ナデ→オサエ	やや不良	～1㎜の白色砂粒	内外：灰白 10YR 8/2	口縁部片		
257	表土	瓦質土器	鉢	残高 4.8	内：回転ナデ→ヨコハケ，ナナメハケ 外：回転ナデ→オサエ	やや不良	～2㎜の白色砂粒 ～3㎜の透白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部片		
258	表土	陶器	擂鉢	残高 2.7	内：回転ナデ→擂目施文 外：回転ナデ→オサエ	良好	～4㎜の白色砂粒	内外：灰 5Y 6/1	底部片	○	備前？

表６　出土遺物観察表６

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法　量（cm）	調　整	焼成	胎　土	色　調	残　存	写真	備考
259	表土	白磁	碗	復元口径 16.6，残高 4.0	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰白 5Y 7/1	口縁部～体部片	○	（Ⅳ）
260	表土	白磁	碗	復元口径 15.8，残高 2.8	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 6/1 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部片	○	（Ⅳ）
261	表土	白磁	碗	復元口径 15.0，残高 3.0	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→縦蹠花弁文→施釉	良好	緻密	素地：灰白 N 8/ 釉：明オリーブ灰 2.5GY 7/1	口縁部片		（Ⅴ-2b）
262	表土	白磁	碗	残高 4.5	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→縦蹠花弁文→施釉	良好	緻密	素地：灰白 10Y 8/1 釉：灰白 7.5Y 7/1	口縁部～体部片	○	（Ⅴ-2b）
263	表土	白磁	碗	残高 3.5	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→縦蹠花弁文→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰白 5Y 7/2	体部片	○	（Ⅴ-2b）
264	表土	白磁	碗	復元口径 13.4，残高 3.1	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部～体部片		（Ⅴ）
265	表土	白磁	碗	復元底径 7.0，残高 2.4	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→ケズリ→施釉	良好	～1㎜の黒色砂粒	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰白 7.5Y 7/1	底部～高台部片	○	（Ⅳ）
266	表土	白磁	碗	復元高台径 5.2，残高 2.9	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 7/1 釉：灰 7.5Y 6/1	底部～高台部片		
267	表土	白磁	皿	復元口径 8.4，残高 2.4	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/2	口縁部～体部片		（Ⅱ-2）
268	表土	白磁	皿	高台径 4.2，残高 1.15	内：ロクロナデ→施釉→釉掻き取り 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 8/2 釉：灰白 5Y 7/2	底部～高台部片	○	（Ⅲ-1）
269	表土	青磁	碗	復元口径 16.6，残高 5.1	内：ロクロナデ→飛雲文→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 7/1 釉：灰オリーブ 7.5Y 5/2	口縁部～体部片	○	龍泉窯系（Ⅰ-4b）
270	表土	青磁	碗	残高 3.4	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 2.5Y 7/1 釉：灰オリーブ 5Y 5/2	体部～底部片		龍泉窯系（Ⅰ）
271	表土	青磁	碗	高台径 4.8，残高 2.7	内：ロクロナデ→施釉→釉掻き取り 外：ロクロナデ→ケズリ→施釉	良好	緻密	素地：にぶい黄橙 10YR 7/2 釉：緑灰 10GY 6/1，灰オリーブ 7.5Y 6/2	体部～高台部	○	
272	表土	青磁	碗	復元高台径 5.6，残高 2.4	内：ロクロナデ→施釉→釉掻き取り 外：ロクロナデ→施釉	良好	緻密	素地：灰白 5Y 7/1 釉：灰オリーブ 7.5Y 6/2	底部～高台部片	○	
273	表土	陶器	水注 or 耳壺	残高 4.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→施釉	良好	～1㎜の白色砂粒	素地：灰 5Y 6/1 釉：黒褐 10YR 3/2	胴部片	○	中国陶器
274	表土	陶器	壺	復元底径 9.0，残高 5.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ→施釉	良好	～1㎜の白色砂粒	素地：灰黄褐 10YR 6/2 釉：灰オリーブ 5Y 6/2	胴部～底部片	○	中国陶器
275	表土	白磁	紅皿	復元口径5.6，復元高台径2.1，残高2.25	内：型成形→施釉 外：型成形→施釉	良好	緻密	素地：灰白 7.5Y 8/1 釉：灰白 5Y 7/1	1/3 程度	○	近世
276	表土	土製品	有孔土錘	長 5.2，幅 1.3	—	—	緻密	黄灰 2.5Y 4/1，浅黄 2.5Y 7/3	完形	○	棒状
277	表土	土製品	有孔土錘	長 4.5，幅 1.2	—	—	～1㎜の白色砂粒	黒褐 10YR 3/1	ほぼ完形	○	棒状
278	表土	土製品	有孔土錘	長 4.2，幅 1.6	—	—	緻密	褐灰 10YR 4/1	完形	○	棒状
279	表土	土製品	有孔土錘	長 3.8，幅 1.5	—	—	～3㎜の白色砂粒	浅黄 2.5Y 7/3，暗灰黄 2.5Y 5/2	ほぼ完形	○	棒状
280	表土	土製品	有孔土錘	長 4.4，幅 1.25	—	—	～1㎜の白色砂粒	黒褐 2.5Y 3/1	完形	○	棒状
281	表土	土製品	有孔土錘	残長 3.9，幅 1.2	—	—	緻密	黒褐 2.5Y 3/1	上端部欠損	○	棒状
282	表土	土製品	有孔土錘	残長 3.7，幅 1.2	—	—	緻密	黄灰 2.5Y 6/1	1/2 程度	○	棒状
283	表土	土製品	有孔土錘	残長 2.9，幅 1.5	—	—	～1㎜の砂粒	にぶい黄橙 10YR 7/2，褐灰 10YR 4/1	両端部欠損	○	棒状
284	表土	土製品	有孔土錘	残長 3.1，幅 1.4	—	—	緻密	黒褐 10YR 3/1	両端部欠損	○	棒状
285	表土	土製品	有孔土錘	残長 3.1，幅 1.1	—	—	緻密	暗灰 N 3/	上端部欠損	○	棒状
286	表土	土製品	有孔土錘	残長 2.5，幅 0.8	—	—	緻密	黒褐 2.5Y 3/1	両端部欠損	○	棒状
287	表土	土製品	鞴羽口	残長 4.2，残幅 3.4	—	—	—	—	小片	○	
288	表土	石製品	石鍋	残高 2.6	ケズリ	—	滑石	内：灰 N 6/ 外：黒褐 2.5Y 3/1	口縁部片	○	外面スス
289	表土	石器	石庖丁	残長 7.5，残幅 5.1，残厚 0.6，重量 32.58g	—	—	頁岩質砂岩	灰黄褐 10YR 4/2，灰白 7.5Y 7/1	1/2 程度	○	
290	表土	鉄器	鉄鏃	残長 4.3，残幅 2.3	鍛造	—	—	—	切先～茎部片	○	雁股形
291	表土	鉄製品	鉄釘	長 5.6，幅 1.0	鍛造	—	—	—	ほぼ完形	○	
292	包含層トレンチ南	須恵器	埦	口径 14.4，復元底径 11.0，器高 4.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～2㎜の白色砂粒	内外：黄灰 2.5Y 6/1	1/4 程度	○	
293	包含層トレンチ南	須恵器	埦	復元高台径 8.8，残高 2.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～5㎜の透白色砂粒 ～1㎜の白色砂粒	内：黄灰 2.5Y 6/1 外：灰白 2.5Y 7/1	体部～高台部片	○	
294	包含層トレンチ南	須恵器	壺	復元頸部径 11.2，残高 5.4	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～1㎜の白色砂粒	内：灰白 N 7/ 外：灰白 5Y 6/1	頸部～肩部片	○	
295	包含層トレンチ南	緑釉陶器	埦	残高 3.0	内：回転ナデ→施釉 外：回転ナデ→施釉	良好	～1㎜の白色砂粒	素地：灰 N 6/ 釉：オリーブ黒 10Y 3/2	口縁部～体部片	○	須恵質
296	包含層トレンチ南	緑釉陶器	埦	復元高台径 7.0，残高 0.7	内：ナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	～1㎜の白色砂粒	素地：浅黄橙 10YR 8/3 釉：明オリーブ灰 2.5GY 7/1	底部～高台部片	○	防長系
297	包含層トレンチ南	土師器	小皿	復元口径 8.9，底径 6.1，器高 0.9	内：ロクロナデ→ナデ 外：ロクロナデ→回転糸切り	良好	～3㎜の白色砂粒	内：橙 7.5YR 7/6 外：橙 5YR 6/8	2/3 程度	○	
298	包含層トレンチ南	土師器	埦	復元高台径 6.4，残高 2.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	良好	～4㎜の透白色砂粒 ～3㎜の白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR 6/4	底部～高台部片	○	
299	包含層トレンチ南	瓦器	埦	口径 16.5，底径 6.5，器高 5.7	内：回転ナデ→ヘラミガキ 外：回転ナデ→ヘラミガキ	良好	～2㎜の白色砂粒	内：黄灰 2.5Y 6/1，灰 7.5Y 4/1 外：黄灰 2.5Y 6/1，灰 N 4/	ほぼ完形	○	
300	包含層トレンチ南	土製品	有孔土錘	長 4.0，幅 1.25	—	—	～1㎜の白色砂粒	黒褐 7.5YR 2/2	完形	○	棒状
301	包含層トレンチ南	土製品	有孔土錘	残長 3.0，残幅 1.5	—	—	～2㎜の白色砂粒	黒褐 7.5YR 3/2，明褐 7.5YR 5/8	1/2 程度	○	棒状

表７　出土遺物観察表７

第4章　結　語

以上、辻垣下出口遺跡の発掘調査成果を報告してきた。今回の調査では掘立柱建物1棟、土坑24基、井戸1基、溝15条、柵列2条、多くの柱穴など、多様な遺構を検出した。出土遺物は縄文時代の石器、弥生土器や近世の磁器なども若干含むが、概ね古墳時代から鎌倉時代に位置付けられ、特に平安時代から鎌倉時代初頭の遺物が多く出土した。

遺構の内容は報告してきた通りだが、集落を構成したと考えられる遺構は掘立柱建物1棟、土坑数基（2段掘りのSK011は井戸の可能性あり）、井戸1基、柵列2条であり、土坑の多く、溝、不明遺構などは深さが数㎝から20㎝ほどしかなく、多くは流路の底面と考えられる。辻垣下出口遺跡は京都平野を北流する祓川下流域東岸の標高10m以下に立地し、祓川の流れによって運ばれた土砂が堆積した三角州上に形成された遺跡である。近年の祓川下流域における洪水の発生事例は管見に及ばないが、往時の流路は現在より蛇行し、流域がたびたび洪水の被害に見舞われたことは想像に難くない。すなわち当地は祓川の氾濫原であり、その流路の底面の痕跡が本書で報告した遺構の大半といえる。このことは、周辺で調査が行われた複数の遺跡に共通する。国道10号線の行橋バイパスや椎田道路建設に先立ち発掘調査された津留遺跡、辻垣ヲサマル遺跡など、本遺跡と同様に元永地区の県営ほ場整備事業で発掘調査された津留足尾遺跡、辻垣下河原遺跡などでも同様の流路痕跡が確認されている。この流路跡に伴って出土した遺物は、洪水で被災した集落より副次的にもたらされたものが大半と考えられよう。

出土遺物は上記したように古墳時代から鎌倉時代に比定されるものが多く、特に平安時代から鎌倉時代でも初頭までの遺物が大半を占める。平安時代頃の特筆すべき遺物として、須恵器の甕を再加工した猿面硯が挙げられる。猿面硯の出土は行橋市内でも初例であり、硯自体の出土も福原長者原官衙遺跡や延永ヤヨミ園遺跡など数点しかない希少品である。また一般的に奢侈品と考えられている緑釉陶器も比較的多く出土したが、土師質の防長産に加え、篠窯や洛西窯など畿内産、または近江産と考えられる須恵質の緑釉陶器が3片出土したことは特筆に値する。このことは古代仲津郡の支配者層の一部が近隣にいた証左であり、あるいは公的施設の存在も予感させるものである。また、出土遺物の中で目立つのが中国産の白磁である。主に平安時代後期から鎌倉時代初頭の12世紀に比定されるものであり、共伴する青磁も同安窯系、また龍泉窯系でも蓮弁文を持たない12世紀までのものに限られることは注目に値する。

以上のことから、辻垣下出口遺跡の調査成果を総括すると、調査地点は祓川の氾濫原で、集落も営まれたが、たびたびの洪水に見舞われた。平安時代前期には仲津郡の公的施設が近隣に存在した可能性があり、平安時代後期から鎌倉時代初頭には調査地も含め周辺で集落が営まれたが、13世紀以降は田畑となり、今井まで一連の条里として開墾され、現在に至っていることが分かった。

巻末にあたり、報告者として大変心残りなのは、調査当時に遺跡現地に立てなかったことである。柱穴が多くあるのに掘立柱建物の検証が全くできず、この遺構からこの遺物が出土した、という短調的な報告になってしまった。こういった本書ではあるが、地域史発展の一助になることを願っている。

図　版

（1947 年 3 月 11 日撮影　写真名 USA-M122-2　国土地理院ウェブサイトより）

辻垣下出口遺跡の位置

図版２　空中写真

辻垣下出口遺跡全景（上が南東）

1.　SK011 遺物出土状況
（南東から）

2.　SK011（南東から）

3.　SE041（南東から）

図版４　　溝

1.　SD051（南西から）

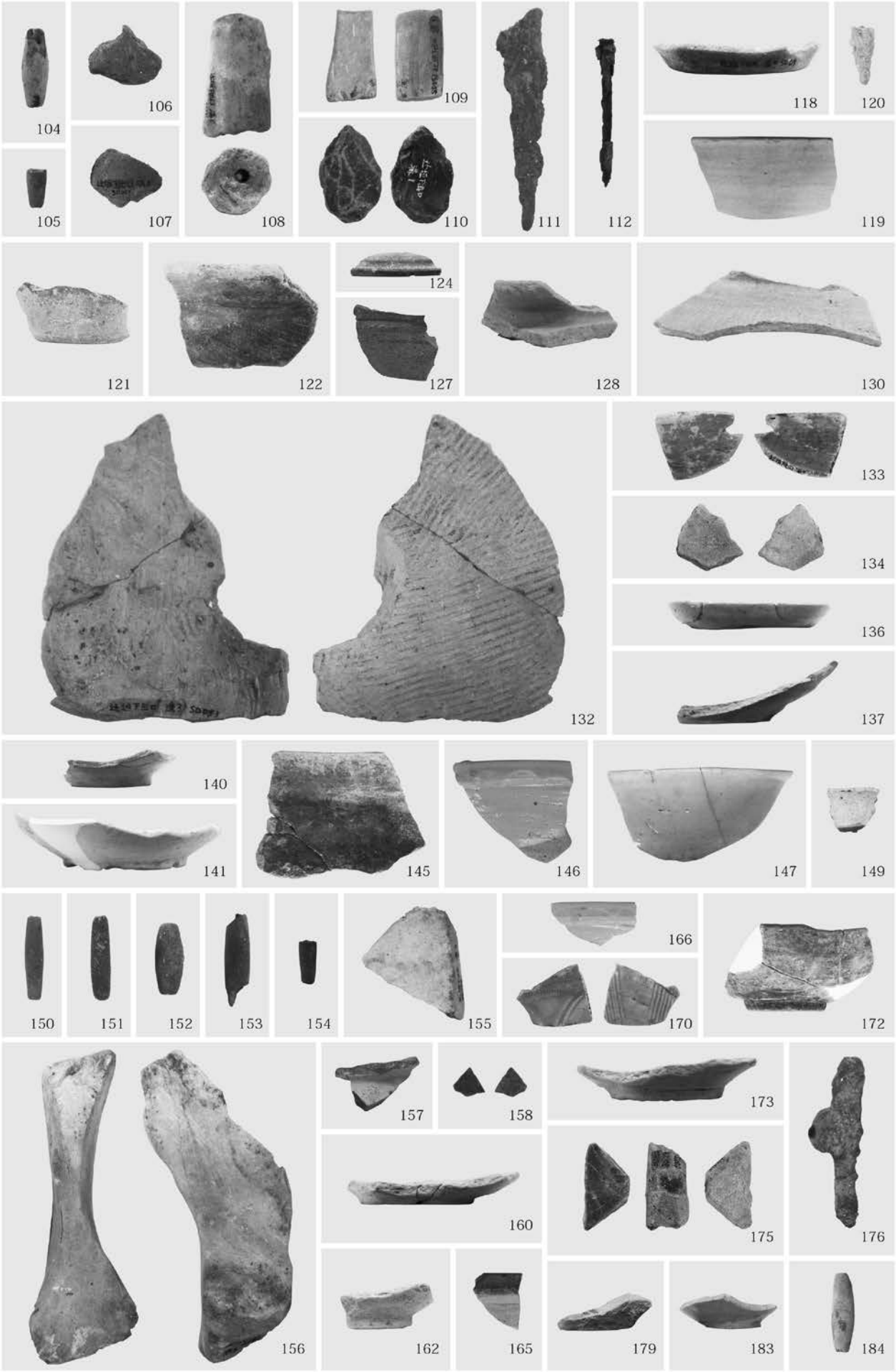
2.　SD051 白磁小壺出土状況

3.　SD052（北東から）

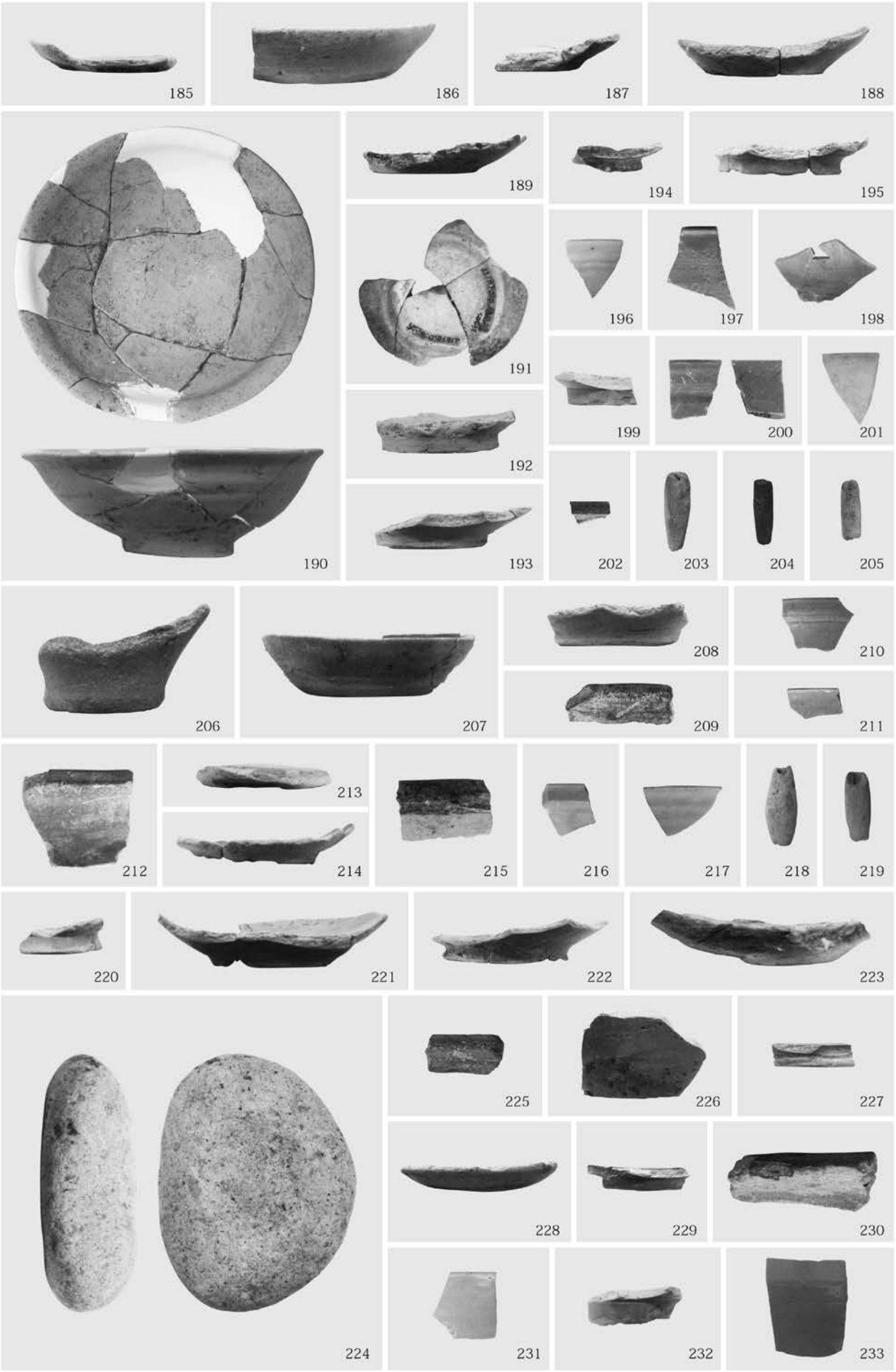
1
3
5
2
4
9
11
12
15
21
16
24
23
25
28
34
38
39
44
29
32
37
43
46
47
48
51
58
63
50
64
67
70
71
77
78
79
83
84
85
86
95
97
99
103

出土遺物 1

図版６　出土遺物

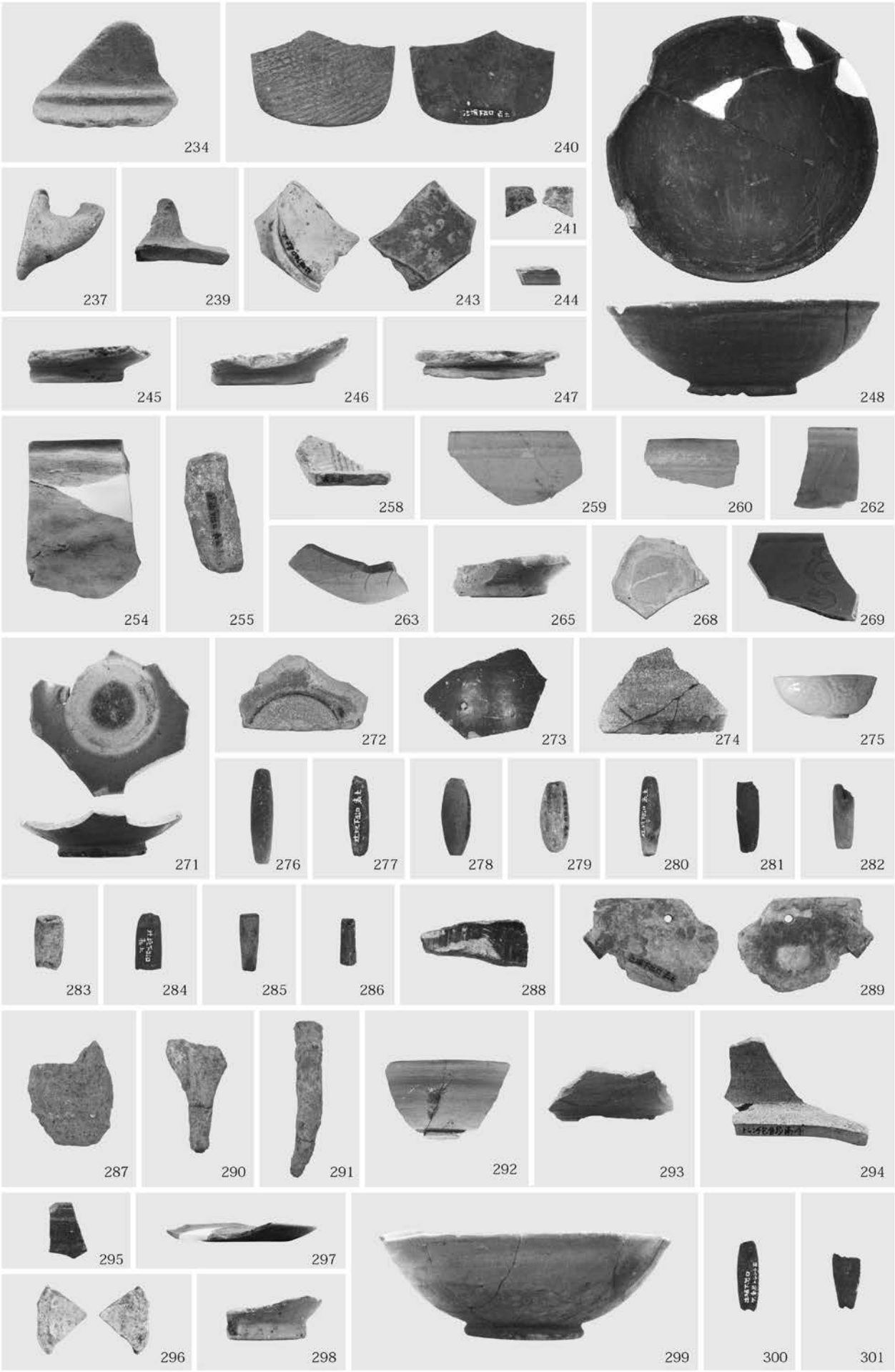


出土遺物２


185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233

出土遺物３

図版８　出土遺物



出土遺物４

報 告 書 抄 録

ふりがな	つじがきしもでぐちいせき
書名	辻垣下出口遺跡
副書名	県営ほ場整備事業（元永地区）関係埋蔵文化財発掘調査報告３
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 66 集
編著者名	山口裕平
編集機関	行橋市教育委員会
所在地	〒 824-8601　福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号　TEL 0930-25-1111　FAX 0930-25-1582
発行年月日	2020 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
つじがきしもでぐちいせき 辻垣下出口遺跡	福岡県行橋市 大字辻垣 527・ 528・529・536 番地	402133	14046004	33° 42′ 21″	130° 00′ 21″	20010417 ～ 20010903	4,900㎡	県営ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
辻垣下出口遺跡	集落 流路	弥生時代～鎌倉時代	掘立柱建物、土坑、井戸、溝、柵列、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器（白磁・青磁・陶器）、石庖丁、砥石、鉄釘	猿面硯が出土

要約	京都平野北部を北流する、祓川下流域東岸の三角州（標高約 10m）に立地する。 主に弥生時代～鎌倉時代に至る、遺構、遺物を検出したが、平安時代から鎌倉時代初頭に盛期を認められる。 集落を形成する遺構は掘立柱建物、井戸などがあるが、本調査区は祓川の氾濫原であったと考えらえ、流路跡と考えられる帯状の浅い土坑、溝を多く検出した。遺物の大半はこの流路跡に伴うものである。 特筆すべき遺物に、８～９世紀頃に位置づけられる須恵器の猿面硯がある。緑釉陶器も防長産に加えて畿内産や近江産を含み、古代仲津郡の公的施設が近隣に所在したと考えられる。 出土する輸入陶磁器は白磁を中心とし、蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁をまったく含まないことから、12 世紀末頃の鎌倉時代初頭には集落は廃絶し、田畑になったと考えられる。

2020年（令和２年）３月31日　発行

辻垣下出口遺跡

行橋市文化財調査報告書 第66集

著作権所有　福岡県行橋市中央一丁目１番１号
発　行　　行橋市教育委員会

印　刷　　福岡県行橋市大橋三丁目１番18号
株式会社 はら印刷